櫻島

梅崎春生

月曜書房版

櫻島

梅崎春生

月曜書房版

櫻　島

昭和24年3月25日　印刷
昭和24年3月30日　發行

著作者　梅崎春生
發行者　前田隆治
印刷者　藤本翠

東京都千代田區神田神保町2の36
株式會社　月曜書房
振替口座東京195181番
電話九段(33)4428番

定價170圓

印刷　藤本印刷株式會社　・　製本　手塚製本有限社會

目次

櫻島……一
微生……八三
崖……一三七
贋の季節……一八七
あとがき……二三二

裝釘　廣本森雄

櫻

島

七月初、坊津にゐた。往昔、遣唐使が船出をしたところである。その小さな美しい港を見下す峠で、基地隊の基地通信に當つてゐた。私は、暗號員であつた。毎日、崖を滑り降りて魚釣りに行つたり、山に楊梅を取りに行つたり、朝夕峠を通る坊津郵便局の女事務員と仲良くなつたり、よそめにはのんびりと日を過した。電報は少なかつた。日に一通か二通。無い時もあつた。此のやうな生活しながらも、目に見えぬ何物かが次第に輪を狹めて身體を緊めつけて來るのを、私は痛いほど感じ始めた。齒ぎしりするやうな氣持で、私は連日遊び呆けた。日に一度は必ず、米軍の飛行機が鋭どい音を響かせながら、峠の上を翔つた。ふり仰ぐと、初夏の光を吸ふた翼のいろが、ナイフのやうに不氣味に光つた。

或る朝、一通の電報が來た。

海軍暗號書、「勇」を取り出して、私が飜譯した。

「村上兵曹櫻島ニ轉勤ニ付至急谷山本部ニ歸投サレ度」

午後、交替の田上兵長が到着した。

その夜、私はアルコールに水を割つて、ひとり痛飲した。泥醉して峠の道を踏んだ時、よろめいて一間ほど崖を滑り落ちた。瞼が切れて、血が隨分流れた。窪地に仰向きになつたまま、凄ましい程冴えた月のいろを見た。醉つて斷れ斷れになつた意識の中で、私は必死になつて荒涼たる何物かを追つかけてゐた。

翌朝、醫務室で瞼を簡單に治療して貰ひ、そして峠を出發した。徒歩で枕崎に出るのである。生涯再びは見る事もない此の坊津の風景は、おそろしいほど新鮮であつた。私は何度も振り返り、その度の展望に目を見張つた。何故此のやうに風景が活き活きしてゐるのであらう。胸を嚙むにがいものを感じながら、私は思つた。此の基地でいろいろ考へ、また感じたことのうちで、此の思ひだけが眞實ではないのか。たとひその中に、訣別といふ感傷が私の肉眼を多分に歪めてゐたとしても——

枕崎から汽車に乘つて、或る小さな町についた。そこでバスに乘り換へるのである。しかし日に一回のそのバスが、もはや、過したあとであつた。

軍隊のトラックを呼び止めて、それに便乘する手は殘つてゐた。しかしそれも物倦く、街の

中央にある旅館に入つて行つた。そして飯をたべた。縁側に立つて、夕方の空のいろを眺めてゐると、通りかかつた若い海軍士官が私に聲かけて來た。私は、私の旅行の用向きを答へた。それから此の士官の部屋に行き、煎豆を嚙みながら、暫く雜談をした。

やはり坊津の、山の上にある挺身監視隊長、谷中尉と言つた。背が低い、がつしりした、目の大きい男である。二十三四歳に見えた。先日、博多が空襲にあつた際、博多武官府にゐたと言ふ。その時の話をした。博多は、私の古里であり、博多にゐる私の知己や友人のことを思ひ、心が痛んだ。

「美しく死ぬ、美しく死にたい、これは感傷に過ぎんね」

谷中尉は、煎豆の殼をはき出しながら、じろりと私の顏を眺め、さう言つた。

日が暮れた。そして一泊することに、心をきめた。遊ばうと言ふので、宿屋を出て、驛の裏手にあると言ふ妓樓に出掛けて行つた。宿の婢に敎へられた家は、暗い路の、生籬に圍まれた、妓樓らしくもないうらぶれた一軒屋である。前の崖の下を、煙突から赤い焰をはきながら、機關車がゆるゆる通る。パツと火の粉が線路に散つたりした。星の見えない空には厚い雲の層が垂れてゐるらしかつた。

妓が一人しか居なかつたのだ。そして、酒はなかつた。谷中尉の發議で、私が籤をつくつた。

此のやうな場所で女と寢るのも佗しく、私は短い籤を引きたいと願つた。しかし、私が長い籤にあたつた。谷中尉は、お茶を一杯飲んだだけで、では、とわらひながら立ち上つた。やや經つて、玄關から門までの石疊を踏んで出て行く谷中尉の靴の音がきこえて來た。暫くして、妓が部屋に來た。

妓には、右の耳が無かつた。

女と遊ぶ、このことが生涯の最後のことであることが、私にははつきり判つてゐた。櫻島に行けば、もはや外出は許されぬ。暇さへあれば眠らねばならぬやうな勤務が、私を待つてゐるのだ。私は窓に腰かけ、默つて妓を眺めてゐた。女は顏の半面を絕えず私の視線から隱すやうにしながら、新しく茶をいれた。俄かに憤怒に似た故知らぬ激しい感傷が、鋭どく私の胸をよぎつた。

「耳がなければ、横向きに寢るとき便利だね」

此のやうな言葉を、荒々しい口調で投げて見たくてしやうがなかつた。言はば、頭をかきむしるやうな絕望の氣持で――妓を侮辱したかつたのではない。此の言葉を口に出せば、言葉のひとつひとつが皆するどい劍のやうにはねかへつて、私の胸に突き刺つて來るにきまつてゐた。口に出さずとも、もはや私の胸は傷ついてゐるのではないか。私は、私自身を侮辱したかつた

のだ。生涯、女の暖い愛情も知らず、青春を荒廢させ盡したまま、異土に死んで行かねばならぬ自身に對し、此のやうな侮辱がもつともふさはしいはなむけではないのか。私は窓に腰かけたまま、じつと女の端麗な横顔に見入つてゐた。

「こわいわ」

視線を避けるやうに、妓は一寸横を向いた。かすかに身ぶるひしたやうであつた。一瞬、右の半面が乏しい電燈の光に浮き上つた。地のうすい頭から、頰がすぐにつづいてゐた。耳のついてゐるべき部分は、ある種の植物の實の切口のやうに、蒼白くすべすべしてゐた。

「喉を、どうしたの」

「崖から落ちたのさ」

「あぶないわね」

私は立ち上つて上衣を脱いた。そして、時間が過ぎた。何の感興もない、ただ自分の肉體の衰へを意識するだけの短い時間のあひだ、私はぼんやり外のことを考へてゐた。此の町に、小さな汽車に乘つてやつて來た。明朝はやくバスに乘つて去る。一生のうち、始めて訪れた町であり、もう訪れることはない。此のうらぶれた妓樓の一夜が、私の青春のどのやうな終止符の意味をもつのだらう。私は窓の下を通る貨物列車の音をわびしく聞きながら、妓と會話をかはし

てゐた。

「櫻島？」

妓は私の胸に顔を埋めたまま聞いた。

「あそこはいい處よ。一年中、果物がなつてゐる。今行けば、梨やトマト。枇杷は、もうおそいかしら」

「しかし、私は兵隊だからね。あるからと言つて勝手には食へないさ」

「さうね。可哀さうね。――ほんとに可哀さうだわ」

妓は顔をあげて、發作的にわらひ出した。しかしすぐ笑ふのを止めて、私の顔をじつと見つめた。

「そして貴方は、そこで死ぬのね」

「死ぬさ。それでいいぢやないか」

暫く私の顔を見つめてゐて、急にぽつんと言つた。誰に聞かせるともない口調で――

「いつ、上陸して來るかしら」

「近いうちだらう。もうすぐだよ」

「――あなたは戰ふのね。戰つて死ぬのね」

私は默つてゐた。

「ねえ、死ぬのね。どうやつて死ぬの。よう。教へてよ。どんな死に方をするの」

胸の中をふきぬけるやうな風の音を、私は聞いてゐた。妓の、變に生眞面目な表情が、私の胸の前にある。どういふ死に方をすればいいのか、その時になつて見ねば、判るわけはなかつた。死と言ふものが、此の瞬間、妙に身近に思はれたのだ。覺えず底知れぬ不吉なものが背骨を貫くのを感じながら、私は何氣ない風を裝ひ、妓の顏を見返した。

「いやなこと、聞くな」

紙のやうに光を失つた顏から、眼だけが不氣味に私の顏の表情につきささつて來る。右の半顏を枕にぴたりと押しつけた。顏がちいさく、夏蜜柑位の大きさに見えた。

「お互に、不幸な話は止さう」

「わたし不幸よ。不幸だわ」

妓の眼に、涙があふれて來たやうであつた。瞼を閉ぢた。切ないほどの愛情が、どつと私の胸にあふれた。齒を食ひしばるやうな氣持で、私は女の頰に手をふれてゐた。

翌日の晝、霧雨の中を谷山に着いた。壕の中は濕氣に濡ち、空氣は濁つてゐた。暗號室は、壕の一番奥にあつた。霧雨を含んでしつとり重い略帽を手にさげ、梁で頭打たぬやう身體をかがめて入つて行つた。高溫のため、眼鏡がふいてもふいても直ぐ曇つた。

「今すぐ櫻島に發つて呉れ。あそ[illegible]は暗號の下士官がゐないのだ」

「一人、居る筈ではないのですか」

「赤痢で、霧島病院に入院したんだ」

掌暗號長とかういふ話をした。

「すぐ出發します」

暗號室を出て來ると、顔見知りの下士官や兵隊がゐて、やあやあとあいさつした。此處はずつと雨で、二三日前は、居住區の方の壕の入口が壞えたといふ。砂岩質の、もろい土質であつた。濕氣のためか、壕内はいやな匂ひがした。兵隊の顏色は、皆蒼白かつた。

佐世保海兵團から、櫻島に行くべき兵隊が六名、間違へて谷山に來てゐるから、それらを連れて行けと言ふので、私迄入れて七人、壕の入口に整列し、當直將校にあいさつし、また霧雨の中を赤土の路を踏み、市電の停留場へ進んで行つた。聞いて見ると、六名は皆補充兵である。回天や震洋艇の修理のために派遣されるのだと言ふ。

「櫻島には、震洋がもう來てゐるのかね」
「判りませんです」
答へたのは一番年嵩の一等兵である。四十は既に越した風貌である。身體に合はない略服を着て、見すぼらしく見えた。衣嚢も少さい。佐世保海兵團で燒け出されたため、ごく僅かの衣類しか支給されなかつたと言ふ。私の衣嚢の重さうなのを見て、しきりに自分のものと交換してかつがうと言つて聞かなかつた。善良な型の人物のやうであつたけれども、軍隊の仕來りに忠實であらうとするその愚直さが、私には何となく重苦しかつた。
「俺のは俺が持つ」
素氣なく私はさう言ひ、あとは默つて路を歩んだ。停留場に着いた。小さな電車に乘つて暫く走つたと思ふと、すぐ降された。爆擊された爲、電車は此處迄しか通じないのだ。再び列をつくつて、今度は舗裝路を歩み出した。
鹿兒島市は、半ば廢墟となつてゐた。鐵筋混凝土の建物だけが、外廓だけその形を止め、あとは瓦礫の散亂する巷であつた。ところどころこわれた水道の栓が白く水をふき上げてゐた。電柱がたおれ、電線が低く舗道を這つてゐた。灰を吹き散らしたやうな雨が、そこにも落ちてゐた。廢墟の果てるところに海があつた。海の彼方に、蓮茶褐色に煙りながら、櫻島岳が荒涼

としてそそり立つた。あの麓に行くのだと思つた。皆、默つてあるいた。衣嚢が肩に重かつた。

波止場で船を待つてゐるうちに、空が漸く明り出した。雲が千切れながら、靑い空を見せ始めた。船を待つ人には皆、痴呆に似た表情をし、あまり口を利かなかつた。切符賣場の女の子達は、ふかした馬鈴薯を食べてゐた。それが變に私の食欲をそゝつた。私はそれから眼を外らし、衣嚢に腰を掛け、無表情な群集を眺めてゐた。昨夜の女のことを考へてゐたのだ。昨夜の情緒が、妙に執拗に私の身體に尾を引いてゐるやうに思はれた。何か甘いその感じが、逆に作用して、波止場にゐる無感動な人々の表情に對する嫌悪をそそつた。

(馬みたいに表情を失つてゐる)

私は激しく舌打ちをした。兵隊たちは、女の子から馬鈴薯をわけて貰ひ、私の眼をはばかるやうにしてそれを食べてゐた、じりじりするやうな時間が過ぎた。やがて白い波頭を立てながら船が來た。私達は乘つた。濁つた水をわけながら、船は動き出した。

やがて着いた對岸の砂濱に板をおろし、ひとりひとり渡つて飛び下りた。此處が櫻島である、海沿ひの道を約一里あるいて、袴腰と言ふ處に部隊がある。眼をあげると、空は晴れ上つて、朱を流したやうな夕燒であつた。私の心もほつと明るくなるやうな感じであつた。氣輕く兵隊

たちにも話しかけ、そして歩き出した。雨上りの、鮮烈な緑をたたへた樹々が道のくねりにしたがつて次々につづいた。農家らしい家に立寄り、梨を澤山買つた。

茶褐色の、かたい小さな梨であつた。氣が付くと、群れ立つ樹々の間に、此の野生の梨はあちこちに茶褐色の實を點じてゐた。

「昨夜の女が言つた梨が、これか」

汁液の少ない、甘味に乏しい實を嚙んではき散らしながら、私はさう思つた。

日が落ちた。滿山に湧く蟬の聲も衰へた。薄明の中、私達は部隊に着いた。道から急角度にそそり立つ崖に、大きな洞窟を七つ八つも連ね、枯れた樹などで下手な擬裝をしてゐる。ドラム罐などが、壕の入口にいくつも轉がつてゐた。そして兵隊が壕を出たり入つたりしてゐる。皆、年取つた兵ばかりであつた。靜かな濤の音がした。

當直將校に會ひ、七名分の送り狀をわたし、私はそこで六名と別れた。通信科の兵が來て、それと一緒に居住區に歩き出した。通信科の居住區は、丘の頂上近くにある。暗い歩き難い山道をのぼりながら、私は空をあふいだ。參差する梢のために、星も見えなかつた。

「まだ上の方かね」

「もうすぐです」

少し廣吳道に出て、梢が切れた。片側が崖になり、暗い海の展望があつた。微かな風が私の喉にあたる。海の向ふにはくろぐろと鹿兒島の市街があり、そのひとところが赤い焰をあげて燃えてゐた。疲勞した私の眼に、その火の色は此の世のものならぬ不思議な色で、とろとろと靜かに燃えてゐた。

「毎晩、ああやつて燃えてゐるのです」

變に感動しながら、私は兵のその言葉を聞いた。

狹い道に降り、そして居住區についた。崖下の洞窟より一廻り少さい入口が、やはり竹や樹で小うるさく擬裝してあつて、電線が岩肌を何本も這つて居た。壕はU字形をしてゐるらしかつた。身體をかがめて入つて行つた。

壕の一番奥は送信所になつてゐて、發電機とか送信機がごちやごちや置いてある。そこで電信の先任下士官などに會ひ、あいさつをした。通信所に到る通路が、いはば居住區の形で、寢臺や卓子が並んでゐた。その一つの卓に瓶を置いて、準士官が一人酒を飲んでゐた。骨組は太さうだけれど、肉附きの薄い、通信科の軍人に特有の青白い皮膚をした顏の、こけた頰の上に、赤く濁つた眼がぎろりと私にそそがれた。陸戰の士官の持つやうな頑丈な軍刀に片手を支へ、酒盃に伸びた手の指が何か不自然なほど長かつた。

「村上兵曹か」

私は敬禮をした。

「ここは、當直は辛いぞ。下士官だからと言つて、夜の當直を拔けることは、俺が絕體に許さん。他の基地のことは知らん。此處は少くとも第一線だ。毎日グラマンが飛んで來る。どうせ此處で、皆死ぬんだ。死ぬまで、人から嗤はれたり後指をさされたりするやうなことをするな」

老人のやうにしやがれた聲であつた。

「判つてをります」

「俺は、俺はな、吉良兵曹長」

投げつけるやうな口調でさう鋭どく言つたと思ふと、執拗なまで私の顏にそそいでゐた視線をふいと外らし、再び私の方を見やうともしなかつた。私のことをすつかり忘れ果てた樣子で、視線をじつと中空に据ゑ、長い指で盃を唇にはこんだ。

「歸ります」

敬禮をし、私は兵隊に導びかれ、私に定められた寢臺のところに行つた。衣囊を寢臺の下に押込み、濕つた服を脫いた。山の下から、微かに巡檢ラッパの音が流れて來る。寢臺は二段になつてゐて　二階の方に、下手糞な字で、村上兵曹、と書いた新しい木札がかけてあつた。梯

子を登り、私は毛布の上に横たはつた。あふむけに寢た私の顏のすぐ上を、黑い電線や裸線が幾本も通り、壕內の乏しい電燈の光を吸ふて微かに光つた。天井からは絕えず細かい砂がはらはらと落ちて來るらしかつた。私はそのまま目を閉ぢた。

（あの眼だ）

軍人以外の人間には絕體に見られない、あの不氣味なまなざしは何だらう。奧底に、マニヤックな光をたたへてゐる。常人の眼ではない。變質者の瞳だ。最初に視線が合つたとき、背筋を走りぬけた戰慄は、あれが私の脅への最初の徵候ではなかつたか、私が思ふこと、考へることを、だんだん知つて來るに從つて、吉良兵曹長は必ず私を憎むやうになるに決つてゐる。それは一年餘りの私の軍隊生活で、學び取つた貴重な私の直觀だ。あの種類の眼の持主は、誤たず私の性格を見拔き、そして例外なく私を憎んだのだ。

「苦手！」

私はさう口に出して呟いた。此の櫻島での生活が、何時まで續くか判らない。しかし死の瞬間までに到る此處での生活の間、彼を上官としていただかねばならぬこと、漠然たる不吉の豫感がにがく私の胸をつつんだ。

昨夜の記憶が、遠い昔のことのやうに感じられた。それは遙かな、もはや歸つて行けぬ世界

であつた。

そのうちに私は、うとうとと深い眠りに落ちて行つたらしかつた――

かうして、私の櫻島の生活が始まつた。

晝間は二直制。夜は三直制、そして午後六時から巡檢時迄、晝直とも夜直ともつかぬ直があつて、それは午前の直に立つたものが當る仕組になつてゐた。だから、多い日は一日十二時間の當直に立たねばならなかつた。それも電報量が多いといふ譯ではない。電信員の技術が落ちて來たためと、暗號員の質の低下のために、たとへば晝間六時間の當直の間、一通の電報すら飜譯しかねてゐるやうな暗號員がゐる位であつた。もつとも此處の暗號員は大部分が志願兵で、十五歳といふのもゐた位だから、無理もないのであらう。その上惡いことには、晝間の當直でないときは、彼等は皆、壕堀りに使役されてゐた。そのため夜の當直では、彼等はそろつて居眠りし、一通の電報が交替の度にそのまま申し繼がれ、朝になつても完全な飜譯が出來てゐなかつたりする。その責任はすべて當直下士官にかかつて來る。

暗號室は、受信室と一所の壕になつてゐて、丘の中腹にあつた。方角が惡いせいか、濕氣が

多くて、ひどくむし暑い交替のとき入つて行くと、空氣がにごつてゐて、いやな氣持がした。だから之に、通風のため穴を一つ堀るといふのである。換氣と涼風入れを兼ねた此の工事は、まこと良い思ひ付であつたに違ひなかつたが、ある日私が現場に行つて、私の直の兵隊が働いてゐるのを監督がてら、計算した結果に依れば、此の風穴が完成するのは少くとも三箇月はかかるのである。十一月頃になつたら、さだめし涼しい風が吹きこむことであらうと、むしろ腹立たしく、私は兵隊に話しかけた。

「此の工事は誰の命令だね」

「吉良兵曹長です」

「それまで此處が保つと思ふのかね」

その兵は、もつこをわきに置いて、私の前に立つた。

「此の穴が出來上らないうちに、米軍が上陸して來ますか」

眞面目な表情であつた。十五歳になると言ふ少年暗號員である。私は莫を深く吸ひ込みながら聞いた。

「勝つと思ふか？」

「勝つ、と思ひます」

童話の世界のやうに、疑ひない表情であつた。ふつと暗いものを感じ、私は掌をふつて作業を始めるやうに合圖した。そのとき、私は不機嫌な顏をしてゐたに違ひない。私は立ち上り、莨を踏み消した。そしてあるき出した。

だらだら坂を登り切ると、丘の頂上には喬木の疎林となり、その間を縫ふ徑を通るとき、暑い午後の日射は私の額にそそぎ、汗が絕間なくしたたつた。林をぬけると、やや廣濶な草原があつた。大きな栗の木が、その中央に生へてゐた。その木の下に、一人兵隊がゐて、私の跫音にびつくりしたやうに振り返つた。

四十を越したか越さない位の、背の低い男であつたが、私はふと彼の手にした双眼鏡に目を止めた。私の不審さうな視線に、男は人なつこさうな笑ひをちらと見せて、はつきりした聲で言つた。

「見張です」

さう言へば、栗の木の幹を利用して電話が設けてあり、此の草原からは灣内も大空も一望の中にあつた。草いきれの中を、私はその男に近づいた。

「あいてゐるなら、双眼鏡を貸して呉れないか」

「ええ、いいですよ。お使ひなさい」

双眼鏡を受取つた。ずつしりと重かつた。眼に當てて、ゆるゆる視野を移動した。

大正初年の爆發によつて海水になだれ入つた溶岩の岬が、すぐ目の前にあつた。そのこちらが軍用の船着廣場で、中央に中世紀の塔に似た放水塔があり、それに群れて水をくんだり洗濯したりしてゐる兵たちの姿が見えた。そして油を流したやうな海。船着場にある發動機船。そして私の頭の回轉につれて、双眼鏡の視野に、大きく櫻島岳の全貌が浮び上つて來た。

それは、青いものが一本もない、代赭色の巨大な土塊の堆積であつた。赤く燒けた溶岩の、不氣味なほど莫大なつみ重なりであつた。もはや之は山といふものではなかつた。双眼鏡のレンズのせいか、岩肌の陰影がどぎつく浮き、非情の强さで私の眼を壓迫した。憑かれたやうに私はそれに見入つてゐた。

「ちよつと」

低い、押しつけられたやうな聲であつた。私は思はず双眼鏡をはなして、その男の顏を見た。中腰の姿勢で、眼を据ゑ耳を立ててゐる。

「飛行機です」

男は私から双眼鏡を受取ると、南の空に目を向けた。私には何も聞えない。ただ蟬の聲が降るやうにはげしかつた。

空には雲がなかつた。太陽はぎらぎら輝きながら、虚しい速度で回轉してゐた。その大空の何處かを、鋭どく風を切つて、飛行機が近づいて來る氣配があつた。

男は、双眼鏡を眼から離すと、栗の木の電話に飛びついた。呼鈴をならした。此のやうな山の中で聞く呼鈴の音は、妙に非現實的に響いた。

「グラマン一機、ええ、グラマン一機、鹿屋上空。針路、針路北北西――」

その時、突然のやうに、冴えた金屬性の響きが、微かながら私の耳朶をとらへた。私が空を振り仰がうとしたとき、男の手が私の肱をとらへた。

「待避、待避しなくてはいけません」

栗の木から五米位離れた、灌木の茂みのそばに、一寸した窪地があつて、私達は少しあわててそこに走り込んだ。二人並んであふむけに寢た。胸が動悸を打つてゐる。

「これが、私の寢棺です」

男は低い聲で言ひ、微かな笑ひ聲を立てた。まこと、寢棺の形であつた。二人では、狹すぎる。何か答へやうとして、私が男の方に身體を動かしかけたとたん、空氣を斷ち切るやうな金屬音が急に破烈するやうに增大し、轟然たる音の流れとなつて私達の頭上をおほつた。私の視野を、銀色に輝きながら、グラマンが大きく現れ、そして瞬時にして消えた。思はず身體を起

しかけたとたん、引裂くやうな機銃の音が連續しておこり、そして止んだ。飛行機の爆音は見る見るうちに小さくなり、海のむかふに消えて行つたらしかつた。飛行機の通りすぎる間、忘れてしまつてゐた蟬の聲が、此の時になつてよみがへつて來た。男は身を起して、電話機についた。

「鹿兒島方面に退去。ええ。退去しました」

暫くして待避もとへのサイレンが遠く山の下から聞えて來た。私も立ち上つて、草原のはなに立ち、あたりを見下した。今迄あちこちに待避してゐたらしい人影が、道路や廣場にぽつぽつと現はれて來た。

私は男と並んで草原に足をなげ出してすわつた。

「グラマンがよくやつて來るね」

「今日は、まだ始めてですよ」

男は私の顏をちらと見て言つた。

「兵曹は應召ですか」

「補充だよ」

「下士候補の？」

「さう。受けたくなかつたけれど」
「兵隊でゐるよりはいいでせう」
男はさう言ひ、神經質な笑ひ聲をたてた。
「蟬が、多いね」
「夜でも、うつかりすると鳴いてゐるのですよ」
「つくつく法師は、まだかね」
「まだですよ。あれは八月十日すぎ」
男の表情に、いらいらした影が浮んで消えた、と思つた。
「つくつく法師は、いやな蟬ですね」
男はさう言ひ、一寸間をおいて、
「私はね、あの蟬は苦手なんですよ。毎夏、あの蟬が鳴き出す時、いつも私は不幸なんです。變な言ひ方だけれど。——去年は、六月一日の應召。そして佐世保海兵團、御存じでせう、十分隊。そこにゐて、毎日いやな思ひで苦勞して、この先どうなることかと暗い思ひをしてゐるとき、食事當番で烹炊所の前に整列してゐると、その年始めてのつくつく法師がそばの木に取りついて、いやな聲立てて鳴きましたよ。丁度、サイパンが陷ちた直後で、どうせ私達は南方

の玉碎部隊だと、班長たちから言はれてゐた時で——」

聲が一寸途切れた。

「一昨年もさうでした。その前の年も。いつも悲しい辛いことがあつて、絶望してゐると、あの蟬が鳴き出すのです。あの鳴き聲は、いやですねえ。何だか人間の聲のやうぢやないですか。へんに意味ありげに節をつけて。あれは蟬ぢやないですよ。今年も、どのやうな瞬間にあの蟲が鳴き出すかと思ふと、いやな豫感がしますよ」

暫く默つてゐた。私が聞いた。

「で、見張には？」

「秋になつて、見張の講習に行つたのです。いろいろつらいこともあつたですよ」

「年取つてゐると、猶のことさうだらうね」

「年齡のせいだけでもありませんよ」

「判らない奴が多いからな」

男は默つてゐた。

「志願兵。志願兵上りの下士官や兵曹長。こいつらがてんで同情がないから」

男はうなづいた。そして、低い、沈鬱な調子で言つた。

「私は海軍に入つて始めて、情緒といふものを持たない人間を見つけて、ほんとに驚きましたよ。情緒、と言ふものを持たない。彼等は、自分では人間だと思つてゐる。人間ではないですね。何か、人間が内部に持つてゐなくてはならないもの、それが海軍生活をしてゐるうち、すつかり退化してしまつて、蟻かなにか、そんな意志もない情緒もない動物みたいになつてゐるのですよ」

「ふん、ふん」

「志願兵でやつて來る。油粕をしめ上げるやうにしぼり上げられて、大事なものをなくしてしまふ。下士官になる。その傾向に、ますます磨きをかける。そして善行章を三本も四本もつけて、やつと兵曹長です。やつとこれで生活が出來る。女房を貰ふ。あとは特務少尉、中尉、と、役が上つて行くのを樂しみに、恩給の計算したり、退役後は佐世保の山の手に小さな家を建てて暮さうなどと空想して見たり。人間の、一番大切なものを失ふことによつて、そんな生活を確保するわけですね。思へば、こんな苛烈な人生つてありますか。人間を失つて、生活を得る。さうまでしなくては、生きて行けないのですか。だから御覽なさい。兵曹長たちを。手のつけられない俗物になつてしまつてゐるか、またはこちこちにひからびた人間になつてゐるか、どちらかです」

「さうだね」

私は、吉良兵曹長のことを頭に思ひ浮べてゐた。彼は、ひからびた男でもなければ、また俗物でもない。全然違つた別の型の人間だ。志願兵の頃から、精神棒などで痛めつけられてゐた間、他の人間なら諦めて忍従して行くところを、おそらくは胸に悲しい復讐の氣持を、自ら意識せずに育てて行つたにちがひない。人間の心の奥底にある極度に非情なものを、育てて行き、磨いて行きそれを自我にまで擴げて行つたに違ひない。やつと兵曹長となり、一應の餘裕が出來て、あたりを見廻した時、ひそかに育てて來た復讐の牙は、實は虚しいものに擬せられてあつたことに氣付いたに違ひないのだ。彼は牙を、自分自身に突き刺すより仕方がなかつたのだ。彼の奇妙な性格も、異常な動作も、そして彼にとつて唯一の世界である海軍が、沖縄の戰終り、既に潰滅したことによるいらいらした心情も、おそらくは皆そこにあるのだ。通信科の兵隊を集めて、故もない制裁の場における、彼の偏執的な擧動を、私は瞼の裏にまざまざと思ひ浮べてゐた。それは、二三日前のことであつた——

赤痢が流行してゐた。その日、暗號の兵隊が一人、野生の梨をもいで食べ、そして赤痢の疑ひで霧島病院に送られた。梨を食ふことは、堅く軍醫の禁ずるところであつた。醫務室でその兵と別れ、居住區に戻り夕食を私は食べてゐた。灣内で獲れるらしい細長い小さな魚の煮付を

嚙んでゐたとき、私の背後を通り抜け、そして振返つた。吉良兵曹長であつた。
「村上兵曹、山下はどうした」
「霧島行きに決まりました」
「梨を食つたといふのは、本當か」
「本當らしいです」
山下と言ふのは、その一等兵の名である。吉良兵曹長の顏に、怒りの表情があらはれた。
「梨を食ふなと言ふことは、度々兵隊に言つてあるではないか。近頃の兵隊は、氣合は入つてゐない癖に、惡いことは一人前する」
押しつぶされたやうな聲であつた。じつと私の顏を凝視しながら
「下士官も惡い。下士官がだらしないから　兵隊が我ままをする。俺の命令を聞きたくなければ、聞きたくなるやうにしてやる。村上兵曹。兵隊を整列させろ」
私は默つてゐた。一人が梨を食つたといふかどで、殘り全部の兵隊が制裁されることはまことに意味が無いことだ。數日間の此處での生活で、私は私の部下にあたる暗號兵たちに、ほのかな愛情を感じ始めてゐた。意味なく制裁されるやうな目に合せたくなかつた。表情を變へず、私は頑固に押し默つてゐた。吉良兵曹長は急に横をむくと、送信所の方に急ぎ足で入つて

いつた。

私は元にむいて、食事をつづけた。私は、應召以來、佐鎭の各海兵團や佐世保通信隊や指宿航空隊で、兵隊として過して來た。さまざまの屈辱の記憶は、なほ胸に生々しい。思ひ出しても歯ぎしりしたくなるやうな不快な思ひ出は、數限りない。自分が目に見えて卑屈な氣持になつて行くこと、それがおそろしかつた。

（しかも死ぬと言ふ今になつて、それが何であらう）

私は暗い氣持で食事を終へた。壕を出、落日の徑を降り、暗號室に入つて行つた。そして當直を交替した。

電報は多くなかつた。今日の電報綴りを見ても、銀河一機どこそこを立つとか、品物を何番號の貨車で送つたとか、あまり重要でない電報ばかりである。當直士官に立つてゐる暗號士がうつらうつら居眠りをしてゐる。電信機の音が四漫に聞える。電信兵の半ばは、豫科練の兵隊である。練習機不足のため、通信兵に廻された連中なのだ。私は頬杖をついたまま、目を閉ぢた。

——先刻、夕燒けの小徑を降りて來る時、靜かな鹿兒島灣の上空を、古ぼけた練習機が飛んでゐた。風に逆つてゐるせいか、双翼をふるぶるふるはせながら、極度にのろい速力で、丁度

空を這つてゐるやうに見えた。特攻隊に此の練習機を使用してゐることを、二三日前私は聞いた。それから目を閉ぢたいやうな氣持で居りながら、目が外らせなかつたのだ。その機に搭乘してゐる若い飛行士のことを想像してゐた。

私は眼を開いた。坊津の基地にゐた時、水上特攻隊員を見たことがある。基地隊を遠く離れた國民學校の校舍を借りて、彼等は生活してゐた。私は一度そこを通つたことがある。國民學校の前に茶店風の家があつて、その前に緣臺を置き、二三人の特攻隊員が腰かけ、酒をのんでゐた。二十歲前後の若者である。白い絹のマフラーが、變に野暮つたく見えた。皆、皮膚のざらざらした、そして荒んだ表情をしてゐた。その中の一人は、何か猥雜な調子で流行歌を甲高い聲で歌つてゐた。何か言つては笑ひ合ふその聲に、何とも言へないいやな響があつた。

（これが、特攻隊員か）

丁度、色氣付いた田舍の青年の感じであつた。わざと帽子を阿彌陀にかぶつたり、白いマフラーを伊達者らしく纏へば纏ふほど、泥臭く野暮に見えた。遠くから見てゐる私の方をむいて、

「何を見てゐるんだ。此の野郎」

眼を險しくして叫んだ。私を設營隊の新兵とでも思つたのだらう。

私の胸に湧き上つて來たのは、悲しみとも憤りともつかぬ感情であつた。此の氣持だけは、

どうにも整理がつきかねた。此の感じだけは、今なほ、いやな後味を引いて私の胸に殘つてゐる。欣然と死に赴くと言ふことが、必ずしも透明な心情や環境で行はれることでないことは想像は出來たが、しかし眼のあたりに見た此の風景は、何か嫌惡すべき體臭に滿ちてゐた。基地隊の方に向つて、うなだれて私は歸りながら、美しく生きよう、死ぬ時は悔ない死に方をしよう、その事のみを思ひつめてゐた。——

ふと氣が付いて私はあたりを見廻した。暗號室の卓は、私の外二人の兵隊がゐるだけで、あとの席には、「呂」の厚い暗號書や、亂數盤が組立てたままほうり出されてゐるだけで、誰もゐなかつた。

「此の直はどうしたんだ。もう交替時間はとつくに過ぎてゐるぢやないか」

一人の兵隊が顏を上げて答へた。

「皆來てゐるのですが——」

「來てゐて、どうしたんだ」

「居住區から呼びに來たのです。電報を持つてゐるものだけ殘つて、手空きは全部來い、と言つて」

「誰が、呼んだのだ」

「吉良兵曹長、ださうです」

兵隊は、何かおどおどした調子で、さう答へた。私は、顏の表情が硬ばつて來るのが、自分でもはつきり判つた。

兵隊を直接指導して行く立場にあるのは、下士官である。その任にあたる立場を、私が無視された、その事が口惜しかつたのではない。もはや此處が戰場になるといふことが、時間の問題となつてゐる現在にも拘らず、味方同志で何を傷け合ふ必要があるのだらう。そのことが哀しく胸に響いて來た。ここにゐる二人の兵隊も、同僚が居住區で何をされてゐるか、よく知つてゐる。偶然、電報を飜譯してゐたそれだけの理由で、それから免かれてゐる。後ろめたさと漠然たる不安で、陰鬱な表情のまま、暗號書を操つてゐる。何かやり切れない、不快な氣持が、私をいらいらさせた。

「よし、居住區に行つて見る」

誰にともなく私は呟き、立ち上つた。狹い通路を通り拔け、外はすでに黃昏であつた。山道を走り登り、橫に切れる小徑へ降らうとしたとき、私は思はず立ち止つた。居住壕の入口に、吉良兵曹長が立つてゐた。そして、居住壕前の海を見下す斜面に、兵達は皆兩手を土に着け、「前へ支へ」の姿勢をしてゐた。吉良兵曹長は、三尺程の棒を片手に下げ、腰を下げて地につ

けたりしやうとするのを、大聲出して怒鳴りつけてゐた。私は歩をゆるめながら、そこに近づいた。

その姿勢を餘程長く兵達がつづけてゐると言ふことは、その姿勢のくづれ方や、手を樂なやうに置き換へやうとする絶望的な努力の様子で、はつきり判つた。彼等はそろつて頭を垂れてゐた。黄昏の薄い光の中で、私は私の足許の兵隊の額から、油汗がしたたり落ちるをはつきりと見た。私は息が苦しくなつた。新兵の時、私も何度も之をやらされた。常人よりも臂力の弱い私は、常に人一倍の苦痛を忍ばねばならなかつた。その記憶が眼前の光景につながり、呼吸がつまるやうな氣がした。私は、吉良兵曹長の顔をぬすみ見た。

乏しい光線の中で、吉良兵曹長の顔は、思はずぎよつとする位、青ざめて見えた。非常な苦痛を押しこらへてゐるやうな不思議な表情が、彼の顔を歪めてゐるやうであつた。眼だけが、偏執的に光りながら、伏せてゐる兵隊の背にあちこち動いた。燃えるやうな瞳のいろであつた。不意に振り返り、私の方を見た。

「村上兵曹。皆を立たせろ」

さう言ひすてると、棒を崖の下になげすてた。混棒は岩角に二三度にぶい音を立てて、熊笹の谷間に落ちて行つた。彼は立ち止り、一寸何か言ひたさうにしたが、何も言はず、私に背を

向け、大股に居住區に入つて行つた。幅の廣い、やせた肩のあたりが、何となく淋しさうに見えた。

「立て」

兵達は、皆なのろのろと大儀さうに立ち上つた。疲勞がさうさせるのか、皆一樣な單純な表情であつた。考へる力を喪失した、言はば動物園の檻のけもののやうであつた。妙に不氣味な壓迫を私は感じながら、私は低い聲で言つた。

「當直の者は當直へ、殘りは別れ」

當直の兵隊と一緒に暗號室への道を歩み出した。海の面だけが淡く暮れ殘り、群れ立つ樹々の間は暗かつた。兵達を立たせ、そして私が一席の訓戒を加へることを、吉良兵曹長は豫期したのだらうか。あるひは兵隊に苦痛をあたへたことだけで事足りたであらうか。私には判らなかつた。うしろに何か重い物を引き摺つたやうな歩き方で、居住區の中に消えて行つた彼のうしろ姿が、奇妙に私の眼に泌みついて離れなかつた。外の下士官がやるやうに、自分たちが兵隊であつた折にやられたから、今兵隊に同じことをやる、と言つたやうな單純なものではないであらう。固疾のやうに、吉良兵曹長の心に巣くふ何物かが、彼をかり立ててゐるやうであつた。私の理解を絕した、おそらくは彼自身にも理解出來ない鬼のやうなものが、彼の胸を荒れ

狂つてゐるやうであつた。

（あの眼が、それだ）

新兵教育を受けた時、私の班長がやはり、性格の上では違つてゐたけれども、その類の眼を持つた下士であつた。平常は溫和な、そして發作的に殘忍なふるまひをする。あとで何か事件を起して軍法會議に廻つたことを聞いた。私は此の男のことをふと思ひ出してゐた。

所詮、彼等は私と全く異つた世界に住む男達であつた。そして、私は、吉良兵曹長の中に住む鬼を、理解するには、あまりにも疲れ過ぎてゐる。疲れてゐると言ふよりは、そのやうな無緣のものを考へるより、私には、迫り來つつある自らの死のことが氣になつてゐたのだ。櫻島に來て以來、このことは常住私の心を遠くから鈍く脅やかし續けてゐる。——

確に、私は苛立つてゐる。連日の睡眠不足のせいもあつた。が、それだけではなかつた。一言で言へば、私は、私の宿命が信じ切れなかつたのだ。何故私が、小學校の地理では習つたけれども、訪れる用事があらうとも思へなかつた此の南の島にやつて來て、そして此處で滅亡しなければならないのか。この事が私に合點が行かなかつたのだ。合點が行かなかつたといふよ

り、納得しようと思はなかつたのだ。納得出來るわけのものでなかつた。しかし事態は、急迫してゐた。どの道どのやうな形でか、覺悟を決めなければならぬ處まで來てゐたのだ。

暗號室や居住區での雜談で、米軍が何處に上陸するかと言ふことが、時々話題にのぼつた。海軍は吹上濱に上陸を豫想し、陸軍は宮崎海岸の防備に主力を盡してゐると言ふ噂がまことしやかに語られた。沖繩は既に玉碎したし、大和の出擊も失敗に終つた。日日に譯す暗號電報から、味方の慘敗は明かであつた。連日飛來する米機の樣相から、上陸が間近であることも必至であつた。不氣味な殺氣を盈んだ靜穩のまま、季節は八月に入つて行つた。八月一日の眞夜中、私は當直に立つてゐた。

土の臭ひのする洞窟の、薄暗い灯の下で、皆不機嫌の眼を光らせて、暗號を引いてゐた。ときどき電信室の方から、取次が眠さうな眼をして電報を持つて來た。暗號書をめくる音が、變に小うるさく感じられた。私は手を伸して、今持つて來た電報を取り上げた。作戰特別緊急電報である。はつとして私は頭を上げた。いよいよ何か起つたのではないか。私は急いで暗號書を操つた。一語一語、譯文書に書き取つた。

「敵船團三千隻見ユ。針路北」

大島見張所の發信である。私は立上つた。」

「敵船團の電報です」

當直士官の眠たげな顏に、一瞬緊張の色が走つた。

電鈴が鳴つて、すぐ幕僚室に通報され、暗號室に至る通路に、枕を並べて眠つてゐた暗號士や掌暗號長や通信士が、兵隊に起されてぞろぞろと起きて來た。暗號室に入るとき、一樣に眼をしかめ、灯から眼をそむけるやうにした。指揮官卓に集まつて、低い聲で話し合つた。

俄かに電報量が多くなつた。作戰特別緊急電報ばかりである。報告や通報や、各部隊に對する命令電波が、日本中に錯綜してゐるらしかつた。船團は明かに東京方面を目指してゐた。千葉海岸あたりに殺到し、一擧に東京攻略するのではないか。それはあり得ないことではなかつた。

(東京都民は、今頃何も知らずに眠つてゐるだらう)

應召するまで私が住んでゐた本鄕のことや、また友達のことが、突然のやうにはつきり頭に浮んで來た。それは戰爭とは關係のない靜かな街であり、平和な人々の姿であつた。私が自分に落ちるものと覺悟してゐた惡運が、今や彼等の上に置き換へられやうとしてゐる。此の、死の巨大な兇報も心付かずして、寢床の中に穩かな顏をして眠つてゐるのではないか。一つの或る想念が、私の心を烈しい苦痛を伴つて突き刺した。

（もし東京に上陸するならば櫻島にゐる私はたすかるのではないか？）

うめくやうな氣持で、私は此の考を辿つてゐた。——

私の背後の指揮官卓での話し聲が少しづつ高くなつて來た。ときどき、笑ひ聲がまぢつた。緊張のなかに、へんに自棄つぱちな氣持がこぢれたままふくれ上り、冗談を言ひ合ふ聲が奇妙にうはずつて來るらしかつた。

「軍令部や東通の連中、いい配置かと安心してゐた奴等が泡食ふぜ」

「太えしくじりとぼやいてもおつつかない」

「しかし關東平野は逃げでがあるだらう」

誰かが口をはさんだ。

「特攻隊は、出撃する樣子かな」

暫く誰も口を利かなかつた。その沈默が、痛いほど私の背にのしかかつて來た。その瞬間、投げやりな調子で、誰かが冗談を言つた。

「どうせ來年の今頃は、俺達はメリケン粉かつぎよ。佐世保港かどこかで」

低い笑ひ聲が起つた。

「兵隊も準士官も無しよ。さうなれば」

突然、笑ひを含まぬ質の違つた口調が、その會話を斷ち切つた。
「馬鹿な事を言ふなよ」
眞面目な、烈しい聲であつた。笑ひ聲が止んだ。私は身體を少しよぢつて、背後をぬすみ見た。
「兵隊の居る處で、不見識なこと言ふのは止めろ」
吉良兵曹長であつた。何時暗號室に入つて來たのか、私は知らない。眺めてゐるのもはばかられて、私は前にむきなほり、暗號書を繰るふりをした。さう言ひながら、吉良兵曹長は立ち上つたらしかつた。白けた空氣の中から
「冗談ぢやないか。冗談だよ」
誰かが止める氣配がした。
「誰も日本が負けるなどとは思つてゐないよ」
「冗談にしてもだ、言つて良いことと惡いことと——」
「吉良兵曹長。言ひがかりのやうなことはよせ」
なに、と言葉にならない言葉が聞えたと思ふと、何か絡み合ふやうな氣配のうち、肉體がぶつつかり合ふやうなにぶい音がし、小さくなつてゐる私の背に、誰かがよろめいてたふれかか

つた。亂數盤が、かたりと床に落ちると、數十本の亂片がそこらにみだれ散つた。烈しい呼吸が、私の襟筋をかすめた。私は背筋を硬くして、じつと暗號書を見つめてゐた。低い虚ろな笑ひ聲のやうなものが、聞えたと思つた。私は思はずふり返つた。壕を支へた木組によりかかつて、背の高い吉良兵曹長の顏は、蠟のやうに血の氣を失ひ、假面に似た無表情であつた。見ていけないものを見たやうな氣で、思はず目を外らしたとき、呻くやうな小さな聲で、吉良曹長の聲がした。

「よして呉れ」

冗談を言ふのをよせと言ふのか、醜い爭ひをするのをよせと言ふのか、自分に言ひ聞せるやうな弱々しい聲音であつた。白々しい沈默が來た。その中を、よろめくやうにして、吉良兵曹長は壕を出て行つたらしかつた。濕つた土くれを踏む長靴の音が、それにつづいた。そして、緊張のあとの、ゆるんだ氣配が背に感じられた。私は今日の電報綴りを意味なく繰つてゐた。繰る指が、おさへようとしてもぶるぶるふるへた。

(船團が見えた。それだけのことに皆亢奮してゐる)

私をも含めて、度を失つた此の一群の男たちに、私は言ひ知れぬ不快なものが胸に湧き上つて來るのを感じた。不快と言ふよりも、もつと憤怒に近い感情であつた。ああ、自分の體も八

つ裂きにし、そして彼等のも八つ裂きにし、谷底にでも投げ込みたい。私は手刀で力をこめて頸筋を、えいえい、とたたいた。たたく度に後頭部に、しびれるやうな感覺を伴つて血が上つて來た——

「村上兵曹。村上兵曹。譯文點檢御願ひ致します」

兵隊の聲であつた。私は手を伸して譯文紙を受取つた。稚拙な字で、醜文譯がしたためてある。

「サキノ敵船團ハ夜光蟲ノ誤リナリ。大島見張所」

苦い笑ひが浮び上つて來た。すべては茶番に過ぎないではないか。もし米軍が日本の電波狀況を傍受してゐたなら、此の突如として卷き起つた電波の嵐を、——大島から横鎭へ、横鎭から全國へ、部隊から部隊へ、ひつきりなしに打ち廻された作戰特別緊急信の大群を、何と解釋しただらう。此の部隊にも、先刻佐鎭から、卽時待機の命令が出た。今頃は、整備兵らが起されて、仕事にかかつてゐる筈である。夜光蟲の誤りだと判つたとき、整備兵たちはどんな思ひでまた寢に就くのであらう。にがい笑ひは、何か生理的な發作のやうに、止め度無く湧き上つて止まなかつた。私は立ち上り、譯文を當直士官に指し出した。指揮卓にゐた準士官等の視線が、それに集つた。讀んでも、誰も笑はなかつた。

「夜光蟲、か」

變に感動のうすれた聲で誰かが言つた。

私は席に戻り、當直士官が幕僚室に電話をかける聲を聞いてゐた。電話器の具合が悪く、夜光蟲、と言ふのが仲々通じないらしかつた。その聲に混つて、外の準士官等の、疲れたやうな口調の會話を耳にとめてゐた。

「近頃、いらいらしてゐるらしいのだね」

「ひがんでゐるのさ。奴さん」

會話は、それだけで止んだ。もはや起きてゐる必要はないと言ふので、それぞれの寢臺へ、壕を出て行くらしかつた。

三時になつた。交替の當直員が來た。私達は申繼ぎをし、並んで暗號室を出て行つた。通路を出ると、眞闇であつた。私は目を慣らすために、出口の崖によりかかり、暫く待つてゐた。對岸の鹿兒島市は、相變らず一二箇所、靜かに焰を上げてゐた。もはや消す氣もないやうであつた。昨夜と同じ箇所が、同じ量の焰をあげて、とろとろと燃えてゐる。——

歩き出した。片手を崖に沿はせ、歩き惱みながら、私は、大船團に見まがふ夜光蟲の大群の光景を想像してゐた。暗い海の、果から果までキラキラと光りながら、帶のやうにくねり、そ

してゆるやかに移動して行く紫色の微光を思ひ浮べたとき、私は心がすがすがしく洗はれるのを感じた。先刻の氣持の反動と判つてゐながらも、私は此の感傷に甘く身をひたしてゐた。ひそやかな孤獨の感じが、快よく身體を領してゐた。夜風が、顏の皮にあたつて吹いた。

山道を長いことかかつて登り、居住區に着いた。入口を入ると、奥の卓によりかかり、誰かが腰をおろしてゐた。私の方を見た。吉良兵曹長であつた。今までそのままの姿勢で、じつとしてゐたらしかつた。

「上陸地點に近づいたか」

「あれは、夜光蟲ださうです」

私は事業服の襟の紐を解きながら、さう答へた。安睹とも疑惑ともつかぬ妙な表情が、彼の顏にちよつと現れて消えた。いぢめられた子供のやうに切ない表情にも見えた。光を背にしてゐるので、それも定かでなかつた。そして目を閉ぢた。

私は、寢臺に行き、音のしないやうに横になつた。兩掌をそろへて、顏をおほつた。瞼がしきりと痒かつた。坊津での傷は、ほとんどなほつてゐて、その跡がしわになつてゐるらしかつた。そこをこする私の指の爪が、眼鏡の緣にふれて、かたかたと鳴つた。私は佗しくその音を聞いてゐた。

午前の當直を終へ、正午、私は居住區に戻つて來た。當直の時、當直士官の掌暗號長から叱られた。電報が一通、屆け方が遲れた。それも傍受電報である。此の部隊に、直接關係があるわけではない。當直士官が幕僚室に、「カブを上げ」たかつたからに過ぎない。私は憂鬱な氣持で晝食を終へ、寢室に入り、晝寢をした、そして夢を見た。

何の夢だつたかは判らない。ただ、薄暗がりのやうなところを、何か一所懸命にわめきながら歩いてゐた。涙をだらだら流しながら無茶苦茶に歩いてゐた。手を振り、足を踏みならしながら。何かさけんでゐた。そのまま、ゆるゆると浮き上つて來るやうにして目が覺めた。汗をびつしよりかいてゐた。身體中が重苦しくて、夢の感覺がまだ身體のそこここに殘つてゐた。うつつの私も、夢の中と同じやうに涙を流してゐた。何物に對してか、つかみかかりたいやうな氣持で、べとつく肌の氣味惡さに堪へながら、じつとあふむけに横たはつてゐた。

（これでいいのか。これで――）

不當に取扱はれてゐると言ふ反撥が、寢覺めのなまなましい氣持を荒々しくゆすつてゐた。私はひとりで腹を立ててゐた。誰に、と言ふことはなかつた。掌暗號長にではない。私を此の

やうな破目に追ひこんだ何物かに、私は烈しい怒りを感じた。突然するどい哀感が、胸に湧き上つた。何もかも、徒勞ではないか。此のやうな虚しい感情を、私は何度積み重ねてはこわして來たのだらう。……

私は身體を起し、寢臺から飛び下りた。亂れた毛布を疊むために、毛布の耳をひとつひとつ揃へながら、ふと呟いた。

「毛布でさへも、耳を持つ——」

耳たぶがないばかりに、あの田舍町の妓は、どのやうな暗い厭な思ひを味つて來たことであらう。あの夜、あの妓は、私の胸に顏を埋めたまま、とぎれとぎれ身の上話を語つた。耳なしと言はれた小學校のときのこと。身賣りの時でも、耳たぶがないばかりに、あのやうな田舍町の貧しい料亭に來なければならなかつたこと。そのやうな不當な目にあひつづけて、あの妓はどのやうなものを氣持の支へにして生きて來たのだらう。妓の淋しげな横顏が、急に私の眼底によみがへつて來た。佗しい感慨を伴つて、妓の貧しい肉體の記憶がそれに續いた。

（此の感傷によりかかり、そして氣持を周圍から孤立させる、此の方法以外に、私の此のいら立ちをなだめる手があらうか？）

もはや、私の青春は終つた。櫻島の生活は、既に餘生に過ぎぬ。自然に手に力が入り、揃へ

た毛布を亂暴に積み重ねると、私は服を着け、洞窟を出て行つた。午後の烈しい光線が、したたか瞼に滲みわたつた。丘の上に登つて見やうと思つた。

石塊道を登り、林を拔けると、見張所であつた。栗の木の下には、此の前と同じ見張の男が立つてゐた。私を認めると、かすかに笑つたやうであつた。何となく元氣が無いやうに見えた。

「また來ましたね」

うなづきながら、私は見張臺に立ち、四周を見渡した。心の底まで明るくなるやうな、炎天の風景であつた。

積亂雲が立つてゐた。白金色に輝きながら、數百丈の高さに奔騰する、重量ある柱であつた。その下に、鹿兒島西郊の鹿兒島航空隊の敷地が見え、こわれた格納庫や赤く燒けた鐵柱が小さく見えた。黑く燒け焦れた市街が、東にずつと續いてゐた。市街をめぐる山々は美しく、鮮かな綠に燃え、谷山方面は白く砂塵がかかり、赤土の切立地がぽんやりとかすんでゐた。自然だけが、美しかつた。人間が造つたものの廢墟は、いちけて醜くかつた。草原に腰をおろした。」

男も、此の前と同じく、並んですわつた。

「見張も、大變だね」

「大したことはないですよ」

「何だか元氣がないやうだけれど、身體の具合でも惡いのかね」
「疲れてゐるのですよ」
男は、靜かな灣内をぐるぐるつと指さして見せた。
「此の灣内に、潜水艦が三隻ゐるのです」
「ああ、電報で見た。味方のではないか」
「兵曹は通信科ですか。味方のか敵のかはつきりしないんです」
「味方識別をつけ忘れてゐた、と言ふらしいのだよ」
「さうですか」
男は、暫らくの沈默の後、私に聞いた。
「通信科なら——特攻隊、あれはどうなつてゐるのですか」
「てんで駄目だよ。皆、グラマンに食はれてしまふらしい」
「やはり駄目ですか」
「特攻隊、あれはひどいですね」
「ひどいつて、何が？」
男は暫く默つてゐた。そして、一語一語おさへつけるやうに

「木曾義仲、あれが牛に松明つけて敵陣に放したでせう。あの牛、特攻隊があれですね。それを思ふと、私はほんとうに特攻隊の若者が可哀さうですよ。何にも知らずに死んで行く――」
「君にも、子供がゐるのだらう」
「ときどき練習機の編隊が飛んで行きますね。あれも特攻隊でせう」
「ああ。――無茶だよ」
男の顔は、光線の加減か土色に見えた。ひどく大儀さうだつた。
「身體には、注意しなくてはいけないよ。壕生活はこたへるから」
「鹿兒島には、昔、土蜘蛛といふ種族がゐたらしいですね。熊襲みたいな。やはり私達と同じで、洞窟に住んでゐた」
「君は、東京かね」
「もう亡んでしまつたんですね。弱い種族だつたに違ひないですよ」
「蟬が、ずいぶんふえたね。ほんとにうるさい位だ」
熊蟬が、あちらこちらの樹に止つて、ここを先途と鳴いてゐた。
「蟬？　ああ、蟬のこと。法師蟬は、まだ今年は來ませんよ」
男は白い齒を見せて、神經質な笑ひ聲を立てた。肩の邊が骨が細く、服の加減で、少年のや

うな稚なさを見せてゐる。何か漠然とした不安が、私をとらへた。男は、兩掌を後頭部に組みその儘うしろに寢ころがつた。今日は、飛行機も來ないらしかつた。低い聲で男は話し出した。

「私はねえ、近頃、滅亡の美しさと言ふことを考へますよ」

しみじみとした、自分に言ひ聞かせるやうな聲音であつた。

「廢墟といふものは、實に美しいですねえ」

「美しいかねえ」

「人間には、生きやうと言ふ意志と一緒に、滅亡に赴かうと言ふ意志があるやうな氣がするんですよ。どうもそんな氣がする。此のやうな燦んな自然の中で、人間が蛾のやうにもろく亡んで行く。奇體に美しいですね」

あとの方は獨り言のやうになつた。

「此の間、妙なものを見ましたよ」

「何だね」

男は持つてゐた双眼鏡を私に渡し、横合ひの谷間を指さした。

「あそこに家が、百姓家が見えるでせう。もう少し右。ええ、そこです。双眼鏡で見てごらんなさい。母家の横に、小さな納屋が見えるでせう。そこの、軒下に何か下つてゐるでせう。見

えますか」

傾いた納屋の入口の梁に、何か長い、紐のやうなものが、風のためふらふら搖れてゐるのが、双眼鏡にうつつて來た。子供が一人、納屋の前の地面にしやがんで、あそんでゐた。それは何だか判らなかつた。どういふ意味があるのか、私には判らなかつた。双眼鏡を返しながら、私は男の顏を見た。

「で？」

「あの家はね、百姓なんです。どこか、遠い所に、田か畠を持つてゐるらしくて、毎日、その夫婦は鍬など持つて出かけて行くやうです。お爺さんがゐましてねえ、長いこと病氣をして、母家の奥の部屋に寢てゐるらしいのです。時々、納屋の横の便所に立つために出て來るのですが、どうも身體がよく利かない。双眼鏡で見てても、危つかしいのですよ。それに長いわずらひだと見えて、邪魔者あつかひにされてゐるらしく、晝飯の仕度に歸つて來た女房から罵られたりしてゐるのです。また子供がゐましてねえ、頭の鉢の開いた、七つか八つの男の子なんですが、これも爺さんを馬鹿にしてゐるらしい。勿論、双眼鏡で見るんだから、聲など聞えはしないけれど、此の默劇（パントマイム）からそのしぐさで私が推察したんですが、まあ、そんな譯なんです。子供は爺さんを馬鹿にしてるけれど、爺さんにとつては孫ですからねえ、可愛いいらしい」

「よく判るもんだね」

男は、かすれた聲で一寸とわらつた。

「さうぢやないかと思ふのですよ。で、爺さんにして見れば、息子夫婦からは邪魔にされるし、行末の希望はないし、と言ふ譯で、或る日のことでしたが、私が此處から双眼鏡で見てゐたんですよ。晝間でね、日がかんかん當つてゐる。爺さんが緣側に這ひ出して來たんですよ。そして庭に下りて、納屋の方に歩いて行く。便所に行くのかな、と思つ見ててゐたら、さうでもないらしい。納屋の奥から苦勞して、踏臺と繩を一本持ち出して來たんです。何をするのかと思つてゐると、入口の所に踏臺をおいて、それに登らうと言ふのです。處が身體が利かないもんだから、二三度轉げ落ちて地面にたふれたりしましてね。何とも言へず不安になつて、私は思はず双眼鏡持つてゐる掌から、脂汗がにぢみ出て來ましたよ。そして終に踏臺に登つた。梁に取りついて、繩をそれに結びつけ、あとの垂れた部分を輪にして、二三度ちよつと引張つて見て、その强さをためして見る風なんです」

「——首を吊る」

「いよいよこれで大丈夫だと思つたんでせうね。あたりをぐるつと見廻した。するとすぐ眞後ろの六尺ばかり離れた處に、影のやうに、あの男の子が立つてゐるのです。默りこくつて、じ

つと爺さんがする事を眺めてゐるんです。爺さんがぎくつとしたのが、此處まではつきり判つた位です。爺さんは、繩をしつかり握つて、その振り返つた姿勢のまま、じつと子供を眺めてゐる。子供も、石のやうに動かず、熱心に爺さんを見つめてゐる。十分間位、睨み合つたまま、じつとしてゐるのです。その中、がつくりと爺さんは、踏臺から地面にくづれ落ちた。男の子は、やはりじつとしてゐて、手を貸さうともしない。地面を這ふやうにして緣側までたどりつくと、爺さんは沓ぬぎにうつ伏せになつて、肩の動き具合から見ると、蟲のやうにしくしく、長いこと泣いてゐましたよ。ほんとに長い間」

男は上半身を起した。

「先刻見えたでせう。あれが、その繩なんです」

私は、ふつと此の男に輕い嫌惡を感じてゐた。はつきりした理由はなかつた。少し意地惡いやうな口調で、私は訊ねた。

「で、いやな氣持がしたんだね」

「――殘酷な、と言ふ氣がしたんです。何が殘酷か。爺さんがそんな事をしなくてはならないのが殘酷か。見てゐた子供が殘酷か、そんな祕密の情景を、私がそつと双眼鏡で見てゐると言ふことが殘酷なのか、よく判らないんです。私は、何だか齒ぎしりながら見てゐたやうな氣が

するんです」

男は、首を上げて空を眺めた。太陽は、ぎらぎらと光りながら、中空にあつた。

「さうですかねえ。人間は、人が見てゐると死ねないものですかねえ。獨りぢやないと、死んで行けないものですかねえ」

男は光をさへぎるために、片手をあげた。強い光線に射られて、男の顏は、まるで泣き笑ひをしてゐるやうに見えた。

午後の當直を終へて外に出ると、夕燒雲が空に明るかつた。今日は麥酒の配給があつたと言つて、交替に來た兵の中には、目緣を赤くしてゐるのも居た。私が當直に立つてゐるとき、交替時の直ぐ前だつたか、緊急信が一通來た。私がそれを譯した。

居住區の方に戻りながら、私はその電報のことを考へてゐた。それは決定的な內容を持つた電報であつた。

居住區に入つて行くと、通路の眞中に卓を長く連ね、兩側にそれぞれ皆腰かけ、卓の上は麥酒瓶の行列であつた。煙草の煙が奧深くこもり、瓶やコップの觸れる音がかちかち響いた。奧

の方に通り抜け、私の席についた。食器に麥酒がトクトクとつがれるのを眺めながら、私は此の騷然たる雰圍氣に何か馴染めない氣がした。卓が白い泡で汚れてゐる。私は上衣を脱ぐと、口に食器を持つて行つた。生ぬるい液體が、快よい重量感をもつて、咽喉を下つて行つた。

私の前には、電信の先任下士と吉良兵曹長が腰をおろしてゐた。先任下士は頰を赤くしてゐたが、吉良兵曹長はむしろ青く見えた。そしてその話し聲がふと私の耳をとらへた。

「大きなビルディングが、すつかり跡かたも無いさうだ」

「全然、ですか」

「手荒くいかれたらしいな」

「どこですか」

「廣島」

ぼんやり聞いてゐた。吉良兵曹長がふと私の方に向きなほつた。

「村上兵曹。何か電報があつたか」

濁つたその眼が、射るやうに光つた。交替前の電報のことが、再び頭をよこぎつた。

「ソ聯軍が、國境を越えました」

私の言葉が、吉良兵曹長に少からぬ衝動を與へたらしかつた。しかし、表情は變らなかつた。

默つてコップをぐつとほした。長い指で、いらだたしげに卓の上を意味なく二三度たたいた。

「參戰かね」

「それはどうか判りません。電報では、交戰中と言ふだけです」

私は吉良兵曹長の顏をじつと見つめてゐた。無表情な頰に、何か笑ひに似たものが浮んだ。ぞつと身をすくませるやうな、殘忍な笑ひだつた。私は思はず目を外した。食器をかたむけて、麥酒を口の中に流し込んだ。再び瓶を傾けて、食器についだ。醉ひがやうやく廻つて來るらしかつた。手足の先がばらばらにほぐれるやうな倦怠感が、快よく身内にしみ渡つて來た。

ずつと向ふ側の卓で、話し聲が漸く高くなつて來た。上半身裸になつて、汗が玉になつて流れてゐる。出口の方に、黃昏の色がうすれかかつた。どうにでもなれと思つて、私は肱を卓についたまま、ついでは飲み、ついでは飲んだ。

次第に醉が廻つて來て、何だかそこらがはつきりしないやうな氣持になつて來た。いろいろとめ度もないことが、頭に浮んで消えた。坊津のことをぼんやり考へてゐた。あの頃はまだ良かつた。坊津郵便局の女事務員は、私が轉勤すると言ふので、葉書二十枚をはなむけに呉れた。衣囊の底に、それはしまつてある。まだ一枚も使はない。——

ふと自責の念が、鋭く私を打つた。櫻島に來て以來、私は家にも便りを出さない。櫻島に來

て居ることすら、私の老母は知らないだらう。私の兄は、陸軍で、比島にゐる。おそらくは、生きて居まい。弟はすでに、蒙古で戰死した。俄かに荒々しいものが、疾風のやうに私の心を滿した。此のやうな犧牲をはらつて、日本と言ふ國が一體何をなしとげたのだらう。徒勞と言ふには——もしこれが徒勞であるならば、私は誰にむかつて怒りの叫びをあげたら良いのか？

洞窟にこもつた話し聲が、騷然とくづれ始めたと思ふと、出口近くの卓から、調子外れの歌聲が突然起り、そしてそれに和すいろいろの聲がそれに加はつた。歌は「同期の櫻」であつた。麥酒瓶の底で卓をたたく。歌聲は高く低く亂れながら、新しい歌に代つて行つた。卓についた肱に、卓を打つ振動が傳はつて來る。眼が据つて來るのが、自分でもわかつた。更に新しく麥酒を傾けて、一息にのみほした。

默つてしきりに麥酒をほしてゐたらしい吉良兵曹長が、身體をずらして私の正面にむきなほつた。もはや上半身は裸になつてゐた。堅さうな、筋肉質の肩の邊が、汗にぬれて艶々と光つた。低い、いどみかかるやうな聲で私に言つた。

「兵隊どもに、戰爭は今年中に終ると言つたのか。え。村上兵曹」

「そんなことは言ひません」

あの厭な、マニアックな眼が、私の表情に執拗にそそがれてゐる。何氣なく振舞はうと思つ

た。飲みほさうと食器持つた手が少しふるえた。

「此のやうに決戰決戰とつづけて行けば、どちらも損害が多くて、長くつづけられないだらうと言ふやうなことは、あるひは言つたかも知れません」

さう言ひながら、私は自らの弱さが、かつとする程腹が立つて來た。私もじつと彼の顏を見据えながら言つた。

「どうでもいいことぢやないですか。そんな馬鹿げたこと」

「今年中に終るか」

執拗な口調であつた。少し呂律が怪しくなつてゐるらしかつた。

「村上兵曹。死ぬのはこわいか」

「どうでもいいです」

「死ぬことが、こわいだらう」

瞳の中の赤い血管まではつきり見えるほど、私は彼の顏に近づいた。醉ひが私を大膽にした。私は、顏の皮が冷たくなるやうな氣持で、一語一語はつきり答へた。

「私が、こわがれば、兵曹長は滿足するでせう」

はげしい憎惡の色が、吉良の眼に一瞬みなぎつたと思つた。それは突嗟の間であつた。立ち

上るなと感じた。立ち上らなかつた。吉良兵曹長は、首を後ろにそらせながら、引きつつたやうな聲で笑ひ出した。聲は笑つてゐたが、顏は笑つてゐなかつた。卓の下で握りしめてゐた私の掌に、今になつて脂がにぢみ出て來た。

一人の兵隊が、卓からはなれて、よろめいて來た。歌聲は亂れながら、雜然と入りまぢつた。

「兵曹長。踊ります」

「よし、踊れ」

笑ひを急に止めて、吉良兵曹長は叱りつけるやうな聲でさう言つた。

その兵隊は、半裸體のまま、手を妙な具合に曲げると、いきなりシュッシュッと言ひながら、おそろしくテンポの早い出鱈目の踊りを踊り出した。よろめく脚を軸として、獨樂のやうに廻つた。手を猫の手のやうにまげて、シュッシュッと言ふ相の手と共に、上や下に屈伸した。歌聲が止み、濁つた笑ひ聲が、それに取つて代つた。

「何だい、そりやあ」

「止めろ。止めろ」

兵隊は、ますます調子を早めて行つた。目が廻るのか、額を流れる汗が眼に入るのか、眼をつむつたまま憑かれたもののやうに身體を烈しく動かした。よろめいて、身體を壕の壁で支へ

た。電燈の光まで土埃りがうつすらと上つて來た。けろりとした顏付になつて兵隊は敬禮をした。

「終りました。四國の踊りであります」

歌ひ聲が新しく起つた。何か彌次が飛んだやうだけれど、はつきり聞えない。向ふの方で、麥酒瓶が碎ける音がした。そして、雜然たる合唱がはじまつた。

さらばラバウルよ　又來るまでは
しばし別れの　涙がにぢむ

私は、眼をつむつた。動悸が胸にはげしかつた。掌で、顎を支へた。顏についた土埃のため、ざらざらとした。頭がしんしんと痛かつた。じつと一つのことを考へて居た。

死ぬのは、恐くない。いや、恐くないことはない。はつきりと言へば、死ぬことは、いやだ。しかし、どの道死ななければならぬなら、私は、納得して死にたいのだ。——このまま此の島で、此處にゐる蟲のやうな男達と一緒に、捨てられた猫のやうに死んで行く、それではあまりにも慘めではないか。生れて以來、幸福らしい幸福にも惠まれず、營々として一所懸命何かを積み重ねて來たのだが、それも何もかも泥土にうづめてしまふ。しかしそれでいいちやないか。それで惡いのか。私は思はず、吉良兵曹長に話しかけてゐた。

「吉良兵曹長。私も死ぬなら、死ぬ時だけでも美しく死なうと思ひます」

殘忍な微笑が、吉良兵曹長の唇にのぼつた。毒々しい口調で、きめつけるやうに言つた。

「おれはな、軍隊に入つて、あちらこちらで戰爭して來た。支那戰線にもゐたんだ。村上兵曹。燒け焦げた野原を、彈丸がひうひう飛んで來る。その間を縫つて前進する、陸戰隊だ。彈丸の音がするたびに、額に突き刺さるやうな氣がする。音の途斷えた隙をねらつて、氣狂ひのやうに走つて行く。彈丸がな、ひとつでも當れば、物すごい勢で、ぶつたふれる。皆前進して、燒け果てた廣つぱに獨りよ。ひとりで、もがいてゐる。そのうちに、動かなくなり、呼吸をしなくなつてしまふ。顏は歪んだまま、汚ない血潮は、泥と一緒に固まつてしまふ。日が暮れて、夜が明けて、夕方鴉が何千羽とたかり、肉をつつき散らす。虹が、また何千匹よ。そのうちに夜になつて冷たい雨が降り、臂の骨や背骨が、白く洗はれる。もう何處の誰ともわからない。死骸か何か、判らない。村上兵曹。美しく死にたいか。美くし、死んで行きたいのか」

言ひ終ると、身の毛もすくむやうな不快な聲でわらひ出した。じつと堪へながら、私は谷中尉のことを思つてゐた。あの若い元氣な中尉も、美しく死にたいと言ふ考へは、感傷に過ぎぬと話して聞かせた。しかしそれが何であらう。虛無が、谷中尉にしろ、吉良兵曹長にしろ、そ

の胸に深い傷をえぐつてゐるに過ぎぬ。私がもつ美しく死にたいと言ふひそやかな希願と、何の關係があるか。

不思議な悲哀感が、私を襲つた。私は、再び吉良兵曹長の方は見ず、虚ろな眼ざしを卓の上に投げてゐた。騒ぎはますます激しくなつて行くやうであつた。昏迷しさうになる意識に鞭打ち、私は更に麥酒を口の中にそそぎ込んだ。かねてから私を惱ます、ともすれば頭をもたげやうとするのを無意識のうちに踏みつぶして來たものが、俄かにはつきりと頭の中で形を取つて來るらしかつた。私は、何の爲に生きて來たのだらう。何の爲に？——

私とは、何だらう。生れて三十年間、言はば私は、私と言ふものを知らうとして生きて來た。ある時は、自分を凡俗より高いものに自惚れて見たり、ある時は取るに足らぬものと卑しめて見たり、その間に起伏する悲喜を生活として來た。もはや眼前に迫る死のぎりぎりの瞬間で、見榮も强がりも捨てた私が、どのやうな態度を取るか。私と言ふ個體の滅亡をたくらんで、鋼鐵の銃劍が私の身體に擬せられた瞬間、私は逃げるだらうか。這ひ伏して助命を乞ふだらうか。あるひは一身の矜持を賭けて、戰ふだらうか。それは、その瞬間にのみ、判ることであつた。三十年の探究も、此の瞬間に明白になるであらう。私にとつて、敵よりも、此の瞬間に近づくことがこわかつた。

（ねえ、死ぬのね。どうやつて死ぬの。よう。教へてよ。どんな死に方をするの）

耳の無いあの妓がかう聞いた時、その聲は泣いてゐるようでもあつたし、また發作的な笑ひを押へてゐるやうな聲でもあつた。醉ひの耳鳴りの底で、私は再び鮮かにその幻の聲を聞いた。私は首を反らして、壁に頭をもたせかけ、そして眼をつむつた。頭の中で、蟬が鳴いてゐる。幾千匹とも知れぬ蟬の大群が、頭の壁の内側で、鳴き荒んでゐる——

洞窟の内の、此の不思議な宴は、ますます狂燥に向ひ、變に殺氣を帶びて來た。入口から風が吹き拔けると、歌聲がまた新しく起つた。卓子がぐらぐらゆれる。私は眼を開いた。ソ聯の參戰も糞もあるか。頭を強く二三度振り、今までの考へから拔け出やうと努力しながら歌でも歌はうとよろめく足をふみしめ、卓に手をかけ立ち上らうとした。吉良兵曹長の聲が、吹き拔けるやうに洞内にひびいた。

「兵隊。軍刀を持つて來い！」

黑白もわかたぬほど醉つてゐるらしかつた。目が据り、顏がぞつとする程蒼かつた。立ち上らうとして、平均を失ひ、卓に肱をついた。麥酒瓶が大袈裟な音を立てて倒れ、白い泡が土間にしたたり落ちた。卓に片手をついて、下座の方を見据えた。

「劍舞をやるから、持つて來い。軍刀」

ふらふらと進み出た。

雜然たる騷音の中から、獸のやうな聲を出して、詩を吟じ始めた。誰の聲か判らない。文句も節もはつきりしないままに、吉良兵曹長は軍刀を拔き放つた。拍手が三つ四つ起つて、すぐ止んだ。笑ひ聲がする。詩を吟ずる聲が二つ重なつたと思ふと、起承も怪しいまま、轉々と續いて行くらしい。軍刀をかざしたまま、吉良兵曹長の上體はぐらぐらと前後に搖れた。眼をかつと見ひらいた。軍刀を壁に沿つて振り下すと、體を開いてこぶしを目の所まで上げた。よろよろとして倒れかかり、私の肩にがつとしがみついた。軍刀は手から離れて、土の上に音無く落ちた。

「村上。飲め。もつと飲め」

彼の掌に摑まれて、私の肩はしびれるやうに痛かつた。それに反抗するやうに肩を張り、私は更に新しい麥酒瓶に左の手を伸ばして居た——

丘を降りて、船着場の放水塔の下で洗濯をした。雲は無く暑かつたけれども、風は絶えず東南の方向から吹いてゐた。洗濯物のかはきも早いだらうと思はれた。放水塔の周圍には、兵隊

が澤山集つて洗濯をしてゐた。ほとんど、年多い兵隊ばかりであつた。私の隣りに洗濯してゐた兵が、もひとりの兵に話しかけるのを聞いた。

「ソ聯が、參戰したさうぢやないか」

「うん」

それ切り默つてしまつた。話しかけられた兵隊は、何か不機嫌な顏をしてゐた。彼等の洗ふ石鹼の泡が、白くふくれてかたまつたまま、私の前の水溝に流れて來た。

鹿兒島の新聞社が燒けてからと言ふものは、此の部隊に新聞は入つて居ない筈であつた。掌暗號長が兵たちに、ソ聯參戰のことを外に洩らすなと訓示してゐるのを私は聞いたが、それにも拘らず何時の間にか擴がつてゐるらしかつた。意業の氣分が、部隊一般にかすかにただよつてゐた。どの點がさうだと指摘は出來ないが、腐臭のやうにかぎわけられた。海岸沿ひの道端に天幕を張つて、士官達は一日中ごろごろしてゐたし、もつこを持つて壕を出入する兵隊も、何かのろのろした動作であつた。

海沿ひ道を通り、洗濯物をかかへて、私は丘を登つた。居住區の前の樹に、洗濯物を注意して擴げた。上空から見えると、うるさいのである。私は壕の中に入り、衣囊の中から便箋を出した。私は卓の前にすわり、便箋を前にのべ、そしてじつと考へてゐた。

暫くして、便箋の第一行目に、私は「遺書」を書いた。ペンを置いて、前の壁をじつと眺めた。

書くことが、何も思ひ浮ばなかつた。書かうと思ふことが澤山あるやうな氣がしたが、いざ書き出さうとすると、どれもこれも下らなかつた。誰に宛てると言ふ遺書ではなかつた。次第に腹が立つて來た。私は立ち上つて、それを破り捨てた。

壕を出、丘の上の方に登つて行きながら、私は哀しくなつて來た。遺書を書いて、どうしやうと言ふ氣だらう。私は誰かに何かを訴へたかつたのだ。しかし、何を私は訴へたかつたのだらう。文字にすれば嘘になる、言葉以前の悲しみを、私は誰かに知つて貰ひたかつたのだ。

（そのことが、感傷の業と呼ばれやうとも、その間だけでも救はれるならそれでいいではないか）

道は盡き、林に入つた。見張臺に行く方向である。あの健康な展望が、私の心をまぎらして呉れるかも知れない。私は、空を仰いだ。入り組んだ梢を通す斑の光線が、私の顏に當つた。

ふと、聞き耳を立てた。降るやうな蟬の鳴聲にまぢつて、微かに爆音に似た音が耳朶を打つた。林のわきに走り出て、空を仰いだ。しんしんと深碧の光をたたへた大空の一角から、空氣を切る、金屬性の鋭い音が落ちて來る。黑い點が見えた。見る見る中に大きくなり、飛行機の

形となり、まつしぐらに此の方向に翔つて來るらしかつた。危險の豫感が、私の心をかすめた。此處を、ねらつて來るのではないか。林の中に走り入り、息をはづませながら、なほ走つた。恐怖をそそるやうないやな爆音が、加速度的に近づき、私の耳朶の中でふくれ上る。汗を流しながら、なほ林の奥に馳け入らうとした時、もはや爆音の烈しさで眞上まで來てゐたらしい飛行機から、突然足もすくむやうな激烈な音を立てて、機銃が打ち出された。思はずそこに打ちたふれ、手足を地面に伏せたとたん、飛行機の黑い大きい影が疾風のやうに地面をかすめ去つた。

地面に頬をつけたまま、私は眼を堅くつむつてゐた。動悸が堪え難い程はげしかつた。咽喉の處に、何かかたまりのやうなものがつまつて居るやうであつた。あえぎながら、私は眼を開いた。眞晝の、土の臭ひが鼻をうつた。爆音はやうやく遠ざかつた。

のろのろと立ち上り、埃をはたいた。手拭ひで汗をふきながら、梢の間から空をすかして見た。飛行機は、もはや遠くに去つたらしかつた。私は歩き出した。

此の前、見張臺でグラマンを見たとき、私は狼狽はしたけれど、恐いとは思はなかつたのだ。今、私をとらへたあの不思議な恐怖は何であらう。齒の根も合はぬやうな、あのひどい畏れは、何であらう？

此の數日間の、死についての心の低迷が、ひびのやうに、私の心に傷をつけたに違ひなかつた。死について考へることが、生への執着を逆にあふつてゐたに違ひなかつたのだ。見張臺に近い小徑を登りながら、私は、ひそかに苦笑してゐた。

（遺書を書かうと言ふ人間が、とかげのやうに臆病に、死ぬことから逃げ廻る）

自嘲が、苦々しく心に浮んで來た。

見張臺に登りつめた。見渡しても、例の見張の男は見えないやうであつた。ふと栗の木のかげに、白いものが見えた。

（まだ、待避をしてゐるのか？）

訝かしく思ひながら近づいて行つた。伏せた姿勢のまま、見張の男は、栗の木の蔭に、私の跫音も聞えないらしく、じつと動かなかつた。地面に伸した兩手が、何か不自然に曲げられてゐた。土埃にまみれた半顏が、變に蒼白かつた。私はぎよつとして、立ち止つた。草の葉に染められた毒々しい血の色を見たのだ。總身に冷水を浴びせかけられたやうな氣がして、私は凝然と立ちすくんだ。

「……」

死體をもたせかけた栗の木の、幹の中程に、今年始めてのつくつく法師が、地獄の使者のや

うな不吉な韻律を響かせながら、靜かに、執拗に鳴いてゐたのだ。突然燒けるやうな熱い涙が、私の瞼のうらにあふれて來た。

（此の、つくつく法師の聲を聞きながら、死んで行つたに違ひない！）

片膝をついて、私は彼の身體を起さうとした。首が、力なく向きをかへた。無精髭をすこし伸し、閉ぢた目は見ちがへるほど窪んで見えた。彈丸は、額を貫いてゐた。流れた血の筋が、こめかみまでつづいてゐた。苦悶の色はなかつた。薄く開いた唇から、汚れた齒が僅か見えた。不氣味な重量感を腕に感じながら、私は片手の甲で涙をふいた。

たうとう名前も、境遇も、生國も、何も聞かなかつた。私にとつて行きずりの男に過ぎない筈であつた。滅亡の美しさを說いたのも此處で死なければならぬことを自分に納得させる方途ではなかつたのか。不吉な豫感に脅えながら、自分の心に何度も滅亡の美を言ひ聞せてゐたに相違ない。自分の死の豫感を支へる理由を、彼は苦勞して案出し、それを信じやうと骨折つたにちがひなかつたのだ。

（滅亡が何で美しくあり得やう）

私は齒ぎしりをしながら、死體を地面に寢せてゐた。生き拔かうと言ふ情熱を、何故捨てたのか。自分の心を言ひくるめることによつて、つくつく法師の聲を聞きながら、此の男は安心

してたうとう死んでしまつたのだ。

風が吹いて、男の無精鬚はかすかにゆらいた。死骸は、頰のあたりに微笑をうかべてゐるやうに見えた。突然、親近の思ひともつかぬ、嫌悪の感じともちがふ、不思議な烈しい感情が、私の胸に湧き上つた。私は、立ち上つた。栗の木の下に横たはつた死體の上に、私は私のよろめく影を見た。

大きな呼吸をしながら、私は電話機の方に歩いた。受話機を取つた。聲が、いきなり耳の中に飛び込んで來た。

「グラマンはどうした。もう行つたのか」

「見張りの兵は、死にました」

「え？　グラマンだ。何故早く通報しないか」

「——見張りは、死にました」

私はそのまま受話機をかけた。

男の略帽を拾ひ上げた。死體の側にしやがみ、それで顏をおほつてやつた。立ち上つた。息を凝らしながら、身體をうごかし、執拗に鳴きつづけてゐたつくつく法師をぱつととらへた。規則正しい韻律が、私の掌の中で亂れた鳴聲に變つた。物すごい速度で打ちふるふ羽の感觸が、

汗ばんだ掌に熱いほど痛かつた。生れたばかりの、ひよわな此の蟲にも此のやうな力があるのか。殘忍な嗜虐が、突然私をそそつた。私は力をこめて掌の蟬を握りしめると、そのまま略服のポケツトに突つ込んだ。蟬の體液が、掌に氣味悪く擴がつた。それに堪へながら、私は男の死體を見下してゐた。

丘の下からは、まだ誰も登つて來なかつた。輕い眩惑が、私の後頭部から、戰慄を伴つて擴がつて行つた——

玉音の放送があるから、非番直は全部聞くやうにと言ふ令は、その日の朝に出てゐた。此の部隊に關係ある電報は一通り目を通してゐたから、その方面の事態には通じてゐたとは言へ、櫻島に來て以來、新聞も讀まずラジオも聞かないから、私は浮世の感覺から遠くはなれてゐた。だから、玉音の放送と言ふことがどういふ意味を持つのか、はつきり判らなかつた。が、今までにないと言ふ意味から、重大なことらしいと言ふ事は想像出來た。不安が、私をいらだたせた。

午前中の當直であつたから、私は聞きに行けない。當直が終り、すぐ居住區に戻つて來た。

放送は、山の下の廣場であつた。そこに皆が集つて聞いてゐる筈であつた。居住區で飯を食べ終つても、放送聞きに行つた兵隊たちは歸つて來なかつた。

「ずいぶん長い放送だな」

私は莫に火をつけ、壕の入口まで出て行つた。見下す灣には小波が立ち、つくつく法師があちらでもこちらでも鳴いてゐた。日ざしは暑かつたが、どこと無く秋に向ふ氣配があつた。目をむけると、三三五五、兵たちが居住區に戻つて來る。放送が終つたのらしかつた。

「何の放送だつた」

壕に入らうとする若い兵隊をつかまへて、私は聞いた。

「ラジオが悪くて、聞えませんでした」

「雜音が入つて、全然聞き取れないのです」

も一人の兵が口をそへた。

「それにしても長かつたな」

「放送のあとで、隊長の話があつたのです」

「どう言ふ話なんだ」

「——皆、あまり働かないで、怠けたり、ずる寢をしたがる傾きがあるが、戰爭に勝てば、い

くらでも休めるぢやないか、奉公するのも、今をのぞいて何時奉公するんだ、と隊長は言はれました」

「戰爭に勝てば、と言つたのか」

「はい」

敬禮をして、兵隊は壕の中に入つて行つた。私は、莨を崖の下に捨てると、暗號室の方に歩き出した。

昨日、通信長が、暗號室に入つて來て、暗號書の點檢をし、かういふ情勢で何時敵が上陸して來るか豫測を許さんから、その時にあわてないやうに、不用の暗號書、あまり使はない暗號書は、燒いてしまつたがよからうと言つた。今日午後、それを燃すことになつた。私も、それに立合はうと思つた。

暗號室に近づくと、二三人の兵隊が、それぞれ重さうな木箱をかついで來るのに出會つた。

「暗號書かね」

「さうです」

私達は山の上につづく道を登つて行つた。私と同じ階級の電信の下士が、ガソリンの瓶を持つて後につづくのと一緒に、私も肩をならべて山の上の方に引き返して歩いた。

林を隔てて、見張臺と反對の斜面に一寸した窪みがあつて、兵隊はそこに木箱を下し、腰かけて汗をふいてゐた。私達が近づくと、それぞれ立ち上つて、箱から暗號書を出し始めた。皆赤い表紙の、大きいのや小さいの、手摺れしたのやまだ新しい暗號書が、窪みに堆高く積まれた。

電信の下士が向ふ側に廻つて、一面にガソリンをふりかけた。私がマッチをすつた。青い焰が燃え、赤い表紙が生き物のやうに反り始め、やがてそれが赤い焰になつて行つた。かすかな哀惜の思ひに胸がつまつた。私は電信の下士官に話しかけた。

「今日の放送は、何だつたのかな」

「さあ本土決戰の詔勅だらうと言ふのだがね」

「誰が言つたんだね」

「電信長もさう言つたし、吉良兵曹長もそんなことを言つた」

私は焰を眺めてゐた。熱氣が風の具合でときどき顏にあたつた。厚い暗號書は燃え切れずにくすぶつたと思ふと、また頁がめくれて新しく燃え上つた。煙がうすく、風にしたがつて空を流れた。布地の燃える匂ひか、そこらにただよつてゐた。時々、何か燃えはじける音がして、火の粉がぱつと散つた。

「いよいよ上陸して來るかな」

棒で暗號書をつつき、かき寄せると、また新しい焰が起つた。煙がさらにかたまつて上つた。

「あまり煙を出すと、グラマンが來たとき困るぞ」

「今日も來ないよ。昨日も來なかつたから」

さう言へば、グラマンは、見張の男を殺して日を最後に、昨日も一昨日も姿を見せなかつた。飛行機が來ないと言ふことは、上陸の期がいよいよ迫つて來てゐるせいではないかと思つた。散發的な襲擊を止めて、大擧行動する準備の狀態にあるのではないか。

（上陸地點が、吹上濱にしろ宮崎海岸にしろ、どの途此處は退路を斷たれる）

山の中に逃げ込むとしても、幅の薄い山なみでは逃げ終せさうにもない。ことに、此處は水上特攻基地だから、震洋艇か回天が再び還らぬ出發をした後は、もはや任務は無い筈であつた。小銃すら持たない部隊員たちに、その時どんな命令が出るのだらう。

ぼんやり焰の色を見てゐた。焰は、眞晝の光の中にあつて、透明に見えた。山の上は、しんと靜かであつた。物の爆ぜる音だけが、靜かさを破つた。兵隊が話し合ふ聲が、變に遠くに聞えた。なびく煙の向ふに、櫻島岳が巨人のやうにそびえてゐた。その山の形を眺めてゐるうちに、靜かな安らぎが私の心に湧き上つて來た。

退路を斷たれやうとも、それでいいではないか。何も考へることは止さう。從容とは死ねな

いにしても、私は私らしい死に方をしやう。私の死骸が埋まつて、無機物になつてしまつたあとで、日本にどんなことが起り、どんな風に動いて行くか、それはもはや私とは關係のないことだ。あわてず、落着いて、死ぬ迄は生きて行かう——

「村上兵曹。この木箱も燃しますか」

「うん。燃してしまへ」

木箱は音を立ててこわされ、次々に投げ込まれた。新しい材料を得て、焰は飴のやうに粘つこく燃え上つた。何氣なく手をポケツトに入れた。何かがさがさした小さなものが手指に觸れた。つかんで、取り出した。昨日捕へたつくつく法師の死骸であつた。すつかり乾いてゐて、羽は片方もげてゐた。私の掌の上で轉がすと、がさがさと鳴つた。外の者に見られないやうにそつと、私はそれを火の中に投げこんだ。燃え焦れた暗號書の灰の中に、それは見えなくなつた。

死ぬ瞬間、人間は自分の一生のことを全部憶ひ出すとか、肉體は死んでも腦髓は數秒間生きてゐて劇烈な苦痛を味はつてゐるとか、死んだこともない人間によつて作られた傳說は、果し、て本當であらうか。見張の男の死貌はまことにおだやかであつたけれども、人間のあらゆる祕密を解き得て死んで行つた者の貌ではなかつた。平凡な、もはや兵隊でない市井人の死貌であ

つた。私が抱き起したとき見た、着てゐる服の襟の汚れを、何故か私はしみじみ憶ひ出してゐた——

夕方になつて、暗號書は燃え盡きた。灰をたたいて、燃え殘りがないかを確かめて、私等は戻つて來た。

居住區に入ると、奥に吉良兵曹長が腰をおろしてゐた。片手に軍刀を支へ、湯呑みから何かのんでゐた。アルコールに水を割つたものらしかつた。かすかにその匂ひがした。

「燒いてしまつたか」

「もう、すみました」

私は手に持つた上衣を寢臺にかけ、卓の方に近づいた。

「兵隊」

衣嚢の整理をしてゐたらしい兵隊が、急いで吉良兵曹長のところに來た。

「暗號室に行つてな、今日の御放送の電報が來てゐないか聞いて來い」

兵は敬禮をすると、急ぎ足で壕を出て行つた。外に兵は誰も居なかつた。壕内は、私と兵曹長だけだつた。皆、相變らず穴堀りに行つたのらしかつた。私は吉良兵曹長に向き合つて腰かけた。吉良兵曹長は例の眼で私を見返した。しやがれた聲で言つた。

「いよいよ上陸して來るぞ。村上兵曹」
「今日の放送が、それですか」
「それは、判らん。此の二三日、敵情の動きがない。大規模の作戰を企んでゐる證據だ。覺悟は出來てゐるだらうな」
嘲けるやうな笑ひ聲を立てた。
「もし、上陸して來れば——此の部隊はどうなりますか」
「勿論、大擧出動する」
「いや、特攻隊は別にして、殘つた設營の兵や通信科は」
俄かに不機嫌な表情になつて、私の顏を見て、湯呑みをぐつと飲みほした。
「戰ふよ」
「武器は、どうするのです。しかも、補充兵や國民兵の四十以上のものが多いのに——」
「補充兵も、戰ふ！」
たたきつけるやうな口調であつた。
「竹槍がある」
「訓練はしてあるのですか」

私を見る吉良兵曹長の眼に、突然兇暴な光が充ちあふれた。臆してはならぬ。自然に振舞はう。私はさう思ひ、吉良兵曹長の眼を見返した。

「訓練はいらん。體當りで行くんだ。村上兵曹、水上特攻基地に身を置きながら、その精神が判らんのか」

「何時出來るか判らない穴を堀らせる代りに訓練をしたらどうかと、私は思ひます」

全身が熱くなるやうな氣になつて、私も言葉に力が入つた。吉良兵曹長は、すくつと立ち上つた卓を隔てて、私にのしかかるやうにして言つた。

「俺の方針に、絶對に口を出させぬ。村上。餘計なことをしやべるな！」

言ひ知れぬ程深い悲しみが、俄かに私を襲つた。心の中の何かがくづれ落ちて行くのを感じながら、私は身體を反らせ、じつと吉良兵曹長の眼に見入つた。吉良兵曹長の聲が、がつと落ちかかつて來た。

「敵が上陸したら、勝つと思ふか」

「それは、わかりません」

「勝つと思ふか」

「勝つかも知れません。しかし——」

「しかし？」
「ルソンでも日本は負けました。沖縄も玉碎しました。勝つか負けるかは、その時にならねばわからない――」
「よし！」
立ち斷るやうに吉良兵曹長はさけんだ。獸のさけぶやうな聲であつた。硝子玉のやうに氣味惡く光る瞳を、眞正面に私に据へた。
「おれはな、敵が上陸して來たら、此の軍刀で――」
片手で烈しく柄頭をたたいた。
「卑怯未練な奴をひとりひとり切つて廻る。村上。片つぱしからそんな奴をたたつ切つてやるぞ。判つたか。村上」
思はず、私も立ち上らうとしたとたん、壕の入口から先刻の兵が影のやうに入つて來た。つかつかと私達の處に近づいた。兩足をそろへると、首を反らしてきちんと敬禮した。はつきりした口調で言つた。
「晝のラジオは、終戰の御詔勅であります」
「なに！」

卓に手をついて腰を浮せながら、私は思はずさけんだ。

「戰爭が、終つたといふ御詔勅であります」

異常な戰慄が、頭の上から手足の先まで奔つた。私は卓を支へる右手が、ぶるぶるとふるへ出すのを感じた。私は振返つて、吉良兵曹長の顏を見た。表情を失つた彼の顏で、唇が何か言はうとして少しふるへたのを私は見た。何も言はなかつた。そのままくづれるやうに腰をおろした。やせた頰のあたりに、私は、明かに涙の玉が流れ落ちるのをはつきり見た。私は兵の方にむきなほつた。

「よし。すぐ暗號室に行く。お前は先に行け」

私は卓をはなれた。亢奮のため、足がよろめくやうであつた。解明出來ぬほどの複雜な思念が、胸一ぱいに擴がつては消えた。上衣を掛けた寢臺の方に歩きかけながら、私は影のやうなものを背後に感じて振り返つた。

乏しい電燈の光の下、木目の荒れた卓を前にし、吉良兵曹長は軍刀を支へたまま、虛ろな眼を凝然と壁にそそいでゐた。前の上には湯呑みが空のまま、しんと靜もりかへつてゐた。奥の送信機室は、そのまま薄暗がりに消えてゐた。

私はむきなほり、寢臺の所に來た。上衣を着やうと、取りおろした。何か得體の知れぬ、不

思議なものが、再び私の背に迫るやうな氣がした。思はず振り返つた。

先刻の姿勢のまま、吉良兵曹長は動かなかつた。天井を走る電線、卓上の湯呑み、うす汚れた壁。何もかも先刻の風景と變らなかつた。私は上衣を肩にかけ、出口の方に歩き出さうとした。手を通し、ぼたんを一つ一つかけながら、異常な氣配が突然私の胸をおびやかすのを感じた。私は寢臺のへりをつかんだまま、三度ふり返つた。

卓の前で、腰掛けたまま、吉良兵曹長は軍刀を拔き放つてゐた、刀身を顏に近づけた。乏しい光を集めて、部厚な刀身は、きらりと光つた。憑かれた者のやうに、吉良兵曹長は、刀身に見入つてゐた。不思議な殺氣が彼の全身を包んでゐた。彼の、少し曲げた背に、餓えた野獸のやうな眼に、此の世のものでない兇暴な意志を私は見た。寢臺に身體をもたせたまま、私は目を据えてゐた。不思議な感動が、全身をふるはせてゐた。膝頭が互にふれ合つて、微かな音立てるのがはつきり判つた。眼を大きく見開いたまま、血も凍るやうな不氣味な時間が過ぎた。

吉良兵曹長の姿勢が動いた。刀身は妖しく光を放ちながら、彼の手にしたがつて、さやに收められた。軍刀のつばがさやに當つて、かたいはつきりした音を立てたのを私は聞いた。その音は、私の心の奥底まで泌みわたつた。吉良兵曹長は軍刀を持ちなほし、立ち上りながら、私

の方を見た。そして沈痛な聲で低く私に言つた。そのままの姿勢で、私はその言葉を聞いた。

「村上兵曹。俺も暗號室に行かう」

壕を出ると、夕焼けが明るく海に映つてゐた。道は色褪せかけた黄昏を貫ぬいてゐた。吉良兵曹長が先に立つた。崖の上に、落日に染められた櫻島岳があつた。私が歩くに從つて、樹々に見え隠れした、赤と青との濃淡に染められた山肌は、天上の美しさであつた。石塊道を、吉良兵曹長に遅れまいと急ぎながら、突然瞼を焼くやうな熱い涙が、私の眼から流れ出た。拭いても拭いても、それは止度なくしたたり落ちた。風景が涙の中で、歪みながら分裂した。私は歯を食ひしばり、こみあげて來る嗚咽を押へながら歩いた。頭の中に色んなものが入り亂れて、何が何だかはつきり判らなかつた。悲しいのか、それも判らなかつた。ただ涙だけが、次から次へ、瞼にあふれた。掌で顔をおほひ、私はよろめきながら、坂道を一歩一歩下つて行つた。

微

生

その道は、病院の横手から、なだらかな坂になつて電車道の方に下りて行くのである。そこに枝を張つた大きな楡の木の、日を射さぬ濕つた根方には、何時でも犬が四五匹かたまつてすわつてゐた。

どう見ても良いところのない駄犬どもであつたが、そいつ等は土くれの上に腹ばひになつたまま、楡の根におのおの心得たふうに顎をのせ、私が側を通り過ぎると、きまつて一齊に厭な横目を使つて私の顏を見た。そろひもそろつて腹がおそろしい程長くて、一尺ばかりの短い四肢が申し譯のやうに生えてゐる。その三尺程もある長い胴を、どういふつもりか知らないが、盲縞や、格子縞や、久留米絣でつくつた腹がけでぐるつとおほひ、背中で紐をむすんでゐるのである。しかし、何時も腹を地面にこすりつけてゐるから、汚れて縞も模樣もわからない。

何か實驗をするために病院に飼はれてゐる犬にはちがひなかつた。が、そいつ等は勝手に、病院の内にある犬小舍を走り出で、楡の木の下で遊んだり、病院の塀ぎはにむらがる羽蟲にほえついたり、ときにはだらだら坂をかけ降りて、電車通りのあたりをうろついたりするのであ

る。

實驗とはどんなことをするのか、血を採つたり、あるひは切開したりするのかどうか、それはよく知らないが、犬どもは皆、非常に神經質になつてゐるらしかつた。人の顏さへ見れば尻尾をふるやうな、そこらの犬とはちがつて、いつもいらいらして何かにつきかかるやうな姿勢で歩くのである。病院外の犬が尻尾を振りながら近づいて來ても、ふりむきもしないか、時にはおどろく程烈しい一方的な敵意を含んで、襲ひかかつた。病院內の犬どもは、お互を腹掛けによつて見わけるらしかつた。

此の薄汚ない犬の貴族どもの險しい顏付、胴が無暗と長い可笑しな物腰、使ひ古した紐のやうな尻尾、胸の惡くなるやうな皮膚の色、いつも涎で濡れてゐる顎、そしてその眼の色だけが悲しげに燃えてゐるのだ——毎朝の出勤の途にその有樣を眺めると、そいつ等の一擧一動は、釘でも打ち込むやうに私の胸に直接響いて來た。何か暗い聯想を伴つて、私の嫌惡を烈しくかき立てるやうであつた。その氣持は、私の心の深い底で、何物かとつながつてゐるらしく思へた。そのくせ、どういふものとつながつてゐるのか、自分の心の中を探つて見るのは、私には恐かつた。朝、日の光を受けて、そいつ等が舗道をのろのろと歩くとき、長い病院の塀を犬どもの踊るやうな影が同じやうに移動するのを見て、何故か私は思はず身ぶるひを禁ずることが

出來なかつた。

此の頃、私は疲れてゐた。生活に立ちむかふ元氣をすつかり無くしてゐた。丁度、楡の木の下の犬共のやうにいらいらしてゐた。どういふ具合でかうなつたのか、生活の因子のどれもこれもがその原因のやうでもあつたし、さうでもないやうでもあつた。朝の光を眞正面に浴びると、瞼の裏からうすい涙が滲み出た。そんな時に、きまつて何か不吉の豫感に似たものを私に與へるのが、その犬共であつた。

朝起きる。いくら眠つても寢不足みたいなぼんやりした氣持で、顏を洗ふ。朝餐をしたためる。その頃まではまだいいのだ。上廁して、衣服を着換へる。その頃からそろそろ私は、今日一日起きてゐなくてはならない事を次第に負擔を感じ始める。夜になつて寢るまでの行程を物憂く想像してうんざりし始める。學校を出て、今の會社に勤め出してから、もう一年近くなるのだが、働いて給料を貰ふと言ふ生活にやうやく倦怠を覺え始めたに違ひない。大げさに言へば、半ば絶望的な氣分で、玄關に出て靴の紐を結ぶ。會社に出て、顏見たくもない同僚や上司の顏を見、言ひたくもないあいさつや會話を交さねばならぬことを考へ、鬱々とうなだれて、自分の靴先を見ながら歩む。毎日同じ氣持で同じ驚きを繰り返すわけだが、坦々たる舗道をバスの停留場にむかつて歩きながら、朝の光を全身の皮膚に感じ取つてゐるとき、急に光がかけ

る。大きな楡の木影に入るからである。いつもその度に私は額をひつぱたかれたやうにびつくりして顔を上げると、必ず楡の木の下の犬どもが一齊にじろりと横目を使つて私を見返すのである。

かうした毎朝の出勤が、次第に私に重苦しくなつて來た。

そこらの露路や曲角から大通りに出て行く、私によく似た勤人らしい男達の間に、重い外套がだんだん少くなつて、明るい色の春の洋服が目立つてふえ出した。バスの停留場では一列に並んで、立ちながら朝の新聞をそれぞれ讀んでゐるのである。毎朝毎朝顔を合はしてゐるのだが、決してあいさつを取りかはさない。それが會話のきつかけになつたりするのをおそれるやうにあわてて目を外らすのである。さうした悲しい習性が、私にはやり切れなかつた。しかし、あいさつを交したり會話をまじへたりするやうな間柄になれば、なほのことやり切れないに違ひなかつた。一列に立ち並び、バスの到着が遲れれば遲れる程、前後の男達に、吹き切れない陰氣な憤りを感じ、ゐても立つてもゐられないやうな氣持になる。その上、バスの中で立つ破目になり、それが滿員で身動きも出來ないやうなことがあると、私はむしやうに腹を立て、うんうんと力を入れながら肩や肱を張つた。それを押し返して四方の人の肩が私に突きかゝつて來た。

氣持ばかりがとげとげとした一日の行程がかうして始まるのである。

ある朝のことであつた。病院の、屍體收容室らしい建物の床の下から、薄汚れたそれらの犬どもが、朝日の光を浴びて、もつれ合ひながら走つて來た。順々に塀の抜穴をくぐりぬけると、一齊に厭な鳴聲を立て、體と體をぶつつけ合ふやうにして、だらだら坂を走り降りた。一番おくれた茶斑の醜い犬の紐がほどけて、腹掛けが短かいうしろ脚にからまる。それでもびつこを引くやうにしてたたらを踏み、右左によろめき走りながら空をむいて、ブリキを爪で引搔くやうなかすれた長鳴きをした。そのぶざまな後姿から目を外らさうとして、不思議な力が私の體をはしつて、どうしても目を外らすことが出來なかつたのだ。私は吸ひつけられたやうに視線を固定させて、坂の下によろめき馳ける犬の姿を見つめてゐるうち、私の足も、目に見えない何物かにからまつて、坂の途中に立ちどまつたまゝ一歩も踏み出すことが出來なくなつた。

その商事會社の祕書課は三階にあつたから、昇降器が大嫌ひな私は、階段を一段一段と毎朝登つて行く外はなかつた。部屋の入口に置かれた出勤簿に印を押すと、雜然と机や椅子が置かれてある部屋の、一番すみつこにある私の机に腰をおろす。給仕がついで呉れる薄い茶を飲み

ながら窓の外を眺めるのである。私の窓からは遠くニコライ堂の建物が正面に見えた。

課長や牛田や河野や鳥巣や猫山や草場や大澤や、いろんな人が出揃ふ頃、九時のベルがびつくりする程大きな音立てて鳴りわたるのである。

すると急にそわそわして机の引出しを開けたりしめたり、帳簿を取り出して意味なくぱらぱらとめくつたりするのが、私の隣席の猫山老人であつた。

秘書課のなかで、言はば雜軍と言つたやうな、決つた仕事を持たずその時々に起きて來る仕事を受け持たせられるのが、皆此の片すみにかたまつてゐた。その中でも猫山は一番年上で、古くから此の會社にゐるのである。あまり地位も高くないことは、私と席を並べてゐることでも判るが、洋服の肱のすり切れた具合から言つても、給料もさう多額では無いに違ひなかつた。洋服の肱から下を保護する黑い布おほひを着けると、身體の恰好がまるで蟹そつくりに見えた。

もう五十の坂を越してゐるのかも知れない。色艶の悪い顏にいつもおどおどしたやうな眼がついてゐて、痩せた頭からは耳のやうに大きな耳が生えてゐた。頭の地から、柔かいまばらな頭髪が生えてゐて、半分以上白かつた。目下の者に對する時には、磊落な物分りの良い態度を粧はうとするのだが、何となく哀しげなその老人を、目下の者どもは皆馬鹿にした。

「猫山さんは名前にたがはず猫つ毛だわね」

と、晝休みの退屈まぎれに女事務員がやつて來て、辨當を食べてゐる猫山の後ろから頭髪をもちやもちやに嬲り廻しても猫山は怒らなかつた。わざわざ自分の頭髪を問題にして呉れて有難いと言つたやうな氣弱な笑ひを浮べてふり返るのである。

「髪の柔かいのは情が柔かいと言ひますがな」

齒ぐきをあらはして嬉しさうな短い笑ひ聲をあげるのである。

「ハロウ、ミスタアキヤツト。課長さんがお呼びです」

給仕までが、かういふ言ひ方をした。

社内の誰か一人の、それが給仕であらうとも相手の氣嫌をそこねると、それが自分がここを追ひ出される素因になりはしないかとびくびくしてゐるのではないか。年のせいか仕事をやるにも、必ず二倍位の時間をかけなければやり上げる事が出來ないのだ。その上、一寸難かしい仕事になるときまつてやりそこなふのである。だからあまり急ぐ必要の無い、面倒な仕事になると、必ず老人のところに廻つて來たけれど、彼は悪い顔もしないで、いやむしろ大喜びで仕事に取りかゝるのだ。自分の能力を誰よりも猫山自身が知つてゐるに違ひなかつた。長い時日をかけて、その仕事を完成する。仕事がそれで途切れると、猫山の態度は急に不安さうになつ

て、おろおろと机の引出しを開けたり閉めたりし始めるのである。

ただ猫山は字がうまかつたから、公式書類などの清書の仕事が時に廻つて來た。さうした時の彼の表情は急に得意氣となり、嬉しさうに身體をゆすりながら硯を取り出すのである。何時に無い大聲で給仕を呼んで硯水を持つて來させ、長いことかかつて丹念に墨を磨る。そしてていねいに紙を伸べて筆をおろす。書いてゐる最中に後ろを通りかかる男があつて、ほう、うまいもんだなあ、などと感心しやうものなら、彼の顏はぱつと赤らみ、喜びを押へやうとして表情がかへつてくづれてしまふのだ。

「なに、慣れでございますよ。私どもの字は全く品も何も無い、字の形をしてゐると言ふだけのものですよ」

入つた時から席が隣り合はせであつた爲かも知れないが、猫山は私にだけは本當の親近感を持つてゐるらしかつた。私も氣弱なたちであつたから、そこに共通なものを感じたのかも知れない。あるひは、――たとへば鳥巢といふ私大の經濟科を出た男は、私と一緒に此處に入つたのだが、今は遊軍の群から離れて、祕書課の中でもちやんとした仕事をしてゐる、私だけが遊軍のまま踏み止まつてゐることに、此の老人は氣易さを感じてゐるのではないか。私は、此の會社で出世しやうとは毛頭思つたことは無いが、唯そんなことを考へると、老人の愛情が何か

鑽のやうに重苦しかつた。

「鳥巣さんみたいになつてはいけませんぞ」

と猫山は私に言つたことがある。鳥巣は悪い男ではない。ただ若年らしい傲岸さから、猫山に對してもづけづけと、時には意地悪くきめつけるだけの話である。鳥巣がまだ入つて直ぐ遊軍の群にゐたとき、一番彼の世話し、一番愛情を示したのは猫山であつたのだ。今では鳥巣が、もとは老人の受持ちであつた物品購入の仕事をやつてゐるのである。そのことを老人は怨みに思つてゐるらしかつた。

「人の仕事を取らうなど、そんなこと考へてはいけませんぞ。そんなにして出世しても何にもなりはせんがな」

私にはこんな具合に氣易く話が出來るらしいのである。が、外の人に對しては、此の男はその場その場の會話に帳尻を合はせやうとするのにあらゆる努力をそそいでゐると言つてよかつた。何十年と生きて來た揚句、身につけた虚生術が、猫山にとつては之ひとつであつたのだ。しかもその處生術が、全然彼に利益を與へないだけでなく、むしろ彼を慘めにするだけの事であるにも拘らず、彼はあくまでそれに努力をそそぐのである。

自分ひとりが笑ひものになつてその場が和やかにおさまるものなら、彼は敢然と道化の役を

買つて出るのだ。さうすることによつて自分の實力の無さや慘めさを人が忘れて呉れればそれでいいのである。人に忘れさせやうとするより、さうすることによつて自分が忘れたかつたのかも知れない。だから一日中人の意をむかへるために、彼は全身をあげて待機してゐる。人の好ささうな卑屈な笑ひを浮べたり、氣の利かない冗談を言つたりするのも、給仕やタイピスト相手には流暢に行くのだが、相手が少し上役になつたり課長になつたりすると、その努力感が、彼のぎくしやくした言動となつてすぐ現れて來るのである。

課長が時々私達の席の近くに來る。課長の一擧一動に、彼は全神經を集めて注意し始める。課長が何か冗談を言つたならば、すぐそれに應じて何からまいことを言はねばなるまい。何かを取つて貰ひたいと言ふ氣配を感じたならば、すぐ席を離れてそれを持つて行かねばならない。かう彼は考へるらしかつた。

「猫山君。子供さんたちは近頃達者かね？」

と課長が聞いたとする。その聲が終らないうちに、彼はもう腰を浮かせて中腰になつてゐるのである。しかし卑屈な笑ひがそのまま頬をこはばらせてしまふのだ。

「はあ、有難うございます。おかげさまで一番下の餓鬼もやうやく小學校——いや國民學校に入りまして、毎日通つてをるでございます。親爺に似ないやうに育てろといつも女房に申して

をるのでございますが、何分血の力と言ふものはおそろしいものでございまして――」

何か氣の利いた事を言はうとして、しどろもどろになつてしまふのだ。しどろもどろな論調を立て直さうとして、此の老人はなほへまな方に會話を持つて行き、ついに二致も三致も行かなくなると、始めて自分の言ひ方が拾收つかぬ所まで來てゐることを知つて默り込んでしまふのである。課長がゐなくなつた後でも、五六分はうつむいたまま、悔恨の色を顏に浮べてゐる。その中に、あたりが白けかへつてゐるのが、彼にはたまらなくなるらしかつた。

意味なく膝をぽんとたたいたり、私の方に向き直つて、突拍子もない話題を持ち出して慘めな狀態を糊塗しようとするのである。社長が彼のことを良く知つてゐて、字の旨いことや、更に文章の旨いことを機會あるごとにほめて呉れるといふのである。字を書いてゐるのは見たことはあるが、私は猫山が文章を綴つてゐるのを入社以來一度も見たことが無い。唯、無茶苦茶な事を口走ることによつて、慘めな氣持からはひ上らうとする猫山老人の表情から、何故か私は目を外らすことは出來なかつた。自らも奈落に墮ちて行くやうな氣持になりながら、必死に堪へて、私も意味ない相槌をうつのである。

最もひたむきな誠實が、最も慘めな結果を引き越すのは何故だらう。會社がひけて、病院横の夕陽の坂を登るときなどに、かうした疑問が私の胸を突いた。此の世に通用しない誠實を、

此の世で使ひこなさうとして何十年と言ふものを猫山はむしろ棒にふつたのだ。彼がさまざまの日常の努力のあとで感じるに違ひない自己嫌悪の深さを思つたとき、私の胸に湧き上つて來るのは、單に同情といふ氣持よりももつと烈しい、憤怒に近い感情であつた。が、私はそれを恐れた。道を歩いてゐるときや酒を飲んでゐるとき、ふと彼のことを思ひ出す。頭をぐらぐらと振つたり、意味ない叫び聲を低く立てたりして、その思念から逃れようとする。が、さまざまの記憶がそれに關連して、しつこく私を追つかけ、遂には何かわからないが非常に恐ろしい事を私に思ひ出させやうとするのであつた。

土曜日のことであつた。

晝までであつたから、私は机の周圍を片附けて歸り仕度をしてゐたら、鳥巣が近づいて來た。大半の人は歸つてしまつて、ひるの日射しが部屋中に明るかつた。空が青く晴れわたつて、ニコライ堂のあたりを鳩が飛ぶのまではつきり見えた。

「動物園に行かないか？」と、鳥巣が言つた。

動物園、と私は呟いたまま、その三字の言葉の響きの中に、不思議なやうな、おそろしいやうな韻律を感じて、思はずあわてて鳥巣の顔を見返した。

「寫眞を取るんだ。女の子も四五人連れて行くよ」

扉のところに、四五人の女事務員やタイピストが身仕度を終へて待つてゐるのである。」

止さう、と私は低い聲で言つた。

「實は今夜、猫山さんが御馳走するから來いといふのだ」

「だつて、それは夜のことだらう」

それはさうに違ひはなかつた。が、私は有耶無耶な返事をして胡麻化した。動物園、と聞いたその瞬間から、何か私を驅り立てる嵐のやうなものを感じたのだ。私は胸騒ぎを感じた。

「君等だけで行つておいでよ」

「とにかく下まで一緒に行かう」

廣い通りに出た。女の子達も、もう明るい洋裝で、街路樹のすそを靑い風が吹いた。

「好い天氣だなあ」と鳥巢が空を仰いだ。

「今度の創立記念日には、いい所に行くと良いわね」と、女の子の一人が言つた。

「去年は多摩川に行つて、みんなで遊んだわね」

濠ばたを沿つて歩きながら、鳥巢が、かう話をした。

「此の會社に入つてすぐの頃、僕も猫山さんから招待されて、あの人のうちにあそびに行つたことがあるよ。大森の方なんでね、生憎その夜は雨が降つてゐたんだ。暗い通りをあちこちさ

がした揚句、うちを探しあてたんだ。變な家でね。二階の座敷がものすごくだだつぴろいんだ。十二疊か十六疊の一間なんだ。そしてまた、恐ろしく大きな床の間があつて、大きな懸字がある。日日是好日と書いてあつて、その前に味の素の罐が五つばかり並べ、その中にお菓子や花が入つてゐるのだ。猫山さんは子供が多いと言ふ話だらう。それにその夜は子供の聲ひとつしないんだ。その廣い部屋で、猫山さんと二人でいろんな話をしたよ。そのうちに猫山さんのおくさんが料理を持て來た。びつくりしたね。何しろ硯箱位の大きさの豚カツなんだ。厚さだつて一寸五分位はあつたね。どういふつもりであんな大きな豚カツをこさへる氣になつたのか、考へると薄氣味惡くなつて來るね。そこで、それを食べながら、猫山さんは床の間を指さして、これが自分のモットーだ、毎日かう言ふ氣持で生きてゐると言つて、懸字にむかつて手をあわせて拜んだよ」

その夜、私は約束を破つて、猫山のうちには行かなかつた。私の下宿の近くのおでん屋で酒を飲んだ。酒盃に映る逆さの電球だとか、德利の胴に映つた光だとか、横に腰かけて飲んでゐる男の眼鏡の反射だとか、そんなものがしみ入るやうに目に訴へ始めて來た。それらの光のなかに、柔毛でも密生してゐるやうな妖しい美しさを感じながら、私は醉つて來たやうであつた。實は、日日是好日と書いた懸軸に手を合せて拜む老人の姿が、あまりにも切なく、私はおそら

く見るに堪へないだらうと思つたからだ。醉つた頭の中で、私の來るのを待ちくたびれてゐる小さな老人の姿を描いたとき、私はもはや、他人事でないやうな苦しみを感じた。お銚子を何本もかへて飲み、その夜は本當に追ひかけられるやうにして醉つぱらつてしまつた。

私が此處に入社したのは、去年の創立記念日の直後であつたが、今年の創立記念日がもうだんだん近づいて來た。毎年の創立記念日の色々の催しは、祕書課のかかりになつてゐたから、今年の事業の相談や、事務の分擔をきめるため、祕書課全員が午後からぞろ〳〵と會議室に入つて行つた。

中庭に面して日の射さない、その上厚ぼつたい窓掛があるため、一層に陰鬱な會議室に目白押しになつて、椅子と椅子をくつつけ、卓の上の駄菓子をつまみながら會議が始まつた。

いきなり半田が立ちあがつて、國民服のポケツトから手巾を出して額を拭きながら、大きな聲を出した。

「今年は何ですか、課長、昨年と同じやうにお祭り騒ぎをやる心算ですか？」

まあまあ、と言つたふうに手を動かした課長は、眼鏡を外してレンズを拭きながら、それを

窓の方にかざして中庭の景色を見るふりをした。
「まあそれをですね、ここで皆さんと相談しやうと言ふわけです」
「それならば今年は、お祭り騒ぎは止して勤勞奉仕といふことにしたらどうです」
一座がどよめいた。すみつこにかたまつた女の子達が顏を寄せ合つて私語するのが見えた。
半田の顏に、妙な笑ひが浮んで消えた。
祕書課では主任格である草場が座つたままで口を出した。
「昨年のをお祭り騒ぎだと言ふのはいけないですよ。それは少しは破目を外した向きもあつたかも知れないが、わざわざ多摩川に行つたと言ふのも社員の體位向上を考へての上のことだから」
「だからです、も少し徹底させて勤勞奉仕といふことにすれば、體位向上にもなるし、精神修練にもなりまさあね。皆さんどうですか？」
會議と言ふと、何時もこんな風なのである。此の間などは、此の社から出征してゐる社員たちに、思ひ出したやうにぽつりぽつりと慰問袋を送つてゐたのだが、ちやんと定めて送つたがよろしいと言ふことになつて會議を開いたところが、年に三度も送つたらいいだらうといふ派と、四度位は是非送れといふ派の大論爭になつて、とうとう有耶無耶のまま會が終り、慰問袋

の事を話に出すのが氣まづくなつたものだからその後は誰一人として送らうなどと言ひ出すものが居なくなつてしまつた位である。面目を賭してまでも四度說を固執するのも、何も憂國の至情にあふれた結果であるわけではない。そういふときの急先鋒になつて大聲を立てるのが、いつも此の半田なのである。

「半田君には腹案でもあるのかね」と、課長が顏をねぢ向けた。

「それがです」と、卓をぽんとたたいた。

「ぼくは何時もから此の會社にも道場をつくらねばならんと思つてゐましたが、何でも今度敷地が選定されたさうぢやないですか」

「ほう、それは初耳だ。どこに定まつたのかね」と課長が乘り出した。

「いや、それは僕も知らんですよ。だからそこに行つて、土を運んだり石ゝ片附けたりして働けば、それだけ早く道場も建つて、ぼくらは週に二日は其處に行つて水をかぶるやうにする」

「ほんとかあ、おい」と隅つこから半田が入つた。笑ひ聲が起つた。半田も笑ひ出さうとして止めた。手巾で唇のまはりを拭いた。

「いやほんとですよ。週に二日位は禊をやつて心神を淨めないことには、我々若者の手によつて東亞再建の大事業はとても完遂出來ないですよ」

「だつて會社の仕事があるぢやないか」
「それがいけないよ。會社と言ふものは、もう昔の會社ぢやないよ。會社の利益を追求する前に、國家の利益に沿はねばならんと言ふのがもう現代の常識ぢやないか。此の理屈がわからない人がまだまだ澤山ゐるんで困る」
と言ひながら、半田はじろりと草場の顔を見た。草場は表情を崩さず、どこ吹く風かと言つた氣持を露骨にみせた。
「それはそうと、去年は君が記念日事業の主任だつたね」と課長は草場の方をむいた。「今年も君にやつてもらひたいと思ふが、いいだらうね」
「事務分擔のことはあとでいいぢやありませんか。今はどういふ具合に記念日を祝ふかと言ふ話なんだ」
といふ聲がそこらで聞えた。
私は猫山老人の隣に席を占めて、ぼんやりとそれらの話を聞いてゐた。鹽せんべいやビスケットを退屈まぎれに澤山食べて、お茶をがぶがぶ飲み、煙草を何本もつづけざまに吸つたものだから、口の中が變になつてしまつた。皆がおのおの勝手なことをしやべつてゐると言ふより、何か底意を藏してふるまふのを見るのは、私にとつては自分が惨めにさせられる思ひであつた

のだ。もちろん、他人のてんでの言動が、私の生活と何のつながりがあるかと、考へないでもなかつたけれど、ぶよぶよとふくれた額のあたりに脂肪をのせた課長の顔や、やせた頬のあたりにふてぶてしい色をたたへた半田の顔や、猿のやうに老獪な風貌の草場の顔や、腹一杯食べた癖に、宿命に引きずられる如くまた菓子鉢に手を出す私自身もふくめて、それがどんなに薄汚ない風景であるかが、我慢出來ない程重苦しく私をおさへつけて來るのである。それを胡麻化すためにも、口中はざらざらになつてるにも拘らず、更に一本の莨をくわへねばならない。

「それはそうと」とぼんと草場は膝をたゝいた。何を言ひ出すかと、皆が一齊に顔をむけたのに一寸間を持たせ、すこしの表情も變へず、

「私は記念日事業主任といたしまして、大體昨年と同様にいたさうと思つてをりますが、異議はございませんね」

「課長」と、すみの方からするどい聲がした。課長は、人一倍大きな顔をふつて、そちらに視線をむけた。

菓子鉢に菓子が無くなりかけた頃から、だんだん會議のもやうは險惡になつて來た。どうせそうなることは會議を開かない前から判つてゐるにも拘らず、此のお人好しの課長は會議が大好きで、何か事があると皆をすぐ會議室に集めるのである。それも、どう言ふつもりかは知ら

ないが、女事務員やタイピストや給仕にいたるまで列席させるものだから、會議はいつも跛行的になつてしまふ。それに女子供の見て居る前で面目玉を踏みつぶされてはやり切れないと思ふのか、一廉の男たちが愚にもつかない所で我を張り合つて、たうとう收拾がつかなくなつてしまふのである。此の會議も、案の定そんな具合になつてしまつて、自然と聲が荒くなり、對立する人々は皆、目をするどく光らせ合つた。

「半田君のやうに、修錬道場が立つか立たぬかそれもはつきりしないのに、勤勞奉仕など持ち出したつて、そりや無茶ですよ。だいいちそれでは、祕書課の者は納得しても、外の課のものが承知する譯がないよ」

「だからさ、承知しないやうな舊體制をたたきなほすためにも修錬道場は必要さ。ぼくは何も、半田君に味方するわけぢやないが、物の道理がさうなつてるんだ」

「そんな强引なこと言つたつて仕方がないぢやないか」と又別の方から聲がした。

「昨年はあのやり方で、皆滿足して歸つたぢやないか。君等だつて良い氣持で浮かれてたぢやないか。去年は晝酒飲んで大浮かれに浮かれた癖に、今年は道場つくれなどと良く言へたものだね」

「ああ、さうだ。半田なんざ、醉つぱらつて多摩川に落ちたつけ」

「多摩川に落ち込んだことと、勤勞奉仕やらうと言ふことと何の關係があるんだ」と半田は險しい聲を出した。
「あれは醉つぱらつて落ちたんぢやねえや。船が傾いたからだい」
「船が傾いたのに皆は落ちなくて、君一人が落ちたのはどう言ふわけなんだ。あれは禊をやつたのか」
「まあまあ」と課長はぶわぶわとふくれた娘の掌みたいな掌を、空間で上下に二三度ふつた。「去年のことは去年のこととして、今年の記念日は如何にすべきや——」
「だから今皆でそれを論じてるわけぢやありませんか。も少し課長もしつかりして呉れなくては困りますよ」
「しかしねえ君」とまた別の聲がした。「記念といふものは、本社の創立を祝ふためにあるものだから、皆が心から祝へるやうなやり方にしなくてはいけないと思ふ。勤勞奉仕もいいよ。いいがだ、皆がよろこんで勤勞奉仕をやつて呉れるかと言ふことが問題なんだ。私が思ふに、さういふ急激な改革はやめて、此の際草場主任に一任といふことにしたら——」
「そんな馬鹿なことがあるか。一任といふことなら、そもそも此の會議は何のために開いたのだ？」

「いつそのこと全社員で多摩川べりに行つて、洋服のまま水に飛び込むといふ趣向にしたらどうだい」

「ひねくれた言ひ方をするな。何だな、君は喧嘩を賣る氣か」

廊下の果から、二時半の時刻をつげる電鈴がけたたましく聞へて來た。體操の時間を知らせるのである。課長が立ち上つた。中腰になつたままはげしく論爭してゐた人々も、がつかりしたやうに腰をおろした。

「ではこれで會議を終ることといたします」

皆、白茶けたやうな顏色になつて。ぞろぞろと陰鬱な會議室を出て行つた。全社員が中庭にあつまつて、レコードにあわせて國民體操をやるのである。蓄音器は三階にあつて、擴聲器を中庭の方にむけてゐる。レコードをかける役目が私になつてゐた。入社した日から今日まで、毎日缺かさずレコード係に私は從事してゐるのである。一寸大きな喫茶店などに行くと、お茶を運んだり註文を聞いたりする女とは別に、いつも白けかへつた顏をして蓄音器の側で長い裾を引きずつてゐる女がゐるが、言つて見れば私もあんなものだ。しかし日も射さぬ、すみつこのトタンのとひに靑苔の生へたやうな中庭で體操するよりはましであつた。

中庭を眺めおろした。いくつもの出口からぞろぞろとはき出された人の群で雜然とした中庭

は、暗くて、どこに猫山がゐるのか半田がゐるのか鳥巣がゐるのかわからなかつた。私は靜かにレコードの上に針をのせた。

すりへつたレコードから、擴聲器に乘つて濁つた旋律が流れて出た。

手を屈伸し、足を曲げる。毎日見なれた風景ではあつたけれど、私はそれを見るたびに妙な錯覺にとらへられた。窓ぎはから見おろすと、上から見るせいか、頭ばかりが巨大に見えて、その下に細つた胴と短かい足が、音樂に合せてゐたへるやうに律動した。不具の如き肉體から、一齊に兩手か左右にのびるのである。また一齊にそれが縮むと、風になびくやうに胴體をまげて頭を下に振る。課長や草場やその他の人々もその中に交つてゐるにはちがひなかつた。窓から見おろす私の眼からは、それらはまるで奇怪な蟲けらのあつまりのやうに見えた。

創立記念日が十日の後に迫つて來た。

どういふ風にやるのかまだ定らないものだから、皆落着かないらしかつた。猫山も仕事がとぎれたので、一日中私の横でごそごそとうごいたり、ひつきり無しに私に話しかけたりした。草場は蒼黑い顏をして、腕を組んだまま無表情にすわつてゐた。かと思ふと、へらへら冗談ロ

を利きながら、女をからかつたりした。

どこからか歸つて來た課長が、机の上の振鈴を、チャランチャランと鳴らした。話しをしてゐたものも仕事をしてゐたものも課長の方をむいた。課長は机の前にぶわぶわと立ち上つた。

「報告します。今年の創立記念日の件ですが、會社の主腦部といろいろ相談した結果、今回は朝のうち本社で祝典を擧行し、それよりQ遊園地で體位向上のための運動會をやることになりました」

と一座を見渡した。

「何しろもう時日が切迫してをりますので、準備の方は手早く拔かりなくやつていただきたい。事務分擔については、次のやうにお願ひします。仕事について不滿な人も、もしかするとあるかも知れないが、何時も職域奉公でありますから。身を捨てて働いてもらひたいのです」

事務分擔を發表するのかと思つてゐたら、手廻しよくプリントして來たと見えて、給仕が一枚づつ配つて歩いた。見たら、私は祝典係になつてゐる。鳥巢もさうであつた。猫山老人の名前の上には祝菓係となつてゐる。給士が猫山を呼びに來た。孫三郎のあやつり人形に似て、腰から下に妙に力がない歩き方をして席を立つて行つた。

窓の下を樂隊が通つた。私は薄い茶をすすりながら、部屋中を見廻してゐた。半田の視線と、

隅然ぴたつと合つた。そして、彼は素早く目を外らした。と思ふと又ちらりと私を見た。そして私の方に近づいて來た。

窓の下を通り過ぎた樂隊が、遠ざかつて曲角を曲つて行つたらしく、微かに聞えてゐた旋律が急に聞えなくなつた。半田は、腰掛けてゐる私の肩にうしろから手をかけた。

「木山君、若い者は團結しなくてはいけないよ。元氣を出して、革新しなくては、それでなくてもよその課の連中は祕書課は何をしてゐかと言つてる位ですよ」

おそらくは、こちらにやつて來たものの、何も私に言ふ事が無かつたので、こんな事でも言つたに違ひない。半田の役目は招待係と書いてあつた。一番樂な、しかし力の入れどころの無い役目である。私は半田の顏を見た。そげた頰のあたりにいらいらした色を浮べて私を見返した。そのままあちらに行つてしまつた。

暫く經つて歸つて來た猫山と私は話しをしてゐた。

「祝菓係とはどんなことをするのです」と私が聞いた。

「それがですねえ」と、猫山は卑屈さうな笑ひ方をした。

「式のときに參列した人たちにお饅頭をくばるのですよ。そのお饅頭のかかりです」

「へえ、つまり饅頭係ですか。それを配るのですか？」

「いやいや、さうでは無いのです。板橋の方に毎年創立記念日に、饅頭を入れる店があるのです。そこに行つて、交渉して來たりするのですわ」
「なるほど。今はそこらの店には饅頭なんか見當りませんね」
「課長さんからも吳々も賴まれましたがな、大仕事ですよ。あつ、さうだ。今日あたりに出掛けないと遲くなる」
あたふたと立ち上ると、古ぼけた帽子を冠つて部屋を出て行つた。
五時になつて、私は鳥巢と一緒に表に出た。濁つた空からは今にも雨が落ちて來さうだつた。銀座に出て、そこらをぶらぶらした揚句、銀座裏のへんな酒場に私を連れて行つた。薄暗い照明の中で、顏の黃色い女が二三人ゐて、窓掛けをあげて外をのぞいた。
「あら、雨よ」
私達も盃を手にしたまま、窓をすかして外を見た。灰を吹き散らしたやうな雨が、音も無く舗道に落ちてゐた。鳥巢は私に酒をつぎながら言つた。
「此の間の會議は面白かつたね。革新派がいきり立つたぢやないか」
「つまりは、あれは私鬪だな。革新の顏してゐるだけの話ぢや無いのか？」
「そりや勿論そうだよ。禊をやれなぞ言ふのは草場さんへのいやがらせだよ」

蒼黑い、動物的な感じのする草場の顏を、私は考へるともなく思ひ浮べた。

「草場さんだつて、一筋縄で行く男ぢやないよ。課長を追ひ出して自分が後釜にすわらうと考へてゐるといふ話だよ。その爲に重役を動かして、課長を左遷させやうと運動してるらしいのだ」

「だから、半田達が草場を嫌ふのかね」と私が聞いた。

「さうぢやないさ。半田一味だつて、そんな單純な正義觀で動くものかね。皆だれだつて自分のことだけしか考へないさ。人間とはそんなものだよ」

「いやだな。何故皆素直に生きて行けないのだらう」

「しかし、それが一番素直な生き方ぢやないか。自分の利益のために生きて行くと言ふことが——」

私は盃を持つたまま、ちらと鳥巢の顏を見た。光線の加減か、鳥巢の顏に何か冷酷な影が消えたやうに思はれた。

雨の音が、激しくなつて、硝子窓にしづくが流れ始めた。外はすつかり暗くなつて、それに風も出たらしい。新しく入つて來る客は皆服の襟を立て、土間のところで一度雞が水をはらふやうに烈しく身ぶるひをした。

「雨が止むまで、暫くゐよう」と鳥巣が言つた。

私達の卓には、お銚子がもう五本も並んだ。

「それはそうと、今日半田がやつてきて、若い者は一致團結しろと僕に言つたよ」と私が言つた。

「何の爲に一致團結するのかね」

「それはぼくにも分らんが、それだけ言つて向ふに行つてしまつた」

「招待係なぞの閑職に廻されたのを、草場の指金だと思つていらいらしてゐるのだよ。もつとも草場の指金には違ひなかろうがね。課長がも少ししつかりしてゐたら、こんなけちな内紛はすぐ押へられるのだよ」

「課長ばかりをせめるのは酷だよ」

私は漸く醉つて來たやうであつた。何時もから無理して押へつけてゐるものが、ともすればせきを切つて流れ出しさうであつた。

私はしきりに盃を乾しながら、あれこれと言葉を探した。相手に話すと言ふよりは、いろいろしやべることによつて、自分自身をいたはりたい氣持で一杯だつたのだ。

「ああ、みんな何故あんなに陰險なんだらうなあ。顔を立てるとか、顔がつぶれたと言ふこと

ばかりにこだわつて。僕は近頃、會社を止めることばかり考へてゐるよ」

目の前に、課長や草場や牛田や、その他の人々の顏がうかんで來ると、私の心の底から、烈しい憎惡の念が湧いて來るやうであつた。私は日毎の惨めな氣持の焦點が、やうやく此の人達の上に結んで來るのを感じた。

「そんな感傷的なことを言つても始まらないぢやないか。世の中つてこんなものさ。女の子とでも遊んでゐればいいのだよ。女の子を連れて上野公園にでも行つて動物園でも入つて來いよ。だいいち、女の子は無邪氣でいいよ」

きめつけるやうに言つた。廣い肩幅の上に少し醉つた鳥巢の眼が私を見た。

「女の子はぼくを相手にしないやうだよ」

「そんなことがあるものか。元氣を出せよ。木山君はだんだん猫山老人に似て來たな。何となく、まつたくそつくりだよ」

「無茶言ふなよ」

と、俄にこみ上げて來た不快さを押へて、私は强ひて笑ひ聲を立てやうとした。かすれて笑ひ聲にならなかつた。

「いや、ほんとにそつくりだよ。おどおどして暮してゐるからぢやないか。逞しく生きて行け

よ。なんだ。僕なんざ、人がどんな悪らつな事しても平ちやらさ。人がぼくを引つくり返す前に、人をひつくり返して見せるよ。ぼくは猫山みたいな人間の屑になりたくないのだ。ああした屑みたいのをふみ臺にして、ぼくは自由に伸びてゆくよ」

胸を張つた精力的な横顔をぬすみ見ながら、私は突然異様な憎しみを此の男に感じてゐた。

その夜は、たうとう醉つぱらつたまま、雨の巷に出て行つて、どこでどうしたのか忘れたが、有樂町の驛で私達は別れた。省線を降りてから長いこと歩いて、病院横の坂をのぼつた。人が自分の足をさらふ前に人を引つ操り返して見せると言つたのも、自信であるか強がりであるかは私には判らない。唯、そんな事を言はねばならぬ彼の心に、私は二重の不快さをそそられた。

（逞しく生きて行けよつて言ひやがる）私は腹を立てて坂を上つてゐた。猫山のことを人間の屑ときめつけた傲慢さを私はその口調を思ひ出して、どうしても許すことは出來ない、憤りを新にしたのだ。雨にうたれて、醉が醒めたやうであつたが、心はむしやうに亢奮して、濡れた帽子をおのづと力を入れて握りしめてゐた。

私の乘つたバスが、急にとまつた。停留場でも無いところだから、何か事故が起きたにちがひない。昨夜の雨で道がぬかるんでゐる。私達のバスの前に、バスが一臺とまつてゐた。それが故障でも起したらしかつた。私は窓から首を出した。

乘客が二三人降りて前の車の下を見てゐる。皆窓から首を出して、のぞいてゐる。車掌が降りて來た。私も首を動かして、人の間から前のバスの車輪のところをのぞいた。人の群が少し動いて何かの一部分が見えた。私は冷水を浴びせかけられたやうにぎよつとした。

犬の首が見えたのだ。目を閉ぢたまま、血の氣を失つた犬の首が車輪の間から突き出てゐた。その横に、ひかれる時外れたらしい腹掛が泥まみれになつてゐるのまではつきり見てしまつた。私は蒼くなつたまま、窓から退かうとした。何故ともわからない不思議なものが、私を驅つて、私は釘づけにされたやうに視線を動かすことが出來なかつた、

まだその犬は生きてゐるらしかつた。毎日、楡の木の下で見る犬どもの一匹であるにちがひなかつた。少し顏の表情は變つてゐるけれども、確かに私には見覺えがあつた。鼻の先のしやくれ上つたところの鼻翼が、ぴくぴくと動いたと思ふと、重く垂れた犬の瞼が少し開いた。瞼の中の、灰色に澱んだ眼玉が、急にはつきり横に動いて、じろりと私の顏を見た。

何故だかは判らないが、私は急に眼の緣が熱くなつて、涙をかくすために思はず右手で目を

おほふた。悲しみとも怒りとも恐怖ともつかぬ烈しい氣持が、心の底から手足にはしつて、私は足をふんばつたまま、窓の桟を力まかせに握りしめた。

酒を飲んだ翌日は、何時も物に感じやすくなるので、涙が出たといふのも、下らぬ私の感傷であるにちがひなかつた。が私には、その事が何時までも氣になつて仕方がなかつた。

犬のからだをどういふ具合に片附けたかは知らない。又、死んだのか生き返つたのかも見届けないうちに、私達のバスは動き出した。

相變らぬ出がらしの茶を吸りながら、私は窓の外を見てゐた。雨上りのせいか空氣が澄明で、ニコライ堂の建物の肌の、雨の色ににじんだところがあざやかにうき立つてゐた。少し風邪をひいたらしい。鼻の奥が時々刺すやうに痛くて、頭のうしろが鈍く重苦しかつた。部屋全體から起るぞわぞわしたざわめきが、何となくうるさかつた。

「昨日は板橋まで行きましてねえ」と、やはり茶を啜りながら、猫山が話しかけた。

「やつと注文して來ましたがな——」

私は肩に積み重なる疲勞を振りのけるやうにして、相槌をうつた。

「それは大變でしたね」

猫山は、註文するまでの苦勞を話したくて仕方がないらしかつた。

「五百人分などはとても引受けられないと言ふのを、二時間もたのみ込んで、やつと引受けて貰ひましたわ」

泣き笑ひに似た表情をした。

「直徑五寸位あるお饅頭が五百箇ですわ。ははは」

その聲は泣いてゐるやうだつた。

そんな大きな饅頭が五百箇もずらずらと並んでゐる所を見たら、ずいぶん變な感じがするだらうと私は思つた。

「で、一體それは誰々に配るのですか」

「記念式のとき來たお客に配るのです。それと、此の會社の課長や部長や主任級の人たち。上野や深川の支社から來る人たち。馬鹿にはなりませんがな、上野支社だけで、主任級以上の人が三十人以上も居ますですわ」

おそらくはどこでもさうであるやうに、無愛想な饅頭屋の店先で、二時間もくどくどと一流の粘りで頼み込んでゐる此の貧相な老人のことを思ふと、私は胸が熱くなつた。

給仕が、私を呼びに來た。私は草場のところに行つた。
「ええと。君らは祝典係だつたね」
「さうです」
「では、鳥巣君と木山君とで、祝典のプログラムをつくつて下さい。去年と同じでいいだらう。大會議室でやるんだから、大きな紙に式次第と書いといて下さい。猫山さんにでも頼むといいだらう」
何か書類をめくつてゐた課長が、此の時ふいに頭を上げた。
「さうだ。社長の祝辭もこしらへてをかねばならない。昨年と同じと言ふわけには行かんだらう」
「社長の祝辭をこちらでつくるのですか」
「さうだよ。どうだね。木山君、草稿をつくらないか」
「祝辭と言つても——どういふ具合に書くのですか」と私は少しどぎまぎした。
「何でもないぢやないか。國家は今非常時にあるから、職域奉公につとめよと言ふやうなことを引き伸ばせばよろしい。社長になつたつもりで書いて呉れたまへ。祝辭の件はそれでよしとして——草場君。饅頭の方の手筈は、ととのつてゐるだらうね」

「はあ」と、草場は無表情のまま答へた。
「猫山さんが連絡して呉れましたです」
「さうか」課長は饅頭に似た顔に滿足の色を走らせた。
「ぼくは一寸出かけるから、後をたのむよ」書類をかかえると、立ち上つて出て行つた。
私も席に戻らうとすると、草場が私を呼びとめた。
「木山君」聲をひそめて、
「變な連中のおだてに乘るんぢや無いよ。今は角つき合はせてゐる時代ぢやない。職域奉公。何事もさうだよ」
「それはどう言ふ意味ですか」
私はむつとして草場の顏を見返した。猿に似た、蒼黑い顏に、ずるさうな笑ひが浮んだやうであつた。手を肩のへんに上げて、ひらひらと振つた
「別段意味はないですよ。祝典の方をしつかりやつて呉れ給へ」
酒の疲れが顎の邊に殘つてゐて、どういふ意味かを追求するのは退儀だつた。横を向いて莫を吹かしてゐる草場の顏は、もうすつかり表情をそぎ落して、私に今言つたことなどすつかり忘れ果てた樣子であつた。

私は鳥巣の席に歩いて行つた。
「やあ、昨夜は失敬。すつかり醉つぱらつた」と鳥巣が私の肩に手をかけた。
「おや、服がまだ濡れてる」
「ああ、歸りに又降られたもんだから」
と私は煙草を取り出した。
「それはそうと、祝典プログラムを作れとさ」
「君つくつて呉れないか」
「君もつくるのだらう。一緒に」
「それが、僕は社長の祝辭をつくらなければならないのだ」
「君それを引き受けたのか?」
煙草に火を點けやうとして、私は思はず鳥巣の顏を見た。
「だつて課長の命令なら仕方が無いぢやないか」
「知つてゐて引き受けたのか?」
「何をさ」私は鳥巣の表情から目をはなさずに、さう聞いた。
「猫山さんからうらまれるよ」

私ははつとした。

「數年來猫山さんは社長の祝辭をつくつて來てると言ふ話だぜ。記念日がすむと、いつも社長が猫山さんに、立派な文章で結構でしたと言ふのをたのしみに、猫山さんは一生懸命つくつてるさうぢや無いか。猫山さんが、社長と直接話しすると言ふのも、年に此の時一度しかないのだよ。僕が物品購買の仕事が廻つて來た時でも、ずいぶん猫山さんは僕をうらんだらしいけれど、祝辭の仕事を君が引受けてしまつたら、猫山さんはきつと腹を立てるよ」

私は、何時か猫山から、社長から文章を賞められたと言ふ話を聞いたことを思ひ出した。

「だつて、一度引受けた以上は仕方がないぢやないか」

今更、草場のところに斷りに行くのは退儀だつた。それよりも、烏巣が仔細ありげな顏で、私に猫山について忠告じみたことを言つたのが、變に私の勘にさわつたのだ。むなしい思ひが心の底に湧きおこり、私は思はず腹立たしい口調で、さう呟やいてゐた。

そのうちに晝のサイレンが遠く近くで鳴り渡つた。私は机の上で辨當を食べてゐた。

まだ冬の間から取片附けないストーヴの側で、國民服のズボンの裾をまくつて、半田が靴下を皆に見せびらかした。

「もう駄目だねえ。洋服の色と靴下の色の調和なぞを考へてたら果しはないねえ。おれんちで

も純毛の靴下をずいぶん買ひ溜めておいたんたが、たうとう使ひ果して昨夜こんなのを買つて來たよ」

派手な、赤の紫のまじつた厭味な色の靴下が、へんになまじろい脛に止めてあつた。

「これでスフ入りだよ。今におれも猫山さん見たいに大穴のあいた靴下をはいて歩くかな。何の寫眞だい。そりやあ」

「此の間、動物園に行つたとき、鳥巣さんから撮つて貰つたのよ」

と、顏の幅の廣いタイピストが答へた。私は箸を止めて顏を上げた。

四五人の女達が、顏を寄せ合つて小さな寫眞を次から次に見て行くのである。笑ひ聲を交へたり指さしたりしながら樂しさうに一枚一枚めくる。此の間、私が誘はれて行かなかつた時の寫眞に違ひなかつた。不思議なことには、私とは何の關係もない寫眞であつたにも拘らず、私はその瞬間、長いこと此の寫眞の出來上りを待ちこがれてゐたことが、今はつきりと判つた。私は辯當を机の中にしまひ込み、立ち上つて机の角を曲り、女等の背からのぞき込んだ。

類の大寫しがあつた、樹々の茂みを背景として二人並んだ寫眞があつた。動物園の正門に皆で並んだのがあつた。小徑を行く後姿があつた。順々に見て行くうちに、私は段々期待が裏切られ、失望とも悲哀ともつかぬ氣持で心の中が一つぱいになつて行つた。

（――何にもうつつてないぢやないか）何かを一心に見つめてゐるらしい横顔の大寫しを見たとき、もう少しで割切れさうで割り切れない氣持になつて私はいらいらした。芝生に横臥した姿。人ごみの中でこちらをふりむいた姿。最後の一枚は、廣場のベンチに女が三人腰かけて笑ひこけてゐる寫眞であつた。寫眞の、も少しで外れるところに、ぼんやりと檻の形らしいものがうつつてゐた。私は思はず目を凝して、その風景に見入つた。

その私の視線を、邪險に女の手がさへぎつた。それを一枚一枚、机の上に並べ始めた。皆で分配するつもりらしかつた。

「あたし、これとこれを貰ふわよ」

「あらずるいわ。これ貴女は半分しかうつつて居ないぢや無いの。これはあたしよ」

「貴女は燒增ししてもらへばいいぢやないの。わたし、これを引伸ばして貰ふわ」

「あら駄目よ。ぢやかうしませう。ぢやんけんで分けて、又ほしい人は鳥巢さんにたのんで燒增しして貰ひませう。おや。地震よ」

春の地震が急に大地や建物をごうとゆすつて、電燈がゆらゆらとゆれた。急にあたりがしんかんとなつたと思ふと、廊下を上草履で急に走る音がした。そして收まつた。

「ああ、こわかつた。こんなよ」

手を取つて自分の胸に當てさせてゐる。柱にかかつた大時計の振子が、ふらふらと不規則に搖れながら止つた。

「あら、寫眞が一枚足りないわ。どうしたの」

「今の地震で、どこかにはねとばしたんぢやないの。そこらに落ちてないこと？」

「虎の檻がうつつてる寫眞だわよ。ベンチに並んだ——」

床や机の下を探してゐる。その女たちの姿を見ながら立ち上つて私は廊下に出た。

廊下を歩いて便所に入つた。便所の中で一寸考へて、また廊下に出て來た。階段の方に歩いて、ゆつくり一段一段とのぼつた。

樹々の茂みを縫ふて、それぞれの大きさの檻に、南極でとれた熊や、アフリカにゐた獅子や、妙な形をした猿や、得體も知れない姿の鳥類が、みんな違つた表情をしてうづくまつてゐる。生れてまだ一度も動物園に行つたことの無い私の頭の中で、さうした鳥獸の姿體は、恐ろしい程切なく私を打つた。階段の手すりに獨つて、一歩一歩のぼりながら、私はポケットを探つて、又手をポケットから出した。逃げ出したくても、鐵の棒や金網が張つてあるから、仕方なく終日ぼんやりすわつてゐるが、それでも諦め切れずに、人が見てゐないと、こつそり鐵の棒を噛つて見たりするさうではないか。夜になつて人がゐなくなると、動物達は一せいに悲しい聲を

立てて鳴き立てるさうぢやないか。僞者ばかりがうろうろしてゐる此の世界の中で。あの鳥や獸たちだけが、眞實の姿をしてゐるのではないか。

私は胸に湧き上る亢奮を押へながら、屋上にのぼりつめた。二十坪ほどのコンクリートの屋上には、誰も人影が見えなかつた。私はあたりを見廻して、ポケットに手を入れた。そして、先刻の地震のときに素早く手に入れた寫眞を取り出した。

風が吹いて、私の髪を亂した。(虎の檻だと言つたな)私は眸を定めて、その寫眞に見入つた。ぼんやりとうつつた檻らしい形の中に、何か薄ぐろくうづくまつたものの形がぼやけて見えた。

毎日の、憂鬱な氣持を、堆積してどうにもならない此の氣持を、此の荒々しい獸が一擧に晴らしては呉れないか。微塵の嘘もない、かけ引きもない、ありのままの生れたままの烈しいものに漲つた獸たちが、私の創痍をいやして呉れるかも知れない。私は風に逆らつて目をあげた。風は、正面からぼうぼうと吹いた。黄色に頽れた太陽の光が、厚い雲の層をやぶつて、不思議なかげを地上にそそいでゐる。家並家並のつづくところ、その果に、黑い上野の山が、長くつづいてゐるのである。私は、じつと見つめたまま、いつまでもそこに立ち盡した。

創立記念日があと三日と言ふときになつて、祕書課の部屋は蜂の巣のやうに人が出たり入つたりした。何しろ時日が切迫してゐるものだから、皆忙しいのである。私も何となく、そこらをうろうろしたりして、少しも氣が落ち着かなかつた。まだ祝辭はつくつてゐなかつた。どうにでもなれと思つてほつておいたら、草場が私に催促した。

「それが、まだつくらないのです」

「こまるねえ。もう三日しかないのだよ」

猫山さんにつくらせて呉れと、私は言はうとしてやめた。

「今日中につくりますよ。でも、つくり方がよく判らないから、サンプルでもあつたら貸してください」

「去年のが、どこかにあつた筈だがなあ。猫山君が持つてゐるかも知れない。猫山君に聞いてください」

私は、險しい氣持になつて自分の席にもどつて來た。

猫山は手持無沙汰らしく、机の前にすわつてあちこちを眺めてゐた。白い柔毛におほはれたせた頭の形を見てゐるうち　私は何故だかわからないが疼くやうな殘忍な氣持が胸の中にわ

き上つて來るのを感じた。それは、烈しい親愛感と背中合せになつた紙一重の氣持であることも、私にははつきりとわかつた。此の瞬間なら、ひよわさうな顱頂を力まかせになぐることも、兩手で抱いて接吻することも、やらうと思へば私に出來るにちがひない。氣持に矛盾することなく、兩方を一度にやることも出來るにちがひないと思つた。私は低い聲で、猫山に話しかけた。

「去年の創立記念日のですね。あの時、社長が祝辭を讀んだでせう。その祝辭の草稿ありませんか」

ぎよつとしたやうに、猫山は振りむいた。

「それを何になさるのです」

「今年の祝辭の原稿をつくる參考にしやうと思つて——」

「誰がつくるのです」

「ぼくです」

猫山のやせた顏がへんに歪んで、何か言はうとして止めた。だまつて、机の引出しを開いて、又ぴしやりと閉めた。

「そんなものありませんがな」聲がふるえた。

「課長さんが、貴方にお頼みになつたのですか？」
どう言ふ氣持であつたかは判らない。私は齒ぎしりをするやうな氣持で、かう言つてしまつたのだ。
「ぼくが、書かせて呉れと課長にたのんだのです」
「本當か」
猫山の首のあたりから、血がのぼつて來て、いつもは血の氣のうすい兩頬が、少し赤くなつた。思はず中腰にならうとしたとき、秘書課の扉を開いて法被を着た男が、入つて來た。何か不思議な豫感に打たれて、私と猫山は思はずそちらに振りむいた。
法被を着た背の低い男は、扉のところに立つたまま大聲でさけんだ。
「お待ち遠様。饅頭を運んで參りました」
なに、と言葉にならない言葉が、猫山の口から洩れた。と思ふと、猫山は蒼白になつたまま、扉の方に走つて行つた。黒い腕おほひを着けた姿は、まるで蟹が走るやうだつた。
「困るぢやないか。君。誰が今日だと言つた、え？　誰が今日持つて來いと言つたのだ？」
猫山は亢奮のあまり、手を上げて法被の男の肩をぐいぐい押すやうにした。そのなじる聲は、けだものがないてゐるやうであつた。

あつけに取られた法被の男も、肩を押され壁にぐいぐいやられて、やうやう怒つたらしかつた。猫山の手をはらひのけた。

「亂暴しないで下さいよ。親方が持つてけと言つたから持つて來たんだ。不要ねえんなら持つてかへりますよ」

二時間も九拜して買ひ込んだ饅頭を、今突き歸しては、もう買へるあてがないにちがひなかつた。猫山は蒼くなつたまま、茫然と立つてゐる。騷ぎを聞きつけて、課長や草場がやつて來た。

「何だい。どうしたんだ」

「へえ、饅頭を持つて來ました」

「なに？　饅頭？　今からもつて來たんぢや、記念日までに皮がかたくなつてしまふぢやないか。前の日に持つて來るといふ話だつたんだらう。猫山君。一體どうしたのだね」

「はい」と、血の氣の無い顏を上げた。「私は、記念日の前日に持つて來いとちやんと言つたのでございます」

「困るなあ」と草場も險しい聲で言つた。

「で、饅頭屋さん。饅頭はどこにあるんだ」

扉を開いた。廊下に五百箇の饅頭が、幾つもの風呂敷づつみになつて置いてあるのである。
「仕方がないや。ぢや置いて行けよ」
「へえ、有難うございます。ではたしかに五百箇」と言ひながら、法被の男は猫山に冷たい一べつを呉れると、扉の外に出て行つた。草場はそれを見送ると、一わたり風呂敷の數を當つたする。猫山の方に向きなほつた。
「猫山君。一體これはどうしたのだね」
「まあまあ」と課長がそばからさへぎつた。
「來たものは仕様がない。三日後までしまつておくのも、不味くなつたり、悪くなつたりするだらうから、今日の中に社内の者だけに配つたらどうだらう」
「さうするより仕方がないですね」と、表情を殺して、草場がさう言つた。
「本社内はすぐ配れるとしても——」と課長は大きな顔をあげて見廻した。
「深川や上野の支社にもつて行かねばならん」
「深川の方には給仕をやりませう」
「上野には、誰か手のすいた人に行つてもらふとして——」
壁ぎはにうつむいて立つてゐた猫山が急に前に飛び出して來た。

「上野には私が參りますでございます。もとはと言へば私のせいでございますから」
肉の薄い襟筋のあたりに、汗がふつふつと流れるのを、私ははつきりと見てとつた。立ち上つた私の視線と、課長の視線が合つた。私はふらふらと出て行つた。
「——手はすいてるかね？」と課長が低い聲で私に聞いた。
猫山はちらと私の顏を見た。その目は燃えてゐるやうだつた。何にも言はず、扉の外に出て行つて、いきなり風呂敷包みの一つに手をかけた。力を入れると、それを持ち上げやうとした。
「お止しなさい」
と、私は思はずそばによつて、後ろから猫山の腕を支へた。それは、老人の力には過ぎるほど重いにちがひなかつた。私が支へた猫山の腕の筋肉が、努力のために奇妙にねぢれてゐるのが、洋服の上からでもわかつた。私はその姿勢のまま振り返つた。扉のところに立つて見てゐる四五人の男の間から、草場が冷たい調子で言つた。
「では、猫山君。持つて行つて呉れ給へ」
私の額から冷たい汗が滲み出た。私は自分の顏色がさつと變るのが、自分でもはつきりわかつた。腹の底から手足の先に荒々しい力が走つて、私は細い猫山の腕をねぢるやうに握りしめた。片一方の手で風呂敷包みの結び目に手をかけた。力を入れて猫山の手からひつぱつた。

「よし。僕が持つて行く」

それは聲にならなかつたかも知れない。肩で少年のやうにひよわな猫山の體を押すやうにして、風呂敷包みを引いた。リノリユームの床に、包みが重量のある音を立てて落ちた。それと同時に、猫山の手が私の二の腕をつかんだ。

「木山君、持つて行つて呉れるかね」課長の聲が背中でした。

食ひ入るやうに私の腕をつかんでゐた猫山の手の力が急にゆるんだやうであつた。私を見据へた青い猫山の目に、急に弱々しい哀願の色が浮んだと思つた。その瞬間、私はやせた猫山の體を押しのけて、包みを片手に下げて歩き出してゐた。包みの重量が、肩のあたりを引きずつた。

それはもはや、猫山の卑屈な態度に對する憤りでもなければ、周圍の人々の猫山への冷淡さに對する怒りでもなかつた。そういふものを超へて、私の心の内をかき立てたのは、給料貰つて飯を食ふには、かう言ふ世界にすら生きて行かねばならぬといふ自分自身の惨めさであつたのだ。私はことさらに包みを持つた方の肩をそびやかし、わざと足音を荒くして廊下を曲つた。包みを引きずるやうにして、階段の降り口まで來た。手すりに手をかけて一段降りた。そのとき、廊下に私を追ふらしい急な足音が、私の耳朶をうつた。私は紐で引かれるやうにふりむい

た。蟹のやうな猫山老人の姿が、いきなり私の前に立ちふさがつた。

頬を力まかせに引つぱたかれたのだ。私は覺えず中心を失つて、包みをがつくりおとすと、その上によろめいたのである。片手で手すりをつかみ片手で包みを支へ、片膝を階段についたままの姿勢で、瞼を燒くやうな熱い涙が兩眼から流れ出た。私は重い包と一緒に、階段を轉りおちるやうにして馳け降りた。

巷には、大風がぼうぼうと吹いてゐた。

タクシーを止めて座席にころがりこむと、私は背中をもたせて目を閉ぢた。閉ぢた瞼に涙が一ぱいたまつた。打たれた頬がかつと火照つた。曲角を曲るごとに古い車體はぎしぎしと搖れ、座席が私の背を衝き上げた。タクシーは搖れながら、次第に速度を早め出した。

（――遁走するのだ）私は、道の兩側を行く人たちの着物を吹く風のさまを、目を見開いてじつと追つかけた。走つて行く私の自動車の厚い硝子窓にも、奇妙な音を立てて風は吹きつけた。ある不逞なたくらみが、次第に私の心の中ではつきりした形をとりはじめたのである。私は頬を押へた。私の頬つぺたを毆つたとき、猫山は何か叫んだやうだつた。氣持を無理に押へつけたやうな濁つた聲だつた。それは獸がほえるやうだつた。何と叫んだのかは判らなかつた。ただ、私をののしる言葉にはちがひなかつた。私を見おろした猫山の、燒けつくやうな視線を突

然私は思ひ出した。私は烈しい胸騒ぎを感じながら、外を眺めた。上野廣小路をわたつて、車は上野の山の下をはしつてゐた。

「ここで止めて下さい」

ぎぎと、不氣味な音を立てて自動車がとまつた。金をはらつて降り立つた瞬間、烈しい風が私の上衣の裾をはたはたとひるがへした。廣い街路を吹き拔けて、塵や砂が一齊にこちらの方に吹きつけた。私は高まつて來る心臟の鼓動を押へながらむきなほつた。——道の向ふ側に、交番があつた。その後ろの樹々の茂みは、風につれてざわざわと荒れ狂つた。私は包みを引きずるやうに持ちながら、頭を上げてまつすぐ交番にむかつて歩いた。

若い、私位の年頃の巡査が、入口に立つて私を見た。私はその包みを、力を入れて交番の床の上にのせた。不審さうな巡査の視線を避けながら、私は低いはつきりした聲で言つた。

「これを、困つてゐる人にあげて下さい。本當は、本署の方に持つて行かうと思つたのですが、どうも入りにくくて。とにかく、おねがひいたします」

聲音が少し亂れた。私はいきなり帽子を取つてお辭儀をすると、あわてて急ぎ足にあるき出した。巡査が何か言つたやうだけれど、風に散つて聞き取れない。呼び返されると面倒だと思つて、私は一目散にかけ出した。

群れ立つ樹々の梢に風はひとしきりいんいんと轟きわたり、雲は自然に形を變へながら淺草の空の方に流れて行つた。上野公園の廣い石段は風に吹かれてぬめぬめと光り、茶店にかけた赤い旗はひつきりなしにはためいた。濁つた淺草の空のあたりに、雲が奇怪な形によじれて、どうかした拍子に、おそろしい犬の首そつくりの形になつた。その牙のあたりから、稻妻がきらきらと光つた。そして風ははげしく私の背中に吹きつけた。

玉砂利のしいてある道を、風に吹かれて小走りに急いだ。野球場と、白い汚れた建物の間を通りぬけた。人氣のない野球場から流れて來る黃砂の中を突つきり、廣場を走りぬけ、私は動物園の前までやつて來た。切符を買ふとき、おつりを貰ふ右手がふるへて、白銅がかちかちと石臺にあたつた。

人混みの中を縫ひながら、私の心はむしやうにせいてゐた。すすけたやうな色をした印度孔雀の檻を通り過ぎた。自然石の石段をかけ下りて小徑をぬけた。薄汚れた水牛のところをすぎた。縞馬のところも、狐の檻も通りぬけた。痩せ衰へたコヨテの檻もほとんど見ずにかけぬけた。廣場の眞中に大きな檻があつて、人が澤山集まつてゐた。私は胸を騷がせて、その方に走つた。

人々の頭や帽子の間から、何か黃色いものが見えたと思つた。黑い鐵棒の間から、黑い筋を

つけた黄色の形のものが、風に吹かれてうづくまる。風に吹かれて黄色い毛がぶわぶわと動いた。あれが虎か？

肩で押し、手で分けて、私は人ごみの中に入つた。背をのばした。十坪ばかりのコンクリートの土間の水溜りに、濡れた腹の毛を押しつけて、薄汚い足の裏を見せ、大きな胴體を物倦げに横たへた。義眼のやうな不氣味な目玉をひとところに据へ、鬚を立てて耳を動かした。厚い鼻翼が荒々しく動いた。汚れた檻の中で、咽喉の下の毛は火藥のやうに黄色かつた。これが虎か？

虎は物倦げに立ち上り、足の尖をざらざらした舌でなめ、險しい表情で檻の中を歩き出した。檻の内に吹き入る風がたてがみを起し、虎は首を反らして、雲行き早い空を見た。耳を立てて、牙を噛み、嵐のやうに烈しい姿勢をした。檻を隔てた木柵に乘りかかるやうにして、私は憑かれたもののやうに、虎のその姿に見入つて行つた。

崖

加納と言ふ男の姿を始めて見た時のことを私は今でもはつきり覺えて居る。それは何か花道を登場すると言つた風な感じで彼は私の視野に現はれて來たのだが、その時の彼の擧動や態度にふと反撥めいたものを感じたのを私は今にして思ひ起すのだ。その感じは勿論その時だけで後は忘れてしまつてゐたけれども、彼との約二箇月間のつき合ひを考へると、無意識のうちに根强くその感じが私に働いてゐたのではないか、そして彼も案外敏感にそれを感じ取つてゐたのではないか、と言ふ氣がしないでもない。が、その間の經緯はあとにして、始めて見た日のことを私は最初に書いて見ようと思ふ。

それはもう日が暮れて、風のある寒い晩であつた。兵舍内の細長い居住甲板に光の薄い電燈がぽつりぽつり點き、卓のあちこちには非番直の兵隊や下士官が低く私語し合つてゐたり、また當直から今下りて來たらしい兵隊が默つて晩い食事をぼそぼそと食べてゐたりする。一種の緊張が鋭どくその空氣を支配してゐた。その緊張に脅えたやうに二三人若い兵が立ち上つて、衣囊棚の衣囊の位置を直したり、手箱の並びを整頓したりしてゐるのだが、手箱の觸れ合ふ堅

い音がいやにはつきり響いたりするのだ。整理しなければならぬからしてゐるのではない、只何となく追はれるやうに手を動かしてゐるに過きないと言ふことは、同じ兵隊である私にはつきりと判つてゐる。だから私も立ち上つて何かやらなければならぬのかも知れないと思ふが、さてどうしたら良いのか判らないのである。あと四五日で正月といふ頃だから、いくら南九州とは言へ隙洩る風ば身を切るやうに寒いのだ。私は胴ぶるひをこらへながら、居住區の片隅で、白けたやうな身の置き所もないやうな氣持でじつと腰かけ、盜むやうに四周を見廻してゐたのだが、その時兵舍の入口近くにゐた兵達の間にかすかなどよめきが起つたと思ふと、入口から居住甲板の中央を貫ぬく通路へつかつかと一人の兵隊が入つて來た。此の男が加納であつた。

——實は此の日が、私が佐世保から此の海軍航空隊に轉勤して來た最初の日であつた。私はひとりで汽車に乘り此の小さな溫泉町の町外れにある航空隊へ、その日の午後入隊して來たのだが、私にとつては最初航空部隊ではあるし、その上連れもなくやつて來たと言ふ點もあつて、心の中は不安でいつぱいだつたのである。分隊士や其の他にもあいさつを濟ませ、居住區に衣囊を下し、先刻から所在なくじつとしてゐるのだが、それも決してぼんやりしてゐるわけではなく、油斷なく居住區の樣子や兵隊の動きに氣を配つてゐたのだ。居心地の良い處か、惡い處

か、勿論海軍一等水兵に過ぎない私にとつては如何なる部隊でも樂である筈もなかつたが、つまり此處暫くの私の生活の苦勞の度合を、所懸命嗅ぎ取らうと努力してゐた。ほんの一寸したことが兵隊の生活にどんなに影響するものであるか。たとへば此の部隊は吊床であるか寢臺であるか（此の居住區へ入つて來るなり私は梁（ビーム）に並んだ吊床のフックを見て落膽した）また梁（ビーム）などの位の高さであるか、通路の入口にあるオスタップの胴廻りなどを横眼で見ながら、私は次第に憂鬱になつてゐたのである。オスタップにしろ、此の前の部隊のに比べるとたつぷり二倍の大きさがあつた。あれに水を一杯入れて二人で持ち上げ右往左往することを思へば氣が沈まない譯には行かない。夕食が濟んだ頃から

「有難うございました」

「有難うございました」

通路に立ち擧手の敬禮をしながら、上陸（外出のこと）の兵隊が次々戻つて來る。皆年若い兵隊ばかりである。私のやうな應召の老兵はゐないらしい。下士官が歸つて來るとデッキから兵隊が飛び出して行つて着換を手傳ふ。なるほどあんな具合に服を疊む　だな、靴磨道具はあのチストに藏つてあるのだなと、一々横眼で納得してゐるうちに、日が暮れて次第に外が暗くなつて來た。その頃から、まだ歸らないのは誰々かといふ詮議のうちに、また二人三人戻つて

來たその後は途絶へ、加納といふ兵隊だけがまだ歸つて來ぬらしいことが、片隅にのけ者のやうに居る私にも判つて來た。また加納がしくぢりあがつた、私の横手にゐた上等水兵が舌打ちと共にはき出すやうに言つた。歸隊時刻は十九時である、それに間もない。兵隊が一人自轉車に乘りむかへに出て行つた。そして十九時が過きた。

軍隊で歸隊時間を切ると言ふことがどう言ふ事か經驗した人には判つて貰へると思ふ。居住區の歪んだやうな厭な空氣の眞只中に、加納一等水兵が戻つて來たのは、それから三十分以上も經つてからであつた。花道を登場する感じと私はさきに書いたが、居住甲板に挿まれた通路へ彼が足早やに入つて來たのを一目見た時、私はまことに豫想を裏切られた感じであつた。漠然とではあるが私は、年の若い一水がしよんぼり戻つて來る光景などを豫想してゐたのだ。私の眼にうつつた最初の加納の感じは、一言にして盡せば鼠のやうな男であつた。色の惡いやせた小さな身體に、青いぴつたりしない水兵服をつけ、緣の歪んだ水兵帽の下の顏は紛れもなく四十歳に近い顏である。服の具合か兩腕が非常に長いやうな感じであつた。此の男も應召兵かと、私は胸を衝かれ、そして何か親近の感が胸にのぼつて來たが、その前に私は加納の顏の表情にふと興味をうばはれてゐた。

それはおそろしく冷たい感じの顏である。自分がしでかした事に對する不安やおそれの氣配

は微塵もなく、むしろ昂然と眉をあげて、通路をまつすぐにすたすたと入つて來て靴を脱ぐと、彼を刺し通すやうな皆の視線をはじき返しながら、丁度一番向ふの卓でひとり食事をとつてゐた暗號部の班長の處にゆき、風貌にそぐはぬ甲高い聲で、

「加納一水、歸隊時間を切りました。御心配おかけいたしました」

しんと靜まつた寮圍氣の中に、その一語一語は私のゐる處まではつきり徹つて來た。

時間を切るといふこと、これが同じ分隊の兵にどんな迷惑をかけるものか、また當人がどんな制裁を受けるものか、海軍に入つて日が淺いとはいへあの男に判らないわけがない。鼠のやうに見すぼらしい恰好の彼がいささかもたぢろぎを示さぬ態度を保つのも、不似合といへば不似合だが、それ故にかへつてふてぶてしい印象を皆に與へるのかも知れなかつた。彼が入つて來る前の居住區の空氣から、彼が皆から憎まれ、又さげすまれてゐるらしいといふ事を私は嗅ぎ取つてゐたのだが、だから私は、どの部隊にも良くゐる型の若い愚鈍な無神經な一水を想像してゐたのである。彼を最初一眼見たとき胸を衝かれるやうな氣がしたのも、此の分隊唯一の老兵である彼に對する皆の憎しみが、そのまま老兵の私に適用されはせぬかと云ふ無意識のおそれであつたかも知れない。入口から班長のところまで時間にすれば三十秒ほどの間、少し氣負つたとは言へごく自然に見える彼の態度の裏に、私ははつきりと、肩を張つたポオズを、た

とへば班長に申告を濟ませた後に頬に浮んで消えたうすら笑ひにも（他の者には笑ひに見えなかつたかも知れない）不自然な心の中の努力を感じたのだ。私は見まいとして、目が外らせなかつた。腰を少し浮かし、デッキの一番むかふに立つ加納の後姿を、大きな上衣から伸びた彼の細い首筋のへんを、私は一心になつて見つめてゐた——。

それから甲板掃除が始まり、巡檢のすぐ前に終つた。吊床に入つて待つて居ると巡檢の列がだんだん近づき、中央の通路を跫音を亂しながら通つて行つた。手提燈の光で巡檢の人々の影が、がらんとした天井や壁に幽鬼の影のやうに動いた。巡檢終りのラッパが鳴ると、煙草喫ふ暇もなく私達は營庭を隔てた防空電信室にぞろぞろと集つて行つた。

防空電信室は枯草地の中央にある半地下壕で、帽子を冠つたやうに土を重ね、厚い木扉から土階を降りると濕つぽい通路がつづき、更に木扉を開くと二三十坪の部屋の兩側に臺を据え、古びた無電機が並んでゐる。電燈はあるが光が薄く、土の匂ひが立つた。私達はその土間に整列した。そこで加納一水は呼び出されてはげしい制裁を受けたのである。

棒と言ふよりも丸太と言つた方が早いやうな荒くれた棒で、倒れないやうに兩手を臺に支へた加納の尻を、年若い逞しい兵長が力いつぱいなぐりつける。棒が肉體に當る鈍い音がすると、加納は身體をよじるやうにして堪へようとするのだが、苦痛の呻きが自然と口唇から洩れて出

るのだ。珍らしい風景ではない、度々私も見て來たことには違ひないが、此のやうな地下の陰鬱な雰圍氣の中で、體力の乏しさうな老兵が力まかせに打たれるのは、思はず顏をそむけたくなるやうな情景であつた。苦痛そのものよりは苦痛の豫感の方が辛いのだ。此の眼前の情景は、何時私に置き換へられる運命かは判らない。私は身體を硬くして眺めてゐたのだが、やがてものの十本も加へられた時兵長は毆るのを止め、私達の方に向きなほりながら

「兵隊としての分際を忘れた者は何時でもかうだぞ。判つたか」

加納は、ほとんど兩手で臺にすがるやうにし、膝は垂れて土間につきかけてゐたが、刑が終つたらしいことを知つたのであらう、氣力を振ひ起して立ち上つた。私刑の最中は彼は顏を兩肩の間に伏せ、思ふに苦痛の表情を皆から眺められるのを避けてゐた樣子であるが、立ち上つて私達の列に戻つて來ようとする時の顏は、流石に澁苦を示してゐたとは言へ、毆られたものがひとしく作るやうな卑屈な被征服者の表情ではなく、むしろ反抗をいつぱい漲らした不敵の面貌であつた。此んな見すぼらしい男の氣力を支へてゐるものは何であらうと、私はすこし驚きながら眺めてゐると、片隅から、待て、と言ふ聲がして、今まで椅子に掛けてじつと見てゐたらしい一人の兵長が中央に歩み出て來た。

「加納。も一度ここに來い。おれが徹底的に氣合ひを入れてやろ」

肩の肉の厚い。もう二十四五と見えるところから徴募兵であらう、金壺眼の奥から眼を光らせて

「年寄りかと思つて手加減してやればいい氣になりあがつて」

もとの臺の處に戻り同じ姿勢をとつた加納の肉體に再び樫の丸太が風を切つて打ち落された。ぽとつといふ音と共に枝を離れた芋虫のやうに加納の身體は苦痛にもだへるのだが

「何處で遊んで來た。溫泉宿の赤提灯か」

そして丸太が再び風を切り

「何といふ女と寢た。はつきり言へ」

打ちおろされる度に、あつあつといふやうな短かい叫びを加納はあげ、それが返事のやうに聞えでもするのか、その兵長は何か引き剝ぐやうな面白さに驅られるらしく、なほも卑猥なことを喚きながら力を振つて棒をうちおろした。憑かれたやうなその仕草を見てゐると、私の身體も思はずふるへ出した。それは責任の無い暴力である。暴力の結果について此の兵長は、何も顧慮する氣持がないにちがひない。斜めに冠つた略帽、短かい事業服の袖から出た隆々たる腕、踏張つた足の太さ、小兒の無責任性をそのまま持つて大人となつた感じの此の男の腕が棒を振り上げる度に、私は心の中で聲無き叫びを加納に立ててゐるのだが

「今あやまつたらいい。何故あやまらないのか」

私刑の始めに嘆願してもそれは絶對に無駄だ。兵長が毆るつもりなら如何な事をしても毆る。しかしある程度毆つたとき、機をつかんであやまればそれで濟むのだ。その機とは半年も兵隊の生活をすれば、必ず判つて來る。兵隊の本能のやうなものだ。何故、今此の瞬間をとらへてあやまらないのか。加納が打たれる光景から私は氣弱く目を外らせながら、そのやうなことを考へ念じ詰めてゐた。——

それからまた長々しい訓辭があり、そして私達は開放された。壕を出ると風が冷たく、見上げると滿天の星であつた。暗がりの中を草原の凸凹に悩みながら兵舎の方にあるいた。このまま何處かに行つてしまひたい、そんな思ひが切なく胸一ぱい擴がつて來た。

居住區へ戻り私は自分の吊床のそばで服を脱いだ、服が冷えて凍へた指では仲々脱ぎ難い。通路で靴を脱ぎ私の方に近づいて來る人影があつた。身體の恰好ですぐ加納だと判つた。加納の吊床は私の隣である。私に背を向けて同じく服を脱ぎ出した。一寸ためらつた揚句、加納一水、と私は低い聲で呼びかけた。今日入つてきた兵隊だがよろしく賴むといふやうな事を私がいふと、脱ぎかけた手を休め、加納は振り返つて暫く私を見てゐたが、突然

「お前は何時の兵隊だ」

私が六月の兵隊である旨を答へると、彼はさげすむやうな薄笑ひを口邊に浮べ、突離すやうな口調で言つた。

「おれは五月の兵隊だ」

それきり默つて服を脱ぎ、私の方を振り返ることなく吊床に上つた。私も事業服を疊み枕の位置に置き吊床にのぼつた。毛布は三枚入つてゐたけれど、身體は伸々あたたまらなかつた。足を曲げ毛布を捲き込むやうにし、暫くじつとしてゐた。今の言葉の意味を考へてゐたのだ。若い現役兵ならいざ知らず、海軍に入つて何箇月にならうと、それが私たち老兵にとつてどんな意味があるのか。私も今孤獨であり、また加納の殴られたあとの孤獨の氣持も判るから、應召兵同志の親しみをこめて働きかけた出ばなをぴしやりと叩かれた感じである。加納が今まで此の分隊でどのやうな取扱ひを受けて來たか知らないが、そんな氣持を突ばねるほど氣分が荒んでゐるのか。私が今まで同じ應召兵に對したやうに、お互ひの弱さの部分でなれ合はうとした氣持を、こんなに冷たく突離され、ふと悔ゆる思ひもあつたが、なほ、それにしても此の男は一體どんな男なのか、何を考へてゐるのか、眠れぬままにぼんやり私は考へつづけてゐたが、先刻打たれて土間にたふれ、そしてまた起き上つてきたときの加納の顏を、私は何となく思ひ浮べてゐた。それは酒に醉つたやうに眞赤な、そして血走つた白眼の中に瞳だけが燃える

やうに何かを求めて動いてゐた。光線の加減か、それはむしろ兇惡な表情に見えたのだ。

暗號室は電信室と共に隊の本館の二階にあつた。日のよく射さない暗い部屋で、卓の上は大小無數の暗號書や亂數盤がいつも取り散らされてある。前の所屬には整頓にうるさい下士官がゐて、いつも暗號書は棚にきちんとしてゐたので、此處に來て私は暗號室に入る度に奇異な感じがした。人の家風は玄關の下足の揃へ方で判るといふが、此處の氣風もあるひは之にあらはれてゐるのかも知れないと私は思つた。私は次の日、加納と同じ當直の組に入れられたのだ。そして毎日時間を定めて此の部屋で勤務についた。忙がしい日課がかうして殆まつた。

暗號室は扉を隔てて電信室となり、之がまた途方もなく大きなリノリウム張りの部屋で、廊下を隔てて暗號長室、電信長室、電話室などが連なる。二三日にして私は此處が兵隊にとつてどんなに幸い分隊であるかが身に泌みて判つてきたのである。

朝六時、總員起し五分前を兵舍番兵が觸れて歩くと、私は吊床からはね起きて相棒の一等兵とオスタップを提げて水汲みに飛んで行く。それから夜は巡檢後の整列が終るまで、自分の時間といふものは文字通り一分もなかつたのだ。ことに此處で辛かつたのは甲板掃除である。甲板掃除は此處では朝夕共掃布を使ふのだが、その水の冷たさもさることながら、掃布を使用す

る床の面積の廣さが私を參らせた。先に書いた部屋部屋、それが濟むと居住區の長い甲板、最後に通路を五六回「廻れ」の聲に追はれて往復すると、足はがくがくし目がくらむ程であつた。その上夜は夜で猛烈な吊床の教練が始まる。

吊床といふものは、一寸見た眼には寢心地良ささうな暖いやうに見えるかも知れないが、内に寢てゐる者にとつては、身體は匙のやうに曲つてゐて窮屈だし、また冬は奇妙に寒いのだ。しかしそれは我慢出來る。問題は吊床の上げ下しにあるのである。毛布を三枚も四枚も入れた吊床を如何にして短かい時間にくくり上げるか、またネッチングからおろした吊床を如何にして早く所定の位置に持つて行き、そしてパイプ一聲、フックに環をかけ繩を解きほぐし直ぐ寢られる形にまで持つて行くか、勿論これは艦隊戰鬪に應ずる爲には必要な熟練には違ひなかつたが、訓練の名を借りて兵長連が必要以上に若い兵隊を苛なむ好個の行事であつたのだ。此處では特にそれが烈しかつた。續け樣に七八回も吊床をくくつたり解いたり、最後には全身汗みどろになるまでやらされるのである。早く出來たものから駈け出して行つて順次に並ぶ。吊床の繩が如何に取扱ひに難いものであるか、くにやくにやしてゐる癖に絶對に此方の意のままにならないのだ。それを息せき切つてどうにかかうにか處理し終へると懸命にかけ出すのだが、何しろ若い張切つた兵隊と競走して私に勝目があらう筈がなく、大ていどん尻に近く行列の後

にくつついて袖で額の汗を拭ひながら振り返ると、その頃になつても吊床について繩を手操つたり卷き上げたり、そして別段狼狽する風もなく、並び吊られた吊床の下をくぐつて歩いて來るのが決つて加納一水であつた。兵長が箒の柄を逆に持つて叫ぶ。

「遲れた者から三名一人づつ出て來い」

棒よりは增しだがあの細い箒の柄とて馬鹿にならないのだ。思はずウッとから呻き聲が出さうになるのを堪へて、三四本打擊を尻にうける。そしてまた、總員起し、と兵長が喚くものだから、今度も打たれてはたまらぬと血相を變へて自分の吊床へ向つて飛んで行く。これが每夜のことであつた。

三十歲の峠を越さうと言ふ人間が、二十になつたやならずの兵長の喚くまま、汗水垂らして掃布握つて床を這ひ廻り、眼の色變へて吊床を上げ下げする圖は、どう考へても氣の利いた風景でない事は私といへども百も承知してゐるのだが、しかし當時の私の氣持としてはさうするより道がないのであつた。私はどんな環境にも適應することによつて、自分の精神や肉體が傷つくことから避けようと考へてゐたのである。自分をなるべく平凡な目立たぬ兵隊に仕立てる事で、下士官や兵長の眼から出來るだけ逃れてゐたかつた。流線形が水中で最も抵抗の少ない形であるやうに、私は意識して現實の摩擦を避け得る形をとらうと努力してゐたのだ。何事に

も目を閉ぢ死んだ氣になつて）と私は自分に言ひ聞かせ、時に浮び上らうとする自己侮蔑の思ひを押へ押へしてゐるのだが、しかしその度に吊床の下をくぐつて悠々と歩いて來る加納の姿が、急に或る意味を帶びたものとして思ひ出されて來る。それは何かにがいものでもロの中に押し込まれるやうな感じであつた。その時加納の顏は、おれは仔細あつてわざとゆつくりやつて來たのだぞと言ふ表情を露骨にあらはしてゐるのだが、それは言はば蹴られるのを自分で志願してゐるやうなもので、私も少からずはらはらするのだけれども、兵長達もいつもどん尻になる加納を一々かまつて居れないのか、あるひはそんな態度を年寄りの愚鈍さと解してゐるのか、私から見れば兵長等の暴力に對する露骨な挑ゐと見える彼の擧動が案外そのまま見逃されてゐるやうであつた。

入隊して忙がしい四五日が終つた。昭和二十年の一月元旦が來て、私は居住區で酒を飲む下士官や兵長のために肴を烹炊所に貰ひに駈け廻つたり、薄つぱらつた兵長の代りに當直に立つたり、目の廻るやうな忙がしさのなかで、よそごとのやうに三十歳になつてゐた。やつと巡檢後仕事が終へて自分の體となり、私は寒風の營庭を起り拔けて兵舍の陰の煙草盆に行き、ふるへながら今朝から始めての煙草の煙をふかぶかと喫ひ込んだ。空には血のやうに赤い滿月がかかり、兵舍の影は黑々と地に落ちてゐた。煙草盆には私の他に唯一人ゐて、それが煙草を喫ひ

込む時ぽつと明るく照された顔はまさしく加納であつた。私は思はず親しさが胸にあふれ、傍に近づいて行つた。

「加納一水ぢやないか」

加納はびくりとしたらしいが、私であることを認めると「村上一水か」と低い聲で應じた。そして暫らく默つたが、私は一日中こんなに多忙であつたにも拘らず、誰とも言葉を交してゐなかつたし、また入隊以來の内証した氣持を何かしやべることによつて散らしたい願ひにかられてゐたから、兵舍の壁に寄りかかる加納に肩を並べ、むしろ押すやうにしながら話しかけた。

「此處は非道い處だね。よく今まで一人で我慢したな」

加納は肩をすぼめて煙草を忙がしげに喫つたが、やがてぽつんと

「こんなものぢやない。もとはもつと非道かつた。俺は三箇月もゐるんだ」

「まるで一日中煙草喫ふ間もないぢやないか」

ふふ、と加納は低く笑つて「煙草のみたけれは何時でものみな。誰に遠慮してるんだ」嘲けるやうな口調であつたが、急に語調を變へて

「今まで何處に居たんだ」

「佐通（佐世保通信隊のこと）から來た」
「お前學校出だといふのはほんとか」
私が默つてゐると、加納は煙草盆の中に投げ込み、大きな欠伸をしながら
「學校出ともあらうものが、どこの土百姓の倅とも知れない奴から追ひ廻されて、掃布握つて這つて廻るのも大していいざまぢやないな」
私も少しむつとして
「しかし皆の前で犬猫みたいにぶたれるよりは良いからな」
「ぶたれるのにこりたな。バッタがこわいのか」
「こわくは無いさ。あんな子僧つ子から打たれるのは恥辱だからよ」
「恥辱？」加納は身體をずらして私の方に向き直つた。「打たれるより、子僧つ子が喚くまま蟷螂みたいに尻をおつ立てて床を這ひ廻る方が恥辱ぢやないのか」
「そりやさうかも知れないが」と私は少しどもり「しかし掃布持つて走り廻つてゐるのは自分で進んでやつてゐると思へば濟むからな。ぶたれる方は方はさうは行かない。此方の考への紛れやうがないぢやないか」
「うまく胡麻化しあがる」加納はまた嘲けるやうな短かい笑ひ聲を立てた。「おれはな、そうい

ふ考へ方に我慢が出來ないんだ」

烈しい口調であつた。自ける氣持があつて私は默つて煙草をすつて居ると、悪いと思つたのか暫らくして彼は、自分の顏をゆつくり私に近づけながら

「お前はいくつになる」

「おれは今日から三十だ」

「三十？」ふつとさげすむやうな口調でいふと「おれは、今日で三十九歳よ。いい加減氣の利いたものなら功なり名とげ、妾の一人も置いてゐる歳だあ」と言つてゐることとは反對に、言葉の調子はひどく沈痛にひびいた。

此の日からしかし、私は加納に急速に近づいて行つたやうである。近づいたと言つても、まだ私に對する彼の言動の端々に私の理解の出來ない、排他の風情があつたが、それは私に對してだけでなく他の一等兵に對しても彼は猶露骨に示してゐたから、彼はもともとそんな性格なのだらうと考へただけで私は深く氣にとめなかつた。また深く考へるほどの餘裕も私にはなかつた。ただ當直が同じではあるし吊床が隣り合せであるから、自然彼の言動は殘らず私の眼にうつつて來る。

寒い日が一日一日經つた。無暗に忙がしいとは言へ私もだんだん要領を得て來て、たとへば烹炊所に配食鍋をおさめて來る歸りに烹炊所の背後にある裏山の崖の下にある煙草盆で皆にかくれて一服することも覺えたし、時には防空電信室の當直を志願して一晩樂をして見たりすることも覺えた。防空電信室は空襲の時に使用するために作られたものの、その頃は空襲など無い頃だつたから、單に巡檢後の整列に使用されるだけで、誰か一人兵隊が無電機などの番人として殘るだけであつた。これはまことに良い配置だつた。

烹炊所の背後の崖は高さは百尺ほどもあつて、此の航空隊をつくるために切られたものではない證據に肌理は古び、枯れ殘つた羊齒などがまちこちすがり付き、夕陽を浴びた時などの崖の肌は異樣な赤さで私の視野にそそり立つた。ああいふ赤い岩は此の地方に特有のものらしく、溫泉と何か關係があるのだらうと私は今でも思つてゐる。崖を廻つて暫く行くと內海となり、指揮所の建物が見えるあたりが此の航空隊の水上基地である。此の指揮所にも暗號員が一人づつ交替で詰めて、飛翔中の水上機と「多」といふ暗號書でもつて連絡する。此の配置は、忙がしいといふ點では本部よりも忙しかつたが、一人であるから本部に居る時のやうに下士官や兵長から小姑的な苛められ方をしないですむから、またこれも私の好む配置であつた。しかし此處は熟練した者が必要だといふ譯で、私如きには仲仲やつて貰へない。おほむね私は本部

暗號室に詰めて、電報の淨書などやらされる。時には加納が淨書をやることもあつたが、大ていは私に押しつけられる。面白くない仕事だから暗號を引きたいと思ふけれども、私が一番新らしい兵隊だから仕方がない。

若い暗號兵等の氣持は、私は今もつて判らないのだが、彼等は自ら志願して海軍暗號兵となつて來たにも拘らず、實に暗號を引くことに於ては不熱心であつた。上等兵になつてもまだ暗號の引き方すらあやふやな者がある位で、淨書に廻つて來る彼等の草稿は字が汚いし誤りは多いし、誤字檢出などに到つてはほとんど之を試みる風がないやうであつた。その間にあつて加納だけは不思議に熱心であり、次から次へと電報を飜譯して倦むことを知らない樣子であつた。しかし加納の場合は所謂株を上げるために熱心であるのではないことは日頃の言動からおしても判るので、暗號を引いてゐると氣が紛れるといふ點もあらうけれども、暗號の飜譯といふことには一種の手工業的な面白さがあるせゐにちがひないと私は思つた。だから他の兵隊はそれを良いことにして難かしい電報を皆加納に押しつける。

一度、淨書に廻つて來た加納の草稿に明かな飜譯誤りを見つけて、私はそれを指摘したことがある。それも私は成意をもつてやつたのではなくて、それが淨書係りの一種の責任にもなつてゐたのだが、さうすると加納が顏色を變へて食つてかかつた。

「どこが間違つてゐるのだ。いい加減なけちをつけるな」

何をそんなに怒るのだらうと私はむしろあつけに取られながら、私は加納の青ざめた顔を見返した。そして、此處の文章が可笑しいからも一度調べ直したらどうかといつたとき、加納は指をぶるぶるふるはせながら

「近頃此處に入つて來たばかりで何も知らない癖に何だ」

暗號員としての經歷も淺いのに僭越だと言つた風な口振りで私をにらみつけた。最初の日、おれはお前より一箇月早く海軍に入つてゐるのだぞといふあの言ひ方が未だに私の胸に殘つてゐるので、私はそのまま默つてしまつたが、ふと私は彼の考へ方や感じ方に對するひとつの鍵が此の時、おぼろげながら掴めたやうな氣がしたのである。

此まで書いて來て讀み返して見ると、此處に書かれた加納といふ男は何時も怒つた顏で力んでゐるやうに見えるが、之は私がそのやうな瞬間の彼ばかりを取り上げて書いたからで、私に對しても優越的な時には嘲弄的な態度を示すことは變りなかつたにしろ、私は彼がもともと善良な型の人間であり、私にも時には不親切ではなかつたことを認めなければならない。彼が此の分隊から半ば憎まれ半ば輕蔑されてゐるのも、彼が時々事件を起して分隊員に迷惑をかけたり、また暗號は別として內務において不手際であつたりする事、そしてそれ等のことに對して

彼が後悔の色も反省の色も示さず平氣でゐることなどによるのであつて、彼の暗號に熱心なことは皆認めてゐたのではないかと思ふ。晝食後の、課業始めまでの短かい時間を、日の當る煙草盆などに年若い一水どもを集めて彼が自慢話しなどしてゐるのは、遠くから見ればまことに罪のない風景であつた。たとへば海軍に入る前の自分の生活を、志願兵の十五六の少年たちに話してきかせる。

「…日に五時間も働けば、二圓か三圓はすぐよ。おれなんぞは腕が良かつたから、五圓六圓は平ちやらさ。早いとこ仕事を切り上げて一風呂かぶつて、あとは一杯やりに皆して出かけて行く。その頃で一本が二十錢か二十五錢よ。お前ら、まだ酒のんだこともねえんだろ」

彼が職人か何かをやつてゐた時のことである。少年たちはまだ酒の味を知つてゐる筈もないから、彼はそこで酒の味を微に入り、細をうがつて說明し始める。そんなことを說明してゐる彼の表情を、一度私は仔細に觀察したことがある、彼の言葉は話がすすむにつれて次第に險を帶びて來る。いらいらしたものがだんだん眉の間に浮んだり消えたりし始めるのだ。

「酒飲んだ事もないお前たちにいくら聞かしても判るまいが、つまりだな、おれは今までに延數にしておてうしを一萬本二萬本を飲んだつて話よ。こうやつて海軍に引つぱられなきや今頃はおれは棟梁か何かで…」

そして何か詠嘆的な口ぶりで自分の不運をのろひ始める。私は了解する。彼は今、海軍の一兵士として十五六歳の自分の息子のやうな兵隊と同列に置かれてゐることに腹が立つて仕方がないのだ。だからどうにかして、自分がお前たちと違ふと言ふと言ふことを示したくてたまらないのだ。おてうしを一萬本も飲んだことが彼等に對して誇りになることでも無いんだらうが、彼はそこにすがるやうにして話をすすめて行く。勿論少年暗號員たちも、三十九にもならうと言ふ親爺がそんなことを自慢にしてゐるとは悟り得ないから、相槌をうちながら聞いてゐるが、彼等の人間價値判斷の根柢は海軍の兵隊として見込があるか無いかに盡きるので、いつこうに加納の意を汲んで加納を尊敬しようとはしないのである。それを感じて加納はますますいらいらし始めるらしかつた。

「お前らには何を言つても、ぬかに釘だあ」

彼が好んで相手とするのは、去年の五月二十五日防府海軍通信學校に入つた志願兵たちで、彼から見ると半箇月若い兵隊なのである。だからこんな言ひたい放題のことを言ふのだが、若いと言つても自分より古い兵隊には彼も言ひはしない。言ひはしないが同じ氣持は内訌してゐるので、自然と不貞腐れた態度になつてあらはれるのである。

此のやうな奇妙な自尊心は何であらう。自尊心、とは言へるだらうが、現實に見て觀念的な

悪あがきに過ぎないから、そんなことを積み重ねて行く度に、彼はますます救ひのない泥沼に落ちて行くらしかつた。そのことは彼にも歴々と自覚されるらしく、彼は時あつてか猛然として、自分が子供のやうな兵長や下士を恐れてゐないと言ふことを身をもつて實證しにかゝるのだ。實證すると言つても、誰にと言ふあてはない。自分自身で納得が行けばそれでいいのだらうと思ふ。吊床教練の時でも始めから意識的に手をのろく動かして遅れ、そして自分では不敵なつもりの薄笑ひを浮べながら行列の背後についたりするのはこんな氣持のときなのだ。そして祭典的な物物しい身振りで兩手を上げ、兵長の棒を尻に受ける。むしろそんなことに露悪な喜悦をすら感じてゐるらしい彼の擧動を眺めるとき、私の胸に浮び上つて來るのは、悲しみとも怒りとも嘲けりともつかぬ一種の痛烈な感じであつた。

毎夜の吊床訓練でも、段々慣れるにしたがつて私も餘裕が出來、隣の加納の吊り方にも氣がつくほどになつてゐたが、彼も私と同じく生來手足を早く動かすことは苦手らしく、かてて老齢のせいもあつて、吊床などは不得手に見えたが、それでも時には手順がうまいこと行つて、濟んで走つて行き行列の中程に加はることもあつたのだ。そんな時の彼はまことに嬉しさうに足音を立てて走つて行き、行列の中から私などが苦闘してゐるのを晴れやかに眺めてゐる。そんな時遅れでもしようものなら、あの加納よりも遅れたといふかどで平常の二倍ほども毆られ

なければならない。だから私としても、加納の吊り方には極度の關心を持たざるを得ないのだ。

私は知つてゐる。彼はあの破局的な心境にある時でない限りは、手足を極度に有效に動かしてせめて列の中程に行きたいと努力してゐる事を。しかし操作の中程にして、周圍の吊床から跫音が次々馳け出して行くのを聞くと、彼は急にのろのろとした動作に變り、さも始めからやる氣は無かつたんだぞと言つた風な表情で、皆の視線をはじき返しながら悠々とこちらに歩いて來る。一所懸命に努力し、その揚句子供みたいな兵隊に後れを取るといふことが、またそれを他に知られることが、思ふに彼には何ものにも增して苦痛であつたのだ。その自尊心を傷けられる苦痛に比べれば尻を打れる痛みなどは物の數でもないらしいが、しかしそのやうな胡麻化しを重ねて行くうちに彼はだんだんやり切れなくなつて來る。

それはヒステリイの發作のやうに、破局的な心境に彼が陥ち込むのは一定の週期があつて、それは別段注意せずとも彼が私に對する態度ですぐ判つた。彼をのぞけば唯一の老兵である私が、若年兵に伍して易々諾々と勤務してゐる、私にとつては（死んだ氣になつて）と言ふ無二の生き方であるにも拘らず、彼には下士官や兵長の腕力を畏怖しての從順とうつつて來るらしかつた。此のやうな處に自分が落ち込まうとすることから踏み止まらうと、彼は無茶苦茶にあがいてゐるのだから、そんな私の姿に彼は自分の最も厭らしい影を見るにちがひないのだ。そ

の氣持を、彼はもはやおさへることが出來ない。

「大學を出たと言ふいい旦那が、何てざまだよう」

バイブ一聲、私が汗を流しながら吊床の繩をくくつてゐると、自分ものろのろと手を動かしながら、流石に聲をひそめて私にだけ聞えるやうに憎々しげに突掛る。下士官や兵長に對して重に彼のいら立ちをそそるらしかつた。と同じく、私は加納一水とも摩擦を起したくないので、聞えないふりをしてゐる。その事が二

私は思ひ出す。あの最初の日、あらゆる肉體の苦痛を豫感しながら、それでもそれを恐れてゐないことを自分に納得させようとして、彼は昂然と居住區の通路に入つて來たのだ。眉一つ動かさぬあの英雄ぶりが、それへの自己陶醉が、彼の鼠のやうに貧しい肉體を昂然と支へてゐたにちがひないのだ。彼はその日以來外出止めとなり、十日に一度の上陸を禁止されてゐた。ある日私が外出番のとき朝用意をしてゐると加納がやつて來て、自分の下宿に行つて自分宛の手紙が來てゐるか見て來て呉れ、と私に頼んだ。下宿先からの文通は堅く禁じられてゐる。曝れたら相當の覺悟をせねばならぬ。それを敢てする所に加納らしいところがあるとも言へやうが、私が默つてゐると

「お前はまだ下宿持たんのだろ。おれの處に行けや。おれの名前を婆に言へばいい」

外出して溫泉などに入り、まだ時間が餘つたから、加納に教へられた道をぶらぶら歩いた。此の溫泉地は名前は割に知られてゐるくせにひなびた町で、板屋根の上に大根が並べてほしてあつたり、低い庇をすすけた猫がひつそり歩いてゐたり、町角の小さな格子窓から湯氣が流れ出る小屋が溫泉宿であつたりした。不規則な路を入つて行くと突當りの傾いた家が加納の下宿であつた。私は緣側に腰かけて芋など食ひながら、老婆としばらく話をした。加納が歸隊時刻を切つたために外出止めになつた事を話したら、老婆はひどく驚いた樣子で

「あの日はわたしがあんなに歸れ歸れと言ふたんぢやがのう」

時間を切ると大變だからと、老婆が時計を見い見い急き立てたにも拘らず、加納は爐端にすわり込み、頑固に動かなかつたと言ふ。歸隊時刻は午後七時であるが古びた柱時計が七時を打つた時、彼は靑ざめた顏でやつと立ち上り、そして老婆に暫くは來られない旨を告げ、そして足早やに立ち去つて行つたと言ふ。訛りの多いたどたどしい老婆の話を聞きながら、私はふと涙の流れさうな氣持を禁ずることが出來なかつた。

「おれはな、罰直がこわいから一所懸命にやつてゐんぢやない。海軍に呼ばれた以上、働くのがお國の爲だと思ふからこそ、精出して暗號も引き、下士官の洗濯だつてしてやつてゐんだ。

それにあいつ等はバッタがおそろしいから兵隊が働くんだと思つてやがる。可哀さうに子供の時から海軍に入つてゐるんで、人間を追ひまはちれねば働かないものと定めてやがる。あいつ等はそんな風にしか頭が働かないんだから、それでもいいだらうが、おれは追ひ廻されて動くことに我慢が出來ないんだ」

何故吊床を一所懸命に吊らぬのかと、私がある時たづねたら、加納ははき出すやうにかう答へた。こんな風にしやべる時は彼の氣分も明るい時なので、これが陰鬱な時だと私の質問など齒牙にかけない。一箇月早く入つたといふ優越を眞正面にふりかざして、毒舌をもつて報ゆる。私が先に破局的な氣持と書いたが、それも私が彼の態度から推察しただけで、本當のところは判らない。が、わざと歸隊時刻を切つたり掃除を忘けて風呂に行つたりするのは、あきらかに常識を逸脱した行爲であり、腹の中で絶望で眞黑になつてゐるとでも解釋しなければ說明つかないことであつた。追ひ廻されて動くことは我慢が出來ぬ、とは彼が私にその度の表現こそ違へ何度も言つたことだから、彼はその思想を私にだけではなく、あるひは追ひ廻す側の連中にも知らせたかつたのかも知れない。それを、歸隊時刻をわざと切る、と言つた表現で示しても、果して兵隊に通じるだらうかと、時に私は輕い嘲けりの心が起らぬでもなかつた。

二月に入つたある夜、私は非番直で寒風の中を烹炊所まで走つて夜食を取つて來た。夜食と

言つてもそれはおほむね下士官や兵長が食つてしまふので、私達は文字通り餘瀝を頂くに過ぎない。それぞれ配り終へると私は下士官が食ふ山芋をせつせとすつた。山芋に書間非番直の兵隊が株を上げようと裏山から堀つて來たものである。夜食を啜る音があちこちでする。私も腹は減つてゐるし食べたくて仕方がないが、それでも我慢して山芋をすつてゐると、通路から先任下士が入つて來た。その顏付が緊張してゐるので私は何事かと見守つてゐるとその後から加納がやせた肩を張つて入つて來た。その表情を見たとき私はまた何か加納がしでかしたなと直感した。

「夜食を置いて此處に集まれ」

加納は苦しげな薄笑ひを頰に浮べて、私達が集まるのを眺めてゐたが、例の長い腕でしきりに額のあたりをこするやうにした。輪になつた私達を見廻して、先任下士がとげとげしい聲で言つた。

「今日、加納がこう言ふことをした。皆良く聞け」

加納はその夜、防空電信室番であつた。そして先任下士が一寸用事があつてそこに入つて行つた時、加納は椅子を並べてあふむけに寢ころび、莫をふかしてゐたのだ。それだけならその場で一つ二つ顎を打たれるだけで濟んだらうが、壁側に据えられた無電機を廻して、敵側の

放送を聞いてゐたと言ふのである。

私はそれを聞きながら先夜のことを思ひ出してゐた。それは私がやはりその當番に當つたときで、所在なさに無電をいろいろいぢくつてゐたら、スピィカアから突然聲が流れ出たので私はぎよつとした。

「……ミンドロ島における日本軍の抵抗はまことに微弱でありました……」

あわてて受信器を廻して聲を斷ち切り、私はあたりを見廻した。聲は鮮かに耳朶にやきついて殘つた。訛りはあるが流暢な日本語であつた。私は背筋の冷汗がひえて行くのを感じながら、再び何となく四周を見廻した。もう一度受言器を廻して見ようかと言ふ欲望が猛然と胸の中で渦卷いた。私はかたく眼を閉ぢ、そのやうな欲望をひとつひとつ潰して行きながら、自分に言ひ聞せてゐた。日本の抵抗が微弱であらうと、日本が敗北しようと、今の俺と何の關係もないではないか。そのやうな好奇心を斷つことで俺は今生きて居れるのではないか。

その聲を聞いた時の戰慄がふいに私の身體によみがへつて來たのだ。あれは私が念頭から忘れようとする世界から直接通じて來た聲であつた。掃布をもつてかけ廻つたり吊床と格闘したりする私の現實も、何時かはあの世界と共に生き又思考出來ると言ふ豫想があるからこそ辛抱出來るので、今の此の慘めな私の現實と並行してあぁ言ふ現實があると言ふことは、私には堪

へられぬことであつた。私は聞くべからざるものを聞いた感じで、しかも二三日はあの言葉についてばかり考へつゞけて來たのだが——

「加納、出て來い！」

先任下士の手に、何時の間にか棒が握られてゐる。兵隊が一人飛び出して行つた。先任下士の手を押へ何か言つてゐる。あの金壺眼をした弓削といふ兵長である。先任下士の手をわづらはすより私がやる、といふのだ。海軍の愚劣なしきたりみたいなもので、二三度押問答の揚句、先任下士は棒を渡し「よく氣合を入れとけ」と捨せりふを殘して居住區を足早に出て行つた。私は加納の顏にその時、何とも言へない苦澁の表情が浮んで消えるのをはつきりと見た。弓削兵長は殘忍な眼を光らせながら、加納をぢらみつけ、棒でとんと床をついた。

「賣國奴！」

額を汗で光らせながら小さな加納の肉體は脅えるやうに後しざりしたが、すぐ顏を上げて昂然と叫び返した。

「賣國奴ではありません」

なに、と弓削は怒鳴つたと思ふと猛然な第一打が振りおろされた。

見るに堪へぬ此の光景も、つひに加納が氣を失ひ、オスタップの水を頭からかけられ、また

その上で叩かれることで終つた。全身濡れ、青ざめた加納の身體をすみに運び、私達は冷えた夜食を喰り、あと片附けをした。吊床に横はりながら流石に加納のことが氣になつて隣の吊床を盗み見ると、加納は吊床にうつぶせにまたがるやうにして、微かな叫き聲を立ててゐた。痛みのためにあふむけに寢られないのは私にも經驗があるので、そのやうな姿勢を取る譯もすぐわかつたが、そんな時は下手に慰さめるよりはほつて置いた方が氣持が樂にちがひないから、私は胸が熱くなるやうな氣持を押へて默つてゐた。私は放送を、自らの手で斷ち切り、聞かなかつた。加納はそれを敢て聞いた。そして殴られた。それだけのことである。しかしそれだけの事を考へることは私に辛かつた。出來るだけ意識をそれにむけないやうにしながら、私は毛布の中にちぢこまつた。肩先がしんしんと冷え、頭が偏よつて痛かつた。明日の日課を物倦く頭に思ひ浮べながら、私はしだいにうとうとと眠つて行つた。

暫らく平穏な日が續いたあと一つの事件(トラブル)が起ると、不思議にいやな事件が次々起つて來る。加納が殴られた翌日、暗號室から暗號書が一冊紛失したと言ふ出來事が持ち上つた。

加納はその朝、起きぬけに弓削兵長にまたなぐられた。吊床が變つてゐたと言ふのである。激しい吊床訓練で吊床につけた名札が外れて飛ぶこともあつて、また新しい名札を作り良い加

減な吊床につけて置く。弓削の名札もそんな具合で外のにつけかへられてゐたに違ひないのだが、兵長級にもなれば最も寝心地の良い、柔かい毛布が澤山入つた吊床だから、外のに變ればすぐ判るのである。勿論その責任は加納にある譯ではないが昨夜のこともあつて加納は顎を三つ四つ打たれたのだ。

昨夜の事にしろ今朝のことにしろ、彼が自ら企んで打たれたのではなく、言はば尻尾を押へられた形であるから、加納としても株を下げた感じが強いらしく極めて陰鬱な顏をしてゐたが、午後三時當直交替になつて一緒に居住區に戻るとき、默りこくつてゐた加納が思ひつめたやうに私にささやいた。

「おれは、あの弓削が憎い」

唇を嚙み蒼い顏をしてゐた。それ切り默つて歩いた。水洟がしきりと流れ、私は事業服の袖で鼻をこすり上げながら、加納のあとをあるいた。居住區に着くと一休みする間もなく彼はネッチングに登つて行つた。弓削兵長の吊床を探し名札をつけ換へるためである。ネッチングのはしごをのぼる加納の貧寒な猫背を眺めながら、私はくしやみがいくつも出て仕方がなかつた。惡感が背筋を這ひ身體のあちこちがしびれるやうだつた。明朝診察を受け暫く休業しようかとぼんやり考へてゐた。

暗號室から前直を呼びに來たのはそれから暫く經つてからである。私達が暗號室に戻つて行つた時も、現直の兵隊は手分けして卓の下や書棚の後ろなどを探してゐたが、それは何處にも見當らなかつたのだ。紛失したのは「天」と言ふ暗號書である。天は終戰間際には、發受信兩用の大型の冊子になつてゐたが、その頃は發信受信が別になつた四六版程の冊子であつた。小さなものだから其處らに紛れ込むこともないとは言へない。もともと此處の暗號室は整頓が惡く、必ずしも私達の當直の時に紛失したのではなく、偶然現直で整理したときに足りないのが發見されたのだ。暗號室にはよその隊の士官や兵隊も時には出入することもあつたし、大ていの當直の交替時に一人は殘ることになつてゐても或ひはそれが守られて居なかつたのかも知れないが、それにしても外部からの盜難と言ふことは私には考へられなかつた。暗號部の準士官や先任士官が蒼い顏で協議などしてゐるのを見ると、何か物々しい雰圍氣があつて、その責任が自分にないことが妙に羨しい氣がした。しかし此の責任は結局上の連中が負ふとしてもその餘憤は必ず兵隊に廻つて來るのだからその點は少し氣懸りでないこともない。今までも一週間に一二度は、近頃氣合が抜けてゐると言ふかどで總員バッタを食つてゐるのだから、行事だと思へば濟むものの矢張り心にかかる。私も一應眞劍な表情を作り、人の探した後の卓の下に一應もぐり込んだりして調べて廻つた。日本の暗號書は朝鮮の部隊に送るとき何時もゴソッと拔か

れてゐると言ふ評判だつたし、今考へると米軍はそんな事に關係なく全部解體してゐた由だから、私達は當時何の爲に仕事に苦勞してゐたのか判らないやうなものだが、その頃は一冊でも紛失するとすぐ暗號書が改變されると言ふ愼重さで、だから此處の暗號士官らの狼狽ぶりも判つて貰へると思ふ。しかし之を外の隊などに公けにするわけには行かないのだから、いくらいらいらしてもその廉で兵隊を毆つても出て來るといふわけにはゆかないので、上の連中は皆不機嫌に眼ばかり光らせて暗號室を出たり入つたりした。その中に何とか名目をつけてバッタを食ふにちがひないと思つてゐたら、その夜もはや總員整列の號令がかかつたのである。早く診察を受けて休業になつて置けば良かつたと後悔したけれど、もう遲かつた。

ところが此の夜のおもむきは何時もと少々異つてゐたのだ。下士官以下全部整列した處で先任下士が何處から見つけて來たのか太い鐵棒を引き摺つて、一語一語顏をひきつらせて訓辭した。此の隊で此の度ある不祥な出來事が起つた。それは言はずとも皆知つてゐるだらう。その爲に暗號士以下非常に心配をされてゐて、私としてはお氣の毒で見るに堪へない。それも直接監督の任にある私の責任であるが、各直長また兵長等の監督に氣合が入つてゐないからこんな事が起つたのだ。此の事件に關する限り若い兵隊には罪がない。私は私のやり方で、此の不祥事のつぐのひをする。――

先任下士は善行章四本も着けた陰鬱な感じのする男である。若い時から海軍で苦勞してゐるに違ひないから、言ふことたつて陰にこもり物すごい處がある。訓辭半ばにして今日は私達一水は叩かれずに濟むらしいことが推察出來たのでその訓辭も比較的樂に聞いたが、打たれる身を控へてあれを聞くと相當こたへるだらうと思つた。訓辭が濟むと、若い二等下士、兵長、それに先任上水あたりまで一人づつ出て行つて、次々に鐵棒でしたたか打たれた。鐵棒の一打一打が私の心に釘を打ち込むやうに響き、風邪性の惡感といりまぢり烈しい嗜虐的な亢奮が、その度に私の肉體を衝き上げて來るやうな氣がした。

翌朝診察を受けたら流行性感冒ときまり、私はネッチングの上に吊床を釣げて一日中寢てゐた。熱が高いからうつらうつらしてゐると間もなく朝の甲板掃除が始まり、その物音が下から聞えて來る。水を流す音、後足で床を蹴立てて掃布を押して行く氣配が近づき、「ま、は、れえつ」とふり絞る聲と一緒にまた方向を換へて遠ざかつて行く。目を閉ぢてゐるから音だけだが、見てゐるよりなほ現實的に心に浮べられた。ほうきの柄で床をつく音、そしてオスタップを引ずる音。かうやつて寢てゐる所を掃除してゐる連中が下からにらめてゐるやうな氣がして、私は身體をちぢめて居たが、やがて潮の引いたやうに音が終ると、遠くで課業始めのラッ

バが鳴るらしかつた。物音絶えた甲板のネッチングに私はひとり横たはつてゐた。

熱の爲かいろいろな觀念が斷れ斷れに浮んで消える。また此の病氣がなほつたら冷たい掃布を握つて甲板を馳け廻らねばならぬことを考へたり、ふいに昔のこと、たとへば故郷に置いて來たパイプの形を思ひ出したりした。思ひ出すことに何の連絡もなかつた。昨夜弓削が鐵棒で毆られた時、三つ四つ目あたりであの頑丈な男がよろめいて片手を床についた。土間の埃で弓削の掌が黄色く染つたが、そのまま立ち上らずにじつとしてゐたのを先任下士が略靴の先で蹴りつけた。戰慄に似たものがその時私の身體を奔り拔け、思はず横を向いたら、さうだ、低い笑ひ聲が聞えたのだつた。私だけしか聞かなかつた。他の誰も聞かなかつた。私の隣りに加納の顏があつて、それが歪んで眼ばかりぎらぎらと光つた。笑つたのは加納だつた。——それは狂氣じみた短かい笑ひだつた。——加納の背丈は五尺一寸位かしら。ネッチングの破目板で何だかごとごと音がする。昨朝加納が吊床の件で毆られたとき唇が切れたのか血がパッと散つた。白い事業服は一滴はねたのが、まるで紋章みたいに見えたつけ。……瞼の裏で何か黄色いかたまりがふくれたり縮んだりするのを眺めながら、私の聯想は次から次へ果しない惡夢のやうにつづいて行くのだが、毛布をかぶつた私の耳に先刻からうるさく何か音が聞えて來るので、私は脚を伸ばして探らうとすると、足指がひやりと冷たいキャンバスに觸れた。毛布をはねの

けて私が起き上ると、破目板の破れを姿を見せぬ物音が走つた。鼠だ、と思ふと私はむやみに腹が立つて、一體何を嚙らうとしてゐるのかとむき出しの右手を破れ目の暗い穴に突つこんだら、指が何かざらざらしたものに觸れたのだ。こんな穴の奥に何が詰めてあるのか、私は腕の肌がぶつぶつになつて來るのを感じながらも執拗に、中指と藥指でそのざらざらしたものを挾み、ずるずると引き出して來たとき、私はぎよつとして思はず指を引いた。それは赤表紙の、まぎれもなくあの天暗號書であつたのだ。あの日猫背の體を丸めて虫のやうにはしごをよぢ登る加納の姿が、その瞬間反射的に頭に擴がつて來た。二重寫しのやうに、弓削が打たれるのを見つめながら暗い笑ひを洩らした加納の横顔が、奇怪な鮮明さで瞼のうらに浮び上つて來た。私は顔の皮が冷たくなるやうな感じで、暗號書を再び穴の奥深く押し込んでゐた。——

暫くなほりたくなかつたけれど軍醫が全治の診斷を下したので、私は止むなく四日目に普通の勤務につくこととなつた。三四日骨休めしたんだから元氣回復したかと思つたら、甲板掃除などかへつて辛くて、日課がまことに面白くなかつた。しかし今怠けるとあとあとに響くと思つて、私は精出して若い兵隊と共にかけ廻つた。毎日冷たい水にふれるから、脚や手にはひびが切れ、風に當つても痛さが浸みわたつた。あとは暖くなるのが唯ひとつの頼みだが、まだ彼

岸まで一箇月もあることだし、指折り數へて待つ外はなかつた。轉勤命令が來るあてもなく何時まで此處にゐるのかと私はうんざりした。實はあの四日間じつと寢てゐた間、私は變に婆婆氣が戻り、此處の勤務の愚劣なことにまこと嫌氣がさして來たのである。勤務も愚劣だが、それを辛抱する自分の姿勢がなほの事醜惡に思はれた。しかし之れは始めから判つてゐることであつた。今更新しく反省することもないのだが、へんに感覺的になまなましく私の嫌惡をそそつて來た。

そんな日の午後であつた。非番直であつたから晝食のあと片附けも終へて暫くを煙草盆でぼんやりしてゐたら、加納が近づいて來て私に誘ひかけた。

「裏の山に山芋ほりに連れてつてやる」

午後は整備作業と言ふので、どうせ暗號書の鉛筆記入か何か肩の凝る退屈な仕事だから、私は二つ返事で賛成した。課業始めの前に出かける必要があつた。整備作業に精出すより山芋掘りに力こぶを入れた方が上への受けは良いのだ。抵抗無き生き方を望むとは言へ、意識的に必要以上の奉仕を上官にする事を自分にかたく禁ずる心は私も持つてゐたが、何かその時は安易に應ずることが出來た。加納もあの日以來は幾分氣持に小康を保つてゐるらしく、荒んだ振舞ひもないそうであつた。

烹炊所の裏から崖に斜についた小徑を、私達は一歩一歩踏みしめながら登つて行つた。天氣は良かつたが、風は登るにつれて強かつた。岩や木の根を摑まへてゆるゆるとのぼつた。徑を前後しながら私はぽつりぽつりと加納と會話を交してゐたが、ふと思ひ付いて

「此の間の放送、あれは何だつたんだね」

私は氣輕な氣持で聞いたんだが、あるひは加納はそれに觸れたくなかつたのかも判らない。少し眉をひそめ、いらいらした表情で私を岩角から見下したが

「――日本が負けるつて話よ」「比律賓の戰局だね」「比律賓だつて何處だつて同じよ。こんなことしてゐて勝つ譯がない」「そりや敗けるかも知れないさ。しかしあれは比律賓だろ？」

加納は機械體操のやうに木の枝をつかんで足を次の岩角にうつしながら

「知りたければ何故自分で聞かないんだ」

さう言ひながら急に腹が立つて來たらしかつた。「その爲に俺は一人で打たれたんだ。俺一人の胸にしまつとく」

腹立ちは判らぬことも無かつたが、私はつい好奇心を押へかねた。

「けちな事を言ふなよ。若い兵隊同志ぢやあるまいし。だいいちお前は運が惡いから打たれたんで、おれだつてそつと聞いたことも何度かあるんだ」

加納は登るのを止めて私を振り返つた。そして暫く默つてゐた。そして又登り出した。頂上はすぐ近かつた。私もついて登らうとすると加納はこちらを見ず低い聲で突然言つた。

「お前はほんとにずるい奴だな」

わけもなくその言葉は骨身にしみるやうな感じであつたが、私は反撥するやうに

「おれがずるいのか。馬鹿正直よりは良いだらう」「馬鹿正直とは俺のことか」「お前とは言はないよ。言はないがだ、さう言ふからにはお前はずるくない」

「さうだ。俺はずるくない」

加納は例のあざけるやうな口調ではきすてた。

頂上であつた。

そこはまばらな枯草原となり、遙かに海の展望があつた。格納庫が小さくいくつも連なり、海上を低く水上機が滑走してゐた。風の具合で音は聞えなかつた。私達は風を避けて岩鼻を廻つた。加納が突然早口で言つた。

「お前は一所懸命兵隊の仕事をやつてゐるが、一所懸命にやつてゐる所をあの連中に見せたいのだらう」

「誰がそんなことを思ふものか。加納一水。それはちがふ」

「おれは、ちがふとは思はん。お前はいつも兵長の氣持を勘定に入れてんだ」
「さうか。さう思ふのなら思つてもいいが、それがお前と何の關係があるんだ」
加納はぼんやりした薄笑ひを頰に浮べた。
「關係はないさ。しかし俺はお前が食器を抱へて烹炊所などへ馳けて行く姿を見たくないだけの話よ」「俺だけぢやない。皆やつてゐる」「皆はやつてゐるさ。しかしお前は三十歳だよ」
私は身體中が冷たくなるやうな氣がした。
「加納一水。年にこだはるのは止せ。兵長の言ひ草ぢやないが、俺たちは年取つても若い兵隊なんだ。仕方がないぢやないか。おれは今の通りやつて行く」
「追ひ廻されて働くのか」
「兵長が一水を追ひ廻すのはあたり前だらう」
「あたり前ぢやないこともあるさ。一水が這ひつくばつてゐるのは、兵長に追ひ廻して呉れと頼むやうなもんだ。だからあいつ等が增長するんだ」
悲しみが俄かにこみ上げて來た。私が懸命に兵隊の仕事をするのもあいつ等と無益のいざこざを起したくない爲だ。それで身を削るやうな事をしたくない爲だ。勿論あいつ等は人間の屑にすぎない。加納は歪んだ自恃の念から、彼等の暴力を恐れて逃げたがる自分を釘付けにし

て、そして苦痛を受ける事で安心してゐる。私は出來るだけ意識をあいつ等から離さうとしてゐるのに、加納はかへつて輕蔑すべきあいつ等に意識をからみつかせようとしてゐる。さうだとすれば、愚劣な現實に頭を下げて角突き合せようとしてゐるのは、私ではなくてむしろ加納ではないか。おれのやり方も悲しいかも知れないが、お前のやり方はもつともつと悲しいのだと、私は默つたまま考へたとき、加納はするどく私の方をながめ、再び突き刺すやうに言つた。

「おれがひとり打たれてゐるとき、お前はどんな事を考へながら見てるんだ」

「何も考へはしない」

「馬鹿な奴だと思つてるんだらう。お前は悧口だから、な」

自嘲するやうな口調であつた。私達は岩角に腰かけてゐた。靜かな怒りが次第に私の胸に擴がり始めて來たのである。私は岩角に手をついて振り返り、わざと憎々しげな口を利いた。

「弓削が打たれる時、お前は笑つてるたな。あんな虫けらみたいな奴が打たれるのが何で嬉しかつたんだ」

ははは、と加納が笑ひ出した。斷ち切るやうに笑聲を止めた。

「おれは笑ひはせん」

「笑ひはせんか。さうか。それならどんな事を考へて眺めてゐたんだ」私の方に加納はむき直

つた。

「へんにからんで來るぢやないか。あいつ等がだらしないから暗號書を持つて行かれるんだ。鐵棒で打たれていいざまよ」

「お前には始めから、その件であいつ等が打たれることは判つてたんだらう」

「あたり前よ。そんな件で俺達一水までお鉢を廻されてたまるか」

「暗號書は——しかし、あれは何處に行つたんだらう」

加納は急にぼんやりした顏になり遠くを見るやうな目付をした。

「——氣象科の兵隊だよ。間違つて持つて行つたんだ」

「それは確かか」

「さうだらう、と俺は思ふんだ。いつもあいつ等は氣象電報取りに出入してるからな」加納の聲はさう言ひながら、氣のせいか不安氣に動いた。私の胸をつく衝動があつて、私は固いものでも呑み込むやうな息苦しさを自覺しながら、かう言つてしまつたのだ。

「ネッチングの破目板からでも出て來たら、また大騒ぎだぜ」

ぎよつと身體を引いたのがはつきり判つた。私の横顏を刺すやうに見つめてゐるらしい氣配を全身で感じ取りながら、私は掌で岩角をかたく摑み、暫く張りつめた沈默がつづいた。脚を

伸したあたりは赤土の短かい急斜面となり、それが終る所に羊齒が枯れ風にゆらぎ、そこからあの赤色の崖は垂直にきり立つらしかつた。氣流がそこらで渦を卷くらしく、微塵が午後の冬陽にちかちかと廻轉する。烹炊所の屋根、砲術科倉庫の屋根、その間を縫ふ赤土の道がまばらな松林に入り、その彼方は薄墨色のくらい海の色であつた。視角のせいか變に距離感がなくて、べつたりと貼りついた感じだが、見てゐると粟立つやうな倒錯が起り嘔きたいやうな厭な氣がした。ああつ、と手を伸して加納が不自然な大きな欠伸をした。岩の上で不安定に立ち上つて、事業服の白い上衣を脱ぎにかかつた。

「さて」聲は服の中に籠つたが「そろそろ山芋ほりにかかるかな」

私も身體を斜めにして手をつき、風景から目を外らしながら立ち上らうとした。その姿勢が無理だつたのか、位置のせいで感覺が倒錯してゐたのか、私には全然判らない、背中を壓するやうなふしぎな力がはたらいたと思ふと、あつと言ふ間もなく視界が急激に錯亂するのを感じ、私は全身から凝集した冷汗を吹き出しながら、赤土の急斜を横ざまに落ちかかつて居たのである。それはおそろしい瞬間であつた。頭の中が彈けるやうに亂れたまま、私は必死となつて何かをつかまうとした。私はしつかりと左手で握つてゐた。それは加納の脱ぎ捨てた事業服の片腕であつた。反對の片袖を、岩角に足を踏張つた加納がにぎつてゐた。雨上りのずるずるした

斜面を、私の兩足は持ちこたへ切れずに一寸二寸とずり落ちて行くのだが、私の右手は枯草の根を摑んでゐるものの、ぶきぶきと厭な音を立てて根が千切れかかるのだ。私は事業服にすがる左手の筋が緊張のために慄へ出すのを感じた。砲術科倉庫のトタン屋根の汚染が、絶望的な高さで眼をかすめた。私は芋蟲のやうな無抵抗にぶら下り、顔を左肩にこすりながら岩の上の加納を必死の努力で見上げようとした。

午後の薄ら日を背にして加絶の顔は、下から見る加減か別人のやうに見えた。瞼が深く垂れ下り、石のやうな無表情である。事業服を僅か支へる彼の細い兩手が、それを私は必死に見つめてゐるのだが、唯表情の無い棒のやうに動かなかつた。非常に長い間さうしてゐたやうな氣もするし、また極く短かい時間だつたやうな氣もする。頰から血の氣が引いて行くのが自分でもわかつた。

(……手を離さうかどうかと考へてゐるにちがひない)

頰を赤土面にこすりつけ、私はも一度左手に全身の力をこめてずり上らうとした。肩の筋肉がめりめりと鳴つた。その瞬間事業服が頼もしい牽引力でずるずると引き上げられるらしかつた。

(しめた!)

私の身體もそれについてずり上つた。右掌が岩角を掴んだ。事業服を兩手で抱き込むやうに引き上げようとする加納の全身が、一ぱい私の視野を占めて來た。私は岩角まで引き上げられたのだ。

烈しい息をはきながら、二人ともすわり込んで暫くは何とも言はなかつた。暫く經つてから私は全身ががたがたとふるへ出して來た。それは押へても押へても止まなかつた。私は顏を兩膝の間に伏せ、濡れた犬のやうに何時までも慄へつづけてゐた。

それから三四日經つて私に轉勤命令が來た。私は海軍一等水兵の正裝をし、皆と帽振つて別れ、正門から出て行つた。振り返る度に隊の兵舍は小さくなり、赤い崖もかすんで行つた。

その後五六箇月經つた頃私は北九州のある通信隊にゐたが、そこにあの赤い崖の航空隊から近頃來たといふ若い兵隊が居て、私はその男から色々話を聞いた。あの隊はその後米機の空襲を受け、兵舍は全燒したといふ。あの暗號書もたうとう見つからずに燃えてしまつたんだなと思つた。通信科の連中はほとんど防空電信室に入つてゐたが、どういふわけか加納一人は入口の處に出てゐて、破片で背中を强打し、すぐ醫務室に運んだけれども暫らく苦しんだ揚句息を引き取つたといふことであつた。空襲をこはがつて防空室に逃げこむ氣持が彼には或ひは我慢

出來なかつたのかも知れない。その話を聞き、私はしばらく暗い氣持から去ることが出來なかつた。あの赤い崖の記憶が灼けつくやうによみがへつて來た。あの時、今でも判らないのだが、私の背を押すやうな感じのしたふしぎな力は、あれは或は加納の掌ではなかつたのだらうか。もしさうだとすれば何故あとで私を救ひ上げたのか。またネッチングに暗號書をかくしたのも果して加納であつたかどうか判らないことだ。それも私の高熱の幻で、破目板に暗號書など無かつたのかも知れない。何でも判つてゐるやうで、私には何も彼も判つてゐないのだ。ただ判つて居ることは——と私は考へる——私があの二箇月間、生涯に無い卑屈な氣持で暮したことだ。そしてそれを恥もなく肯定して居たことだ。

私はその若い兵隊の話を聞きながら、そのやうな事を考へ、また赤い崖や加納の細い襟首の形などを反芻するやうに思ひ出してゐたのである。

贋の季節

「お爺さん」に洋服を着せて舞臺に出したらどうだらう。それを最初に提案したのは私である。いくら夏場とはいへこんなに入りが惡くては仕樣がない。うつかりすると先の町での興行の二の舞だ。すると三五郎が顏色を變へて反對した。

「いくら何でもそんな大それたことが出來ますかい。そいつは人間樣に對する冒瀆だ」

人間樣とは何だらう。冒瀆とはなにか。守るべきそんなぎりぎりの一線を、此の三五郎がまだ保つてゐるのかと思ふと、冷たい可笑しさがおのづと湧き上つて來るのを感じたが、考へて見ると此處の團長にしても團員の面々にしても、最後のよりどころとしてゐるのは矢張こんな種類の奇妙な辻褄のあはない自尊心なので、かういふ私といへども本當のところでは此の類を洩れないのかも知れない。しかし人間を他の動物から劃然と區別する一線などといふものは、各自がてんでに思ひ込んだ妄想に過ぎなくて、人類の祖先は猿猴類だといふが、それは數百萬年も前のことだと皆安心してゐる。安外二千六百年もさかのぼれば身體の端に尻尾をつけてゐたかも知れないのだ。三五郎が血相を變へるなどとは笑止な話だと私がいひ返さうとしたら、

それまで默つてゐた團長が腕組をばらりと解いて口を開いた。

「そいつは思ひ付だ。史記にも沐猴にして冠すといふ文句がある位だからな、見物衆がさぞかし面白がるだらうて」

あたりを見廻して暗い皮肉な笑ひかたをした。團長のうしろの衣裳箱の上には「お爺さん」が背をまるめて蹲つてゐて、時々薄赤い喉をあけて一座をぼんやり見廻したり、長い腕を伸して飛び交ふ蠅をパツと捕へたり、自分のことが話題になつてゐる事には全然素知らぬ風情であつた。もつとも素知らぬのが當然で、此の「お爺さん」といふのは人類ではない。昔から此の曲馬團にゐる、言はば子飼ひの老猿のことなのである。

もともと此の曲馬團は動物運が非常に惡くて、臘鵶鵶に水をやり忘れて殺してしまつたり、大金を出して算術の出來る馬を買ひ込んだらその後の訓練が惡かつたのか神經衰弱を起して使ひものにならなくなつたり、昔は自轉車に乘れる猿も一匹ゐたのだが、御贔屓から贈られたマカロニを五封度もいちどきに食べて、胃を破裂させて死んでしまつた。無病息災なのは此の「お爺さん」だけで、その代りこれは藝當は何にも出來ない。教へこんでやらうと隨分訓練にも手がけたが、教へれば教へる程「お爺さん」は頑固に身を固くして、たたいてもすかしても言ふ事を聞きはしない。つひにはしやがみこんで、さうさう無理言つてわたしをいじめて下さ

るな、と言ひたげな悲しい眼付で見上げるから、大抵そこで妙な氣持になつて匙を投げてしまふ。こいつには覺える能力が無い譯ではないのだ、覺える氣持が全然ないのだと、手を燒いた團長が憎々しげに呟いたのを聞いた事があるが、これは私も同感だ。しかし遊ばしておく譯にも行かないので、奇術や曲藝の時などには舞臺の片隅に箱を出して、その上にすわらせて置くが、そんな時でも「お爺さん」は觀客を意識する風もなく、背中をかいて見たり蠅を捕へたりして獨りで遊んでゐる。老いの一徹といふ感じがする。「お爺さん」の腰には細い鎖が卷きつけてあつて、その端はしつかと柱にとめられてゐる。何故と言ふと此の「お爺さん」には執拗な逃亡癖があつて、思ひ立つと矢も盾もたまらなくなるらしい。此の前の町でも油斷を見すまして脱走を企て、皆は大騷ぎであつた。營當をやる動物などと言ふものは變になまなましく、親しみにくい厭な感じで、むしろお爺さんの方がけものとしては本物だと私は思ふのだが、藝も出來ない癖に逃げたがつてばかりゐてつくづく厭な猿だと言ふのが皆の意見で、前の興行の慘めな失敗もこいつの爲にけちがついたせいだと言ひ出す始末であつた。

全く此の前の町での興行はひどかつた。何しろ入りがほとんど無く、場所が町有地といふ譯で町の役人らが財政困難を糊塗するためにおそろしく高い場所代を吹つかけて來たりして、天幕などを抵當に入れて金を借り興行をつづけたのだが、つひにどうにもならず團長の發案で夜

逃げを敢行した位である。大言壯語はするがしんは氣が弱い團長にしては大決心だつたと思ふが、場所代も借金も踏み倒しての決行だから、夜半から曉方にかけて大急ぎで天幕をたたみ大道具小道具取りそろへ、私どもは落武者のやうに敗走した。そしてやつと此處の町の外れにある川原にたどりついたと言ふ譯だが、團長は平氣な顏を裝つてはゐるけれども、內心追手が來ないかとびくびくしてゐる證據には踊子の弓子が、毎日見に來る變な客がある、と報告した時には他處目にも知れる位きよつとしたらしい。弓子といふのは梯子乘りを專門にする若い娘だ。

「しよつちう來てるのよ。何時も同じ處にすわつて私達の方は見ずに、ぼんやり舞臺の隅っこを眺めてゐたり、天井を見上げたりするのよ。あの人何處かで見たことがあるわ。きつと前の町で見たんだわ。ああ、あの人は前の町の町長さんにそつくりだわ」

話半ばにして團長は奇妙な叫聲を上げ、あわてて飛んで行つて舞臺の袖から客席を眺めてゐたが、やがて打萎れて戻つて來て、どうゝさうらしいと頭をかかへてゐるから、側から三五郎が、他人の空似といふこともありますからと慰めるとそれで元氣を取戻したのか、急に笑ひ聲を立てたり變にはしやいだりしたと言ふことだ。何しろ借金のことになれば天幕その他を差押へられて、曲馬團は潰滅することは必定だから、團長が一時的な惑亂に落ちたのも無理はな

い。しかし潰滅の豫感がかへつて團長に度胸をつけたらしく、その後は變に落着きはらつて團長は皮肉な眼付ばかりをキラキラさせてゐる。その癖何でもないことにひどく神經的に腹を立てて怒鳴つたりするのだ。お爺さんに洋服を着せたらといふ私の提案に贊成したといふのも、勿論確乎とした興行上の成算がある譯ではなくて、一か八かやつて見ようと考へたに違ひないのである。しかし沐猴にして冠すなどと酒落れた事を彼は言つたが、此の言葉が此の場合持つおそろしい意味など感じてゐる譯はないのだ。三五郎にだつて判りはしないだらう。しかし三五郎は道化師だから、それを言葉としてではなく漠然と感じてゐるかも知れない。

三五郎は誠に落魄した道化師で、近頃は頓に藝に自信を失つて來たやうだ。曲藝師として私が此の曲馬團に入團した頃は、三五郎はまだ若くて颯爽とした道化師で、人氣を一身に集めてゐるやうな具合だつた。その頃私は彼にこんな質問をしたことがある。

「道化とはつまり嗤はれることなんだね」

「いいえ、道化とは人を嗤ふ精神ですよ」

若い日の三五郎は眉宇に自信の程を見せてさう答へた。ところが近來、特に終戰後の觀客は三五郎を全然嗤はず、觀衆の氣持をはかりかねて彼は懊惱してゐる樣子だつたが、ある日舞臺で切羽つまつて無意識に演じたある動作がワッと受けて以來、彼はその動作を藝の基調とする

ことに決心したと、ある晩三五郎は醉つぱらつて私に告白をした。

「俺はその仕草を無意識でやつたんだがね、そいつは俺が發明したんぢやない、どこかで誰かがやつた仕草だと、後でいろいろ心の中を探り廻してゐるうちに、ハツと突き當つて驚いたね俺は。何だと思ふ。『お爺さん』の動作だつたんだよ、それは」

そして三五郎はたとへやうもない悲しい表情をした。沈痛な聲になつて先を續けた。

「俺にはお客の氣持が判らなくなつてしまつた。昔の客はそんなものぢやなかつた。もし今の客が猿の眞似なぞを喜こぶんなら、俺はさうやるより仕方がないのさ。だから俺は、俺はお爺さんの眞似をやつて行く」

それから三五郎は暇さへあれば「お爺さん」の擧動をつぶさに觀察してゐることが多かつたが、その眼付は私が見る處によると、むしろ兇暴な殺氣と憎惡に滿ちあふれてゐるやうに見えた。三五郎はお爺さんを憎むと同時に、その眞似で生計を立ててゐる自分を憎まずに居れないに決つてゐるのだ。さう私は思ふ。その「お爺さん」が洋服を着用して舞臺に現はれたらどうだらう。本物が現はれたら僞物が生彩を失ふのは當然で、猿の猿眞似などしてゐる三五郎は直ちに面目を失ふだらう。その豫感が彼をして、人間樣に對する冒瀆だなどと苦しまぎれを言はせたに違ひない。しかし私がこんな提案をしたのはもともと三五郎を困らせようとする氣では

毛頭ないので、近頃入りが少いのも藝が僞物だから鑑賞に堪へないのだらうと察したから、それなら本物を見せてやらうとふと思ひ付いただけで、實をいへば私も「お爺さん」が洋服着た處を想像すると、背德不倫に似た感じに堪へ難くなる。それを超へて私が提案したといふのも胸の底を探れば此の曲馬團の連中を幽かながらも憎む氣持が私にあるらしいからで、當初の道化精神を忘れた三五郎や、いらいらした皮肉ばかり飛してゐる團長や、弓子に思ひをかけてゐる癖に女には眼もくれない風を見せたがる力業士の三光や、その他の面々の哀しい在り樣を私がある感じをもつてしか眺め得ないからである。全く此の曲馬團でまつとうなのは私だけだと思ふのだが、考へて見ると周圍をうとみながらなほ踏み止つてゐる私が一番可笑しな存在かも知れない。私は私に絶望してゐるのだ。だから私は人間にも絶望してゐるのだらう。その絶望を確かめたい爲にも私はお爺さんに洋服を着せて舞臺に立たせたくて仕樣がないのである。それを見て觀客は何を感じるだらう。痛烈な感じで眼が眞黑になつてしまふだらうと想像すると、私は年甲斐もなく胸がわくわくするのだが、しかし考へれば私は三五郎同樣、觀客の何が判つて居るといふのだらう。木戸錢を拂つて中に入りながら舞臺に背を向けて、晝寢をしたり將棋さしたりする近頃のお客の心理が私には判らない。戰爭前私が曲藝師だつた頃はそんなお客は居なかつた。戰爭に引つぱり出され、そして片腕を失つて復員して來た私は、曲藝も出來

ずに雑用夫みたいな形で再び此の曲馬團に雇はれてゐるのだから、舞臺から客と對恃することはなくなつたが、三五郎の言のやうに戰爭このかたお客の樣子が變つたと言ふのも、思へば此の世に不思議が滿ち滿ちてゐて、かへつて曲馬團の中に不思議が見出せないからではないのか。不思議を失つた曲馬團ほど慘めなものはない。舞臺に背を向けて將棋をさす男の方が、舞臺の藝當よりもつと曲馬的だ。戰爭以來婆婆の人間はすつかり變つた。私が理解出來ない歪みみたいなものを背持つてゐる。今日だつてさうだ。舞臺がはねて私が河原に出て夕涼みしてゐると、一人の老紳士が土手から降りて來て私に近づいた。

「つかぬことをお伺ひ致しますが」

見ると此の暑いのにスバツツなど着けてゐる身なりの良い老人であつた。

「お宅でお使ひになつてゐるあの猿ですがな、あれを私にゆづつて頂く譯には參りませんでせうかな」

少し突飛な申出なので私が默つてゐると老人はあわてたやうにしやべり出した。それによると老紳士には十六年前に死去した女親があつて、その風貌姿勢があの「お爺さん」にそつくりだといふ譯である。あの腕の長いところと言ひ顱頂に毛がうすれかけた具合と言ひ、びつくりする程似てゐて、眺めて居ると風樹の思ひに堪へ難いから、何とぞ自分の孝心にめでて金はい

くらでも出すからゆづつてほしいと言ふ譯であつた。冗談言つてゐるのかと思つたら聲音は眞劍で、私も返答に困つて言葉を濁しておいたが、仲々諦めて呉れないので大層弱つた。眞者だか僞者だか判らない。とにかく人間離れがしてゐる、こんな異常な人間に比べると、「お爺さん一の方がよつぽど人間らしい。沐猴にして冠すとはあの時團長が不用意に引用した文句だが、沐猴にして人間服を着用した徒輩の前であの「お爺さん」がどんな演技をして見せるのかと、その光景の豫想は私に一種終末的な感じを伴つて迫つて來る。胸に幽かに尾を引く感じをたどつて行けば、私は同時に此の曲馬團潰滅を漠然たる形で豫感してゐるのだ。その形の中で、私をふくめたおのもおのもが自らの醜く哀しい露床を、憂然と堀りあてることが出來るだらうと、私は切に妄想してゐるのである。

表方に聞くと、此の町には少さな洋服屋が一軒あるきりだといふ。身仕度をして出かけようとすると三五郎が呼止めた。

「洋服屋に行くのか」

さうだと答へると、三五郎は厭な顏をして手を曲げ、耳のうしろをしきりに搔いた。それが

そつくり「お爺さん」の仕草であつた。始めは人眞似で莫を喫んだものが不知不識の中にニコチン中毒に陷るやうに、三五郎の一擧一動には今や牢固として「お爺さん」が根を張つてゐるらしい。當人が意識してゐないだけそれは末路的な感じが深かつた。

「あんなやくざな猿を舞臺に引つぱり出して何が面白いんだ」三五郎はうめくやうにいつた。

「どうしてそんな厭なことを思ひ付くのだらう。戰爭に行つてからお前もずいぶん性格が變つたな」

三五郎はちらちら瞳をあげて私の右袖をぬすみ見た。私の右袖は中味がないから、袋のやうに肩から下つてゐるばかりだ。三五郎のそんな眼付を私は非常に好まない。

「だつて此のままの入りでは曲馬團も解散だよ。變つたところを見せなければ人は來やしない。解散となればお前も飯の食ひ上げだ」

「だからよ、お爺さんに藝が出來るのなら洋服着せて出すのもいいだらうさ。何にも出來ないものを出すなんて、惡どいふざけ方だ」「どのみち今時の世の中はふざけだよ」と私は答へた。

「ふざけるなら徹底的にふざけたがいいのだ」

「そんなものぢやない」と三五郎はいらだたしげに頭を振つた。「ここは少くとも曲馬團だよ。水族館とは違ふ。鳥目をはらつてお客が見に來るのは、俺達の藝だ」

藝とは何だらう。お客が見に來ない藝など有りやしない。人の見てゐない處でやる藝などと言ふものは、單に動作にすぎない。藝とはうぬぼれの凝集したやうなもので、三五郎がことさら自らの藝を强調するのは、きつとうぬぼれを失ひ始めた證據だと思つたから、「ああ、さうだよ」低い聲になつた。「また人生とは自信のことだよ。生きるといふことは自信をなくさないと言ふことだ」少しあざけりの調子がこもつたので、私もむつとして

「ふん、俺が自信をなくしてゐるといふわけかね」

「お前は立派な曲藝師だつた」急に顏を上げて三五郎は私をまつすぐ見た。「片腕をなくして曲藝が出來なくなつたといつて、何かを恨んだりしてはいけない」

「恨んだりはしないぞ。そんな處で俺がよろめくものか。俺は今でも藝人だよ。人間だよ。だから俺はまつとうなものしか認めないのだ」

「お爺さんを出すことがまつとうだと言ふのか」

「蔭武者の藝よりはまつとうだらう」

「蔭武者？」三五郎の眼が俄かに鋭くひかつた。が、直ぐ力無く首を垂れた。「蔭武者だつていいさ。本物なんかゐやしない。本物は寶物さ。蔭武者だつて落伍するより立派だらう」

身體を硬くして私が立つてゐると、三五郎も立ち上つて私の肩に掌をおいた。袋の袖がふら

ふらと搖れた。

「此の曲馬團もどうせ解散だと言ふことは、俺もはつきり知つてゐる。今日もあの變な客が來てゐるのだ。前の町から、樣子をうかがひにやつて來てゐるのだ。舞臺からそいつの眼付を見ればすぐ判る。見物に來たものの眼の色ぢやない。團長がいらいらしてゐるのもそれだ。氣の毒な話ぢやないか。此處が潰れるのは團長の責任ぢやないよ。此の曲馬團も自然と命數が盡きたんだ。使命が既に終つたのだ。俺は二十年近く道化をやつてきた。俺は一所懸命やつてきた俺は仕事を投げ出さなかつた。しかし此處がつぶれたら、俺はきつぱり此の商賣から足を洗ふよ。仕事を、自分を投げ出さなかつたといふことだけが、俺の心には殘るだらう。だから、此の最後の舞臺を、俺はあんな藝無猿の茶番で終らせたくないのだ。俺の爲にも、團長の爲にも、そしてお前の爲にも」

三五郎は私の肩から掌をすべりおとすと、ふらふらした歩き方で小舍の中に戻つて行つた。その後姿がやはり「お爺さん」にそつくりであつた。ふと胸に迫るものを押へながら外に出ると、水の凋れた河面からの照り返しがぎらぎらと眼にしみた。草いきれを分けて土手にのぼり私は暑い往還をてくてく歩き出した。

埃をかむつた夾竹桃の花が軒並に連なる街道を一町程も歩くと、もはや背中は汗びつしより

になつた。落伍者より蔭武者の方が立派だと言ひ切つた時三五郎は痛い眼付でまた私の袖をぬすみ見たが、あれは私を憐んでゐるつもりなのか。腕がないばかりに再び曲藝師として立てないことを、私は落伍したとは考へない。少くとも頭の中ではさうは思はぬ。自分を失つてエピゴネンに落ちた三五郎の方が落伍者だと、歩きながらさう胸の中で叫ぶ度に私はちよん切れた肩のあたりに力を入れるのだが、しかし三五郎はたしかにそこらで自分を胡麻化してゐるに違ひないのだ。自分を投げ出さなかつたと言ふことを心に刻んで、それで足を洗はうなどあまり虫が良すぎる。三五郎が「お爺さん」を眺める眼があんなに憎しみにあふれてゐるのも、三五郎は自分の絶望と對面するのが恐いのだと、さう思ふと何故か山彦のやうに虚しいものが磅礴と私の胸の空洞に擴がつて來た。

教へられた道を歩いて行くと洋服屋は直ぐに見つかつた。深い板廂にとりついて蟬が一匹一所懸命に鳴いてゐた。出て來た洋服屋は山羊に似た顔をした大きな男で、その癖大變横柄な口を利いた。私がただ、洋服を仕立てて貰ひたい旨を申述べると、小さな眼で私を見詰めてゐたが

「君は闇屋か」と突つぱなすやうに言つた。

私が默つてゐると更に重ねて「いま時闇屋ででもなければ背廣は作れないからな」

「闇屋ぢやないよ。俺は廢兵ですよ」
服屋は私の右袖に氣が付いたやうに眼をうつした。そして誰でもが作るあの表情をちらと顏に走らせたが、すぐ眼を外らして
「氣の毒だが猶のこと駄目だ。服の仕立と言ふものはバランスの藝術だからな。腕の無い男の服など俺は作りたくない」
「作つてもらふのは私ぢやない。私は使ひの者ですよ。註文主は町外れで待つてゐる」
服屋は暫く默つてゐたがやがて
「その註文主と言ふのは君みたいな不具ぢやないだらうな」
「いいえ、ちやんと手足が揃つてゐますよ」
「――一言斷つて置くが、俺の仕立に註文はつけさせないよ。好きな型に作つても良いのなら引受けよう」
註文つけないから好きなやうに作つて呉れと私が答へ、それから服屋と一緒に表に出て、また乾いた埃道を取つて返した。歩きながら服屋は、自分は戰爭中にも國民服の仕立を全然やらなかつたと言つて威張つた。國民服ですら仕立なかつたのだから、現在派手な闇屋服など死んでも作る氣にならないと言つた。現代ほど洋服が侮辱された型で作られてゐる時代は無い。今

「俺が慥へるのは英國風の高雅な型の服だ」

終戰後そんな服を製作したことがないから、此度の註文は大層樂しみだと、始めて汚い齒を見せて笑つた。何だかその感じは下司で、言葉の樣柄なのも生得のものでなく、變につくつた感じで、あまりいい氣分ではなかつたが、かうして單純に喜んでゐる處を見れば私は何だか後めたくなつていろいろ言ひそびれてゐるうちに土手まで來た。川風に吹かれて蹲つた爬蟲類のやうな汚れた天幕小舍が眼の下にあつた。何だサアかゝおやないかと言ひながら、それでも服屋は土手の斜面を私について山羊のやうに斷け降りた。

樂屋に入ると、團長椅子に腰かけて腕を組み、埴輪みたいな顏で私達を見た。服屋ですよと私が言ふと團長は立ち上つたが、顏色は惡く無表情のままだつた。側には力業士の三光がしよげたやうに腰をかけてゐた。さげすんだやうな薄笑ひを浮べて樂屋を見廻してゐた服屋が、立ち上つた團長に向つて口をひらいた。

「洋服作りたいと言ふのはお前さんかね」「私ぢやない」と團長は悲しさうな聲で答へた。「私には服を新調する餘裕はない。作つて貰ひたいのは、彼奴のだ」

團長の顎のしやくるまま、樂屋の隅に視線を走らせた瞬間、そこで服屋はあきらかに驚愕し

たらしかつた。二三歩後しざりをしたが忽ち振返つて私をにらみつけた。

「君達はきつと俺をからかつてゐるんだな」からかひはしませんよ」汚ないものを踏み潰すやうな厭な氣分に囚はれながら私は言ひ返した。前もつてお猿さんだと斷らなかつたのは惡いけど、とにかくあいつに似合ふ高雅な服をお願ひしたいのです」

幽かに鎖がぢやらぢやら鳴つてお爺さんが身じろぎをしたらしい。長い腕で膝を抱へ、脅えたやうな瞳を此方に向け、高い聲でキキッと鳴いた。こいつは鳴くだけしか出來ないんだと、低い呟きにふと憎しみが籠つたと思ふと、團長は片手の鞭を威嚇するやうにふり上げた。お爺さんは掌を額にあて燃えるやうな眼付で見返した。私はその時自分の手指がふるへるのに氣が付いた。

「猿の洋服を俺に作らせようと言ふのか」やがて落着きを取戻したらしく變に冷たい險のある聲になつて服屋が言つた。

「この俺に、あの猿の洋服を」

「何故猿の服が作れないんだ」團長が突然聞きとがめていらいらした顏をふりむけた。「猿の服だつて何だつて、仕事に打込んでひけを取らないと言ふことは立派な事だ」

「そりや立派な事だらう。しかし俺はこれでも藝術家だぜ」

その言葉を聞いた時團長の頬に毒々しい笑ひがのぼつて來た。鞭を上げて猿を指した。

「あいつだつて藝術家だよ。お前さんにひけは取らない」

「ふざけるのはよしませう。あの猿が何故藝術家なんだ」

「藝術と言ふのは感動の表現だからな。あいつは何も藝當は出來ないけれど、洋服を着て舞臺に現はれるだけであいつは見物に痛烈な感銘を與へるのださうだ。此處では唯一つの、天成の藝術家だよ」

さう言ひ終ると團長は、何故かへんに冷たい視線でじろりと私にながしめを與れた。服屋は默つてお爺さんの方を一心に見詰めてゐた。暑いのか服屋の額には大粒の汗が並んでふき上つてゐた。そしてそれは次々に頬に流れ落ちた。舞臺の方からは破れたラッパの音が流れて來る。氣の毒なやうないら立たしいやうな變てこな感じに堪へ難くなつた時、やがて服屋が低い聲で口を開いた。

「作れといふなら作つてやりませう。その代り少し高いですぞ」「いくら位だ」

服屋はふと小さな眼を宙に浮かせたが、直ぐはつきり叫んだ。

「二萬圓だ」

團長の頬から急にうす笑ひの影が消えて、もとの埴輪のやうな顔に戻つた。鞭の先で長靴を

ぴしりと打つた。

「よし拂つてやらう。但し出來上つてからの話だ」

寸法を取る時お爺さんはキャッキャッと叫んであばれるので、止むなく私たちが手で押へてゐなければならなかつた。お爺さんは顏を皺だらけに歪めて身體を私の掌の中でむくむく動かしたが、ただれた目蓋の端にうすい涙を溜め訴へるやうないろを眼いつぱいにたたへてゐた。服屋は蒼い顏になり唇を嚙みながら默々として寸法を取つた。舞臺から降りて來た三五郎も道化服のままそれを眺めてゐた。

寸法を計り終へると服屋は直ぐ立ち上つて出て行かうとしたが、振り返つて拳を握つて顏の前で二三度振つた。

「お前たちが着てゐるよりもつともつと立派な洋服を、俺は此の猿につくつてやるぞ。その時になつて驚くな。ちやんと金を用意して置け」

服屋の肩を怒らせた後姿は入口の斜光を亂し、そして天幕の外に消えて行つた。それを見送つてゐた團長が、何を思つたのか突然大きな聲で叫んだ。

「誰か金箱を持つて來い」

三光が持つて來た金箱をあけて、團長はその中を掌でかき廻した。

「皆見てみろ。いくらも入つてゐやしねえ」
「どもすみません」と三光があやまつた。
「あやまつて濟むことだと思ふか」
それから團長はしやべつてゐるうちに段々亢奮して來たらしく、椅子を立ち上つたり歩き廻つたりした。團長がたかぶつてゐるのは、今の服屋の捨臺辭のためだけではなく、傍で三光が逞しい肩をすぼめてしよげてゐるところから見ればどんなことが起つたのかと思つてゐると今日の舞臺で、三光が力業士のくせに重量上げで飛入りのお客に敗北し、懸賞金二千圓を持つて行かれたと言ふ話である。もつとも三光は先日まで痳疹(はしか)にかかつてゐて、こんな年頃になつて痳疹にかかるとは可笑しな話だが、こんなに筋肉だけ畸形的に發達したやうな男の内部にはどこか弱い未熟なところがあるのだらう、そのせいで體力も衰へてゐたに違ひない。團長は鞭で長靴をしきりにひつぱたいた。
一懸賞金が惜しいだけで私は言つてゐるのぢやない。專門家が素人に負かされる、そんな阿呆な話があるか。私が借金したり夜逃げまでして曲馬精神を盛り立てて行かうとしてゐるのに、お前たちは内部から私に煮湯を呑ませるやうなことばかりをする。此處へ來てもう借金が出來たぞ。四五日も經てばあの先刻のインチキな服屋にも二萬圓作らねばならん。客席をのぞいて

見ろ。どれだけお客が入つてゐるか。(此處で團長は眉をしかめた。あの變な客と言ふのを思ひ出したのだらう)お前たちは皆目自信をなくしてゐるのだ。自信をやくざなものと掏りかへてゐるんだ。お前たちは皆僞者だ。お前もだ。お前もだ。(團長は一人一人指さしながら)お前達は揃ひも揃つて、みな糞土の牆だ!」

「糞土の牆、とは何でございませう」床に蹲つてゐた三光がおそるおそる訊ねた。

「うんこの垣根のことだ!」と團長は怒鳴り返した。

「私も糞土のなんとかでせうか」樂屋の隅つこから三五郎もかなしげに眼を光らせて聲を上げた。

「勿論さうだ。糞土以外のものであるか。お前の藝など全くのくすぐりだ。下司だ。あれで自信あるつもりかも知れんが、俺からみれば全くの遼東の豕だ」ぐるつと見廻して今度は私の方を鋭く睨でさした。「お前がまた、うんこだ」

ぎよつとして私が團長を見返してゐると、團長は眼をきらきら光らせながら鋭い口調で攻みかけた。

「猿に洋服を着せようなど、第一その思ひ付が氣に食はん。ことに野卑な復讐の企らみだ」

「だつて良い思ひ付だとあの時賛成したではありませんか」

「賛成などするものか。お前の心根にぎよつとした位だ。嘘をつくのもいい加減に止せ。此の前の町で猿をわざと逃したのもお前だらう」

言ふことが一一背縁にあたつて來たから私は驚きながら

「そりや私ぢやありませんよ。私が逃すわけがない。結目をひとりで解いて逃げ出したんですよ」

「まだ嘘を言ふとる。お前が結目をゆるめてゐた處を見たものも居るぞ」

誰が告口をしたのかと思はず四周を見廻すと、一座の眼がみんな射るやうに私にささつて來て、これも團長の巧妙なわなかも知れぬと私がどぎまぎ考へをまとめかけた時、幸ひ團長の鉾先が私を外れて再び三光に向つたからばゐを出さずに濟んだが、今度は三光が毒舌に堪へかねて、毎日芋や雑粉を食はせられそれで人並の力が出る譯があらうか、と言返したのをきつかけに一座は混亂に陥つて、服屋にはらふ二萬圓で白米を買へと怒鳴るやら、女の子が泣き出すやら、舞臺の方は穴だらけで、止むなくいつもより二時間も早く打出太鼓を鳴して客を追ひ出したのも、まだ夕陽があかあかと河原の唐蜀黍の葉末を染めてゐる程の時刻であつた。

こんな譯で「お爺さん」の服を註文したのが私の獨斷みたいな形になつたが、考へて見るとすべての責任は團長にある譯なので、私は提案者だとは言へあとの點では雜用を果したにすぎないのだ。それにも拘らず一座の面々が私を眺める眼付は變に險をもつてゐて、集つてゐる處に私が入つて行くと、急に皆默りこんでしまつたりする。まさか私を憎んでゐる譯ではないだらうが、どうも變だ。そして言葉の行掛上二萬圓拂つてやると怒鳴つてから團長が、急にすべてに强腰になつたのも、おそらく捨身の心境に到達したからに違ひなく、あるひは洋服だけ受取つて再び夜逃げを決行するつもりではないかとも想像された。しかしそれにも私には割切れない部分がある。暑熱と食物のせいか皆も何か元氣がなくなつて、演技の張りも何時しか失はれてゐるらしかつた。相變らず客席の入りも惡いやうで、樂屋に聞えて來る拍手の音もまばらである。樂屋のすみでは「お爺さん」が物倦げに鎖でつながれてゐた。

「此の前お爺さんを逃さうとしたといふのは本當なの」

弓子が舞臺用の赤い胴着をつけたまま、私に近づいて低い聲で聞いた。樂屋の壁になつてゐる天幕の帆布の止金が打ちかけてゐて、川風にともすればあふられさうになるのを、私は苦心して修繕しようとしてゐたのだ。私は金槌を置いて撫然として答へた。

「あんなに逃げたがつてゐるものを繫いで置くことは、可哀さうだと思はないかね」

「そりや思ふわ。しかし此處にゐれば人參の尻尾だつて何だつて食べられるのに、何故逃げたがるんでせうね」
「お爺さんは一人になりたいのだよ」
金槌を取上げて又私は釘を打つけた。調べて見ると止金は次々朽ちてゐて、皆外れさうになつてゐるのであつた。弓子は可憐な溜息をついた。
「何故近頃皆あんなにいらいらして、怒鳴つてばかりゐるんでせうねえ」
「人間だつてぎりぎりの處は一人なんだよ。傷け合つてゐるのは表面だけだよ」
「何だか皆憎み合つてるやうだわ。三光さんはお爺さんを猿鍋にして食つちまふと言つてるわ」
「本當のことが判れば皆憎み合はなくて濟むのだよ。何でもないことなんだ」
「貴方だつて人を憎んでるんぢやないこと」と弓子がぽつんと言つた。「だつてお爺さんに洋服着せるやうなことを考へ出すんですもの」
金槌を振ふ私の左手にふと力が籠つて、氣がつくと弓子は私の右袖を搖れないやうに指で押へてゐた。微かな苦痛が胸を走るのを感じながら、少し邪慳に私はそれを振離した。
「俺は皆が好きなのだ。好きだからいやなんだ。俺は一人だと判つてゐるから尙のこと此の團か離れられないんだよ」

「だつて此處も潰れるわ。三五郎さんがさう言つたわよ。古里に歸つて百姓するんだつて。あんたはどうするの」

白粉燒けのした弓子の顏が變に年增くさく醜く見えた。

「あなたは昔はとても腕の良い曲藝師だつたんですつてね。それも三五郎さんから聞いたわ」

「早く樂屋へお歸り、三光が見てゐる」

天幕小舍の骨組になつてゐる木材もほとんど朽ちかけてゐて、止金はいくら打ちつけても直ぐにゆるむものらしかつた。女なんか腐つた止金みたいなものだと腹立しく、やがて金槌をほうり出して私も樂屋に入つた。「お爺さん」は今舞臺を降りて來た處で、鎖の端を三光に握られ、床を四足でヒョコヒョコと這つてゐた。私は眼を外らした。私はその時、お爺さんに服を着せるやうな思付きを次第に後悔し始めてゐたのである。そんな事をやつて何になるだらう。洋服を着た猿などは子供の繪本の中だけで結構で、强ひて笑ひたければ三五郎の猿藝でも眺めれば結構なのだ。服を着た猿の痛烈な幻影は私の豫感の中で眞黑に光るだけで、現實に舞臺にお爺さんが出たとしても、後味の惡い笑聲をのこしたまやがて觀た人の腦裡から薄れてしまふだらう。ひとりよがりで私が考へてゐたやうに、その舞臺によつてお客が殺到することは先づないであらう。さうなれば二萬圓の洋服などと言ふものは、ぼろ片よりも價値がなくなつて、

落語の蜜柑の袋のやうに大事にそれを抱へて、再び山越えして夜逃げを敢行する破目になるかも知れない。しかし本當を言へば、それは始めから私に判つてゐたことなのだ。茶番といふのはお爺さんを舞臺に出すことではなくて、まことにそのことだと思ふと、團長が私をののしつて野卑な復讐と言つた言葉が、俄かに鋭い悲しみとなつて胸に突刺つて來た。復讐とは何だらう。私のやうなに現實から手痛いしかへしを受けてゐる身にとつて、私は自分も他人もひつくるめて人間といふものに弱々しく嘲けり返すのがせい一杯で、それをすら野卑と言ふならば、こんな破目に落ちてもまだ絶望せず無感覺な營みをつづけて行かうと言ふ一座の連中は何と言つていいのだらう。それを思ふとすべては朽木に止金をつけるよりもつと果敢ない感が湧き上つて來るのだが、此の無感動な錯綜の中であの變な服屋が作る洋服だけが着々裁たれつつあるのだと氣付くと、私は奇妙な憤衝を押へ難く、居ても立つても居られない氣持になつてまた身仕度して服屋の店に出かけて行つた。

御免と言つて店に入ると、あの服屋は裁刀を逆手に握つて裁臺にかぶさつてゐたが、血走つた小さい眼を上げてじろりと私をにらんだ。見るとあの洋服らしく、すでに七分通り出上つてゐるやうすである。服屋はそれを私の眼前でピラピラ振つて見せ、怒つたやうな口調で言つた。

「どうだ。よく見ろ。こんな立派な服が近頃あるか」

子供服の型とも違ふ變に凝縮した形の服だが、生地は茶色の上等のホウムスパンであつた。仕立は丹念に出來てゐるらしく、服屋の顏はむくんで無精鬚が密生してゐるところから見れば、或は精をつめて此の仕事にかかつてゐるのかも知れなかつた。此んな仕事に精魂つめてゐるらしいことが、何故か突然私の嫌惡を烈しくそそつた。服を手にとり私は氣持を殺しながら裏返して見た。

「なるほど立派な仕立ですね。少し形が可笑しいが」

「あたりまへよ。猿の身體に合はせて作つたんだ」

バランスが取れてゐないやうな氣がする、と言ひかけて私は口をつぐんだ。服屋の山羊のやうな眼が纂奪者のそれのやうに光つたからである。暫くして私は服屋の店を離れた。

又暑い街道をてくてく歩きながら考へてゐると、汗がやたらに滲み出て、佗しい片側町に夾竹桃だけが重く汚れた花をつけてゐるのが、いやに暑苦しく思はれた。一體あの男にあんなに精魂詰めさせる情熱とは何か。藝術の名に於て猿公の洋服をつくるなど、惡魔に魅入られた者ですら考へ得ない悲慘な行事だが、考へて見ると一度は逃がしてやらうと試みもしながら、今度は改めてあのお爺さんにストレートジャケットみたいな洋服を着せてやらうと思付く私自身も、言はば同じく情熱の奇怪な偏向から逃れられないでゐるのだらう。裁刀を逆手にかまへて

あの服屋が確めようとしてゐるのは、服型のバランスではなくて、胸にしまつた平衡器の狂つた目盛なのだらう。さう思ふと私は腹に重たく沈みこんで來るものを感じながら疲れた瞼をあげると、埃の街道を小うるさく行き交ふ荷馬車の響きが耳におちて、荷曳も馬も嘔きたくなるやうな黄色い麥藁帽をかむつてゐるのが何とも目に泌みた。掌を額にかざして陽を避けながら歩いて來るうち、曲角に小さな風呂屋があつて、私はやり切れなくなつて何となくそこへ飛込んだ。毎夕河原で水は溜びてゐるのだが、脂肪の膜で身體中がべとべどになつてゐるやうな氣がする。狹い脱衣所で衣類を脱ぎ、ぬるい湯槽に胸までひたると私は思はず大きな溜息が出た。咽喉のところまで何か黑いかたまりが上つて來るやうな氣がする。手拭ひで顏をぬらして、ふと見ると私の顏の前に、湯から生へ出た耳みたいな首があつて、あはつと言ふやうな咳をして、待ちかまへたやうに私に話しかけた。

「そこでこないだの話はどうなりましたかな」

何のことだか判らない。人違ひをしてゐるのだらうと思つて私が他をむいてゐると、

「お金のことならなんぼでもお出し致しますがな」

それでははつと思ひ出すと、それは少し驚いたことにはあのスパツツを着けた老紳士の顏であつた。生眞面目さうな口調でおそろしく抑揚のない聲なので、心の中では何を考へてゐるの

か知らないが、それにしてもまだこんなことを言つてゐるのかと私は束の間の平靜を亂されて少し腹立たしくなつて來たが、男の首は探るやうに私を眺め廻してゐるのであつた。先程の服屋と言ひ此の老人と言ひ、何と妙な處に力瘤を入れて來るのだらうと、默つて手拭で頭を濡らしながら見返してゐるうちに、ふと私の胸にある企みが湧いて來て、私はよく考へもしないで口を開いてゐた。

「なんぼでもつて、いくら位出す積りです」

「そりや、二千でも三千でも、おつしやるだけすぐ持つて參りますよ」

「二萬圓なら如何がですか」

大へん驚いたらしく老人は變な咳を二三度したが、「二萬圓。二萬圓と」探るやうに呟き始めた。此の前の時は少しねぢが狂つた感じであつたが、今日は顏だけ眺めてゐるせいか仲々まつとうな感じで、ふとこちらが狂つてゐるやうな錯覺に落ちた。たかが一匹の猿に二萬圓出せなど少し氣が變らしいと、老人が考へてゐるのではないかと思ふと、少し居づらくなつて湯槽を出ようとしたら、老人は手拭で湯をぴちやぴちや叩きながら

「いやあ、またいづれ」

確かな響音であつた。

追はれるやうに服を着けながら、思へば異常も正常も人間の決めた約束ごとで、ことに今の亂世では各自が自分の信じることを行ふことが眞實で、他人を異狀と思ふこと自身が既に正常ではないのかも知れないと考へた。そしてあの老人が、どうにか二萬圓持つて來るのではないかといふ氣が一寸したが、風呂屋の外に出て見たらもう老人のことなど忘れてしまつた。また暑い道を歩いた。

河原の天幕小舍にもどつて樂屋に入ると、寮闌氣が何となくざわざわしてゐるから、弓子をつかまへでどうしたのだと訊ねると、また「お爺さん」が逃亡しようとしたのだと言ふ。柱につないだ鎖の環がどう言ふ譯かはづれてゐて、やつと追ひつめて捕へたけれどもずいぶん引搔かれたのもゐるらしい。私が居れば或ひは私に疑ひがかかる處だが、此の前のいきさつもあつて今度は三光に疑ひがかかり、それで一揉めしたとの話だ。見ると三光は濕團扇のやうに張つた肩を柱にもたせ、衣裳箱につながれた「お爺さん」の顏をじつとにらんでゐた。あの日以來團長の命令で、懸賞刀比べの演し物は廢止となり、そのため三光はひどく自尊心を傷けられたらしく、樂屋で休んでゐる時など突然大聲を立てて衣裳箱を目よりも高く持ち上げて見たり、夕食の粉團子を他人の五六倍も食べて見せたり、少し奇矯な行爲が多かつたが、しかし私には三光が猿の鎖を解いたとは信じられない。三光の持つてゐる自意識とは、せいぜい惚れた女に

さげすんだポーズを見せる程度の氣持の裏返しなので、猿の鎖を解き放つやうな高遠で愚劣な所業を犯す筈がない。頃日揚言したと言ふやうに思ひ立てば猿鍋にしていきなり食つてしまふに違ひないのだ。眺めてゐる中に私は此の古びた麹麺のやうな筋肉のかたまりが大へん氣の毒になつて來たので、慰めてやらうと思つて近づいて行くと、お爺さんをにらんでゐたやうに見えた彼の眼は實はぼんやり疲れをたたへてゐて、見開いてゐるだけで私の跫音に鈍く振り向いたが、それと認めるとへんに物倦い調子でひとりごとのやうに言つた。今まで考へてゐたことの續きを、ふと脈絡もなく口にしたと言ふ具合だつた。

「うんこの垣根とは、ありや何のことだい」

そして打ちのめされたやうな笑ひを頬にうかべたが、今度は聞えるか聞えないほどの幽かな聲でささやいた。

「今朝は弓子と何をひそひそ話してたんだい。俺の悪口か」

から私にささやきかけながら、その癖三光の眼は遠くばかり見てゐて、私の方は少しも眺めてゐないのであつた。この男が猿の鎖を解くわけがないのだ。誰か他の人間が解いたに違ひないのだ。誰だか判らないし、勿論私ではない。しかしそれはどうも三五郎であるらしい。その後の情勢から見て何となく私はさう思ふ。

それはそれから三日後のことで、客を打出して後、川上の農家から物交で仕入れた燒酎を、私が川原で夕涼みがてら傾けようと、樂屋の裏口まで出て來ると今まで河水を浴びてゐたらしく三五郎が身體を拭きながら戻つて來るのとばつたり逢つた。三五郎は私が抱へた瓶をじろりと眺めたが、一寸險しい聲になつて、何處へ行くのだ、と私に聞いた。川原で飲まうと思ふ旨を答へたら、硬ばつた笑を頰に浮べて

「なるほどな。祝ひ酒と言ふ譯か」

ひどくさげすむやうな調子なので、まだ「お爺さん」のことにこだはつてゐるのかと、私も悲しく立向ふ氣配を見せて

「そりや惡かつたな。しかし酒でも飲まなきや自信が出せないからな」

「酒のむのはお前の勝手だが、洋服の進行狀態は一體どうだい」

「もう假縫が出來上つて來る頃だ。氣になるのか」

「しかしそれをお前は爺さんに着せるつもりか。爺さんが舞臺に出る前に此の曲馬團が潰れることは、お前だつて百も承知だろ」

「そんな事が俺に判るものか。どうせ潰れるものなら俺は只あの氣の毒な爺さんに一度は晴の舞臺を踏ませてやりたいと思ふだけよ」

「そいつは存分ひねくれた言ひ方だな。そんな事ばかり考へてゐるから、爺さんが腹を立てて逃げ出さうとするんだ」

さては鎖を切つたのは三五郎だな、と私がその時氣が付いてさう言はうとすると、三五郎はむつかぶせて

「で、賣渡しの話はもう濟んだのか」

「それはどう言ふ意味なんだ」

「白ばくれてゐるな。何もかも判つてゐるんだぞ。前の町の追手と何時の間にかこそこそ連絡しあがつて」

言ふ事の意外に私は驚きながら

「お前が言ふのは町長に似たと言ふ男か」

「さうよ。團長が怒つてゐるのもそのせいだ」

私の思ひ付に賛成して置きながら、あの時それを覆へして私を罵つた團長を、私は絶望しかつた人間の末期的症狀とばかり思つてゐたのだが、しかしそれにしてはどうも變だと感じられたのもこんな奇妙な裏があつたのかとむしろ可笑しくなりながら

「お前達はほんとにやくざな人間だな。そんな出鱈目を何故信じ込んでゐるのか。祝ひ酒とは

そんな積りで言つたのか」
「まだ白を切る。では聞くが此の前猿を逃しかけた男が、何で發心して洋服を着せようと言ふんだ。そんな男の言ふことが信用出來るか」
「そりや、お、おれの心の問題だ。お前に何の關係があるか。お前の怒つた顏はお爺さんそつくりだぞ。俺の眞似して爺さんの鎖を切つたりして、自分だけ無傷でゐようなど飛でもない話だ。道化とは嘘ふ精神だと言つたぢやないか。嘘ふ精神とはな、自分を投げ出す處から始まるんだ」
「いいやうなことをよくしやべるな。片腕投げ出すみたいに行くものか」
「そんな事を言ふのか。三五郎。そんな眼付で俺を見るのは止せ」
三五郎はキラキラ光る眼で私の右袖をじつと眺めてゐたが
「お前は俺を憎んでゐるんぢやないだらう。お前は失はれた自分の片腕を憎んでゐるのだ」
「さう思ふならそれで結構だ。たとへばお前がお爺さんを憎むやうにな」
「憎むものか。俺が憎むものは人間のひねくれた根性だ。はつきり言つて置くが、此處が潰れて皆失業者になつて、その時一番困るのは片輪のお前だぜ。俺なんざどうでもなる」「三五郎」と私は呼びかけた。「俺はな、俺の右袖をチラチラ氣の毒さうに眺められるより、今のやうに片

輪だとはつきり言つて呉れる方がよつぽど有難いのだ。ところがお前は、片輪などと言つたら俺が參ると思つてゐるのだらう。俺は此處を潰さうなどと、そんなけちな事を考へやしない。俺が潰したいのは他のものだ。もう言つたつてお前には判りやしない。まだお前は、俺が追手と密談したなどと、痴けた中傷を信じてゐるだらう」

さう言捨てると私は瓶を抱きかへ、背中いつぱいに三五郎の視線を感じながら歩き出した。私の心は重く暗かつた。何か私の知らない罠みたいなものが周到にあちこち張りめぐらされてゐて、それが人と人との關係を縱横に歪めてゐるらしいのだが、その歪んだ流れの中に私も何時しか引きこまれて、何にも判らないうちに私は溺れかかつてゐるらしい。人間は誤解の形でしか他人を解釋出來ないものだらうけれども、ことによると私は私自身を誤解してゐるのではなからうかと言ふ疑念が、荒涼たる形で私の頭の中に擴つて來た。私は川原の夏草の薄い斜面に腰をおろした。ここから天幕小舍は一望の間に見えるのである。斜陽を受けた天幕はその灰色の生地をかくして、綠や金にきらめいて見えるのだ。生地に殘つた胡粉が光線の加減で輝くのである。私は瓶の栓を口で拔き、靜かに唇をあてた。咽喉を燒いて强烈な液體が胃に流れて行つた。そして暫くすると身體中が熱く疼いて來た。私はまた靜かに唇をあてる。

先刻の會話が何かかなしく後味を引いてゐた。私は醉ひが次第に廻つて來るのを感じなが

ら、右袖を後にはねた。何故私はあんな心にも無いことをしやべつたりするのだらう。あの痛いもののやうに私の腕をぬすみ見るたくさんの眼を、私はその時想ひ出してゐた。私は憐れまれたくないのだ。醉ひに沈んだ頭の片隅でさう考へた。憐れみを憎むこととは、しかし何だらう。それを拒むことで私は何を得たのか。そして私が探りあてたと思つたものは鑛石の露床ではなくて、何かどろどろした汚物であつたのかも知れないのだ。

「糞土の牆だつて何だつて良いや」と私は呟いた。さうしてまた瓶を傾けた。その時瞼のうらに突然、延々と重なりつづく黄色の厚壯な壁の幻が蜃氣樓のやうに浮び上つて來た。それは私が大陸で、片腕を失つた瞬間に眺めてゐた城壁にも似てゐたが、またもつとなまなましく身に迫る堆積のやうでもあつた。ある灼熱感が私いつぱいを滿してゐた。その束の間の幻を破つて、雲を脫けた斜陽が河水を彈いた直光となつて、ぎらぎらと瞼に沁みて來た。

★

「お爺さん」の洋服が出來上つて來たのはその翌日のことである。晝過から風が立つて河原の唐蜀黍がいつせいになびいた。天幕小舍の上を風が乾いた音をたてて渡り、その度に帆布はばたばたと騷いだ。舞臺の袖の床の釘が出てゐて、せんから往き歸りに靴がいたむと言ふことな

ので、釘抜で私が引抜きかけてゐると、出を待つてゐた弓子が氣味惡さうな聲を立てて「また來てゐわ。あの人」と呟くのが聞えた。何だいと私が訊ねると弓子は變な表情で私を向き、暫く默つてゐたが

「あの人よ。町長さんよ」

冷淡な口調で、その眼付も今まで弓子に見たことがない堅い色であつた。私がどうしたのかと立上り、袖から客席をのぞくと平土間には四十人程の客がまばらに散つてゐて、その一角を弓子は鋭く指しながら、耳の傍で低く險しくささやいた。

「こないだあの人と河原で話してたと言ふんぢやないの」

その言ひ方が變に憎しみに滿ちてゐるので、もうこんな女の子にまでその中傷は行き渡つてゐるのかと、弓子の指す方向に瞳を定めたとたん、私は思はず何か叫びかけて口を押へたのだ。粗板を渡した腰掛の上に上體を少し反り、顏をあちこち動かしてゐるのは、紛れもなくあのスバッツの老紳士であつた。そして彼の視線が偶然袖からからのぞいた私に落ちたらしく、頭を固定させたまま腰を浮かすらしかつた。あわてて顏をひつこめて弓子と顏を合すと、先刻からじつと私の擧動を見詰めてゐたらしい弓子は、唇を一寸歪めてはきすてるやうに言つた。

「あんたも變な人ね」

變なのは私ぢやない、皆ぢやないかと、私は急に可笑しくなつて來て、返事もしないで弓子を見返してゐる中、考へて見ると誤解の內容があまり簡單なので、辯明すればするほど、私は疑ひを增されるやうな具合で、だいいち親爺に似てゐるから猿をゆづつてくれなどと、いくら血迷つた一座の人にも信用しないだらう。そしてそれを私が半ば信じてゐるといふことをどんな風に說明したらいいのだらうと考へてゐると、何か譯の判らない不安なものがじわじわと私の胸の中に擴がつて來た。それは奇妙に淺く底が割れたからくりの奧に、自分等の漠然とした脅えをあの老紳士に假托してゐた一座の人々の心情の在り方が、俄かに破局的な感じて私を貫いて來たのである。それは誠にいやな豫感を伴つてゐたので、それを押し殺しながら顏を背けて私はもとの仕事に取りかからんとした時だつた。私はきつと可怖い表情を作つてゐたに違ひないと思ふ。蹲つて釘拔を拾ひ上げようとしたら、弓子が急に大さく息を引いたので、首をねぢむけようとすると、樂屋の天井を洩れる靑い光が少し亂れて、裏口の扉がぎいと鳴つた。そして背光に黑く浮き上つてきたのは、身體の恰好であの服屋だとすぐに判つた。釘拔を取落して私は立上つた。釘拔は床でポクッとにぶい音を立てた。

「假縫だ」と服屋は私を認めて靜かな聲で言つた。「猿をつれて來い」

近づいて見ると風の爲か服屋の髮はばらばらに亂れてゐて、小脇には小さな洋服箱をかかへ

てゐた。床におろして開くと白い縫糸の筋を入れた小さな洋服が、服屋の憎悪のかたまりのやうに茶色に整然として收つてゐた。服屋は長い指で髪を亂暴にかき上げた。暫くすると團長やその他の連中がぐるりに集つて來た。舞臺では三五郎の襲が今終る處らしく、散らばつた笑ひ聲が風の音に交つて流れて來た。「お爺さん」は服屋が入つて來た時から、此の前の日の記憶を取戻すらしく、三本足立上つてしきりに身をしざらせた。そして帆布の壁に背をあててこちらを燃えるやうな眼で眺めた。風が吹きつける度に「お爺さん」の部分をのこして、帆布は内側にわかれてふくらんで來た。それは丁度厨子の中に收つた邪神の形であつた。お爺さんの眼は綠玉のやうにきらきら光つた。

弱い者を犯すやうな厭な氣持に堪へながら、鳴き叫ぶ「お爺さん」を私はしつかと押へつけてゐた。掌の中で柔かい癖にこりこりした「お爺さん」の肉體が神經的に慄へてゐた。妙に官能的な嗜虐と、それへの嫌惡が一緒になつて、私は力みながら服を着せる服屋の指を眺めてゐた。それはもやしのやうに青白く長い指であつた。それを見守る皆の顏が、いちやうに私と同じ表情を浮べていることを、私は皮膚ではつきり感じ取つてゐた。チョッキの釦がはめられ、上衣の袖を通す時、細い「お爺さん」の腕の毛が逆さにざらざらとけば立つた。手首まで押へられた「お爺さん」の薄赤い掌が、私の右袖の袋の先をしつかり握りしめてゐた。發作のやう

な鳴聲が次第に低くなつてきた。服を着せるために外した鎖が、衣掌箱からずるずると流れ落ちた。着付が終つたのだ。

私は汗でべとつく掌を離して立ち上つた。何時舞臺から降りて來たのか三五郎が、道化服のままひつそり私の側に立つてゐた。赤インキを丸く塗つた頰がそのまま硬つて、一寸別人のやうに見えた。

「似合ふぢやないか。立たせて見ろ」

團長がかすれた聲で言つた。ひどく苦しさうな表情であつた。

その時裏扉をコツコツと叩く音がした。風に交つた礫が吹きつけるのかと思つたら、間を置いてまた叩く音がした。

「誰だね」と私が怒鳴つた。ギィと鳴つて扉が半分開き、半白の頭がゆるやかに現れて來た。そして身體が扉を押して入つて來た。私は逆光の中でその男の細い縞ズボンと赤靴の間に、薄白く汚れたスパツツを見た。失敗つた、と言ふ感じが超る前に私は周圍のざわめきが一擧に凝縮する氣配を感じて、思はず身體を硬くした。いま時どんなつもりで此の老人は此處に入つて來たのか。先刻私を見て腰を浮かしかけた姿が急によみがへつて來た時、もはや老人は私に視線を定めて、例の生眞面目さうな抑揚のない口調で口を開いた。

「つかんことをお願ひに上りましたが、あのお金の話でございますが――」

そして老人は此の座の變な氣配に氣付いたらしかつた。そこで言葉を切ると頭をかしげてうかがふやうな瞳色となつたが、衣裳箱の上の「お爺さん」を直ぐに認めたらしい。二三歩前に出ながら間のぬけた感嘆の聲を立てた。

「ほお。洋服を着ておいでになる」

「お金の話とは何だ」團長がかすれた聲で誰に言ふとなくあへいだ。誰もしんとして返事しなかつた。皆の視線が私に集中してゐるので、身じろぎも出來ないのだが、しかし私が何とか口を開けば一擧に混亂におちるだらうといふ重苦しい豫感が、なほのこと私をしめつけてゐた。私は喩をやつと動かしてお爺さんに視線をうつした。

「お爺さん」は衣裳箱の上に後足で立ち上つてゐた。そしてしきりに服の胸の部分をかきむしる動作を操返してゐたが、脚が何か重みに堪へかねてくず折れるやうであつた。ズボンの先からは黑い蹠がふるへてゐた。胸をかく動作は何かもだへる形に見えた。その姿體は人間のもだへる姿よりもつと深く眞面目であつた。錐を刺されるやうな苦痛を感じながら、私はじつと眼を動かさないでゐた。「お爺さん」を眺めてゐることよりも、それに視線をしばられてゐることの方が苦しかつた。私は頰の先にも、三五郎の刺し通すやうな視線をぴりぴり感じてゐるので

ある。

またひとしきり風が吹きおこつて、天幕に砂利を吹きつけた。帆布が鳴りながらふくれ上る。朽ちた止金が厭な軋みを立てつづけたと思つた時、釘がはぢけ飛んだらしく微な音が木材にぶつつかり、帆布の一部がぱつと捲れてひらひらと飜つた。風はそこからどつと吹入つた。思はず顏をおほはうとして、私は「お爺さん」の脚が急激に曲げられたのを見た瞬間、「お爺さん」の身體は黑いかたまりになつて風に逆つて外の方に飛んだ。

「逃げた！」

誰の聲だか判らない。視界が突然入り亂れて、私も立上らうとした時、糞ッと言ふ聲と共に道化服の華美な色調が一ぱいに迫つて來て、何だかそこらが無茶苦茶になつて、人の足や手が動き廻り、音が鳴りひびいて皆が猿を追つかけるらしい。何が何だか判らない中に私はしつかと三五郎から組み伏せられてゐた。

「貴樣が。貴樣が！」

あへぎながら罵る三五郎の身體から、私は左肩を下にして押へつけられてゐた。三五郎の兩脚は私の胴をからんでゐて、私の咽喉首を三五郎の熱い手がしめつけてゐたのだ。床が肩に烈しく當り、骨がごろごろと無氣味な音を立てた。三五郎の指がきつく咽喉に食ひ込んで來るの

で、私は左手を床から拔かうとあせるのだが、右肩の支へがないので、ただ上半身がくねるだけであるらしい。汗で滑るのを追つかけ追つかけ、三五郎の指が頸動脈を壓して來て、私はもう少しで頭がしびれるやうな氣持に落ちながら、顏を必死の努力で横に倒した。捲れ上つた天幕の穴から、土手の一部が區切られて見えた。

その一瞬の區切られた風景の中で、土手の端を「お爺さん」は茶色の服をまとつたまま凄まじい速力で駈けてゐた。豆粒ほどの上衣の裾が風にはためいてゐた。その七八間後を色んな人が走つてゐた。長靴をつけた團長もゐたし、細いズボンの老人もゐたし、髮をなびかせた服屋もゐた。兩手を上にあげるやうな走り方で、皆そろつて大豆粒ほどに見えた。頭に血が來ないせいか風景が黃色く色褪せて、古繪のやうな現實感のうすい背景の中を、小さい人と小さいけものは素晴らしい速度で駈けてゐた。土手は黃色く色彩を喪ひ、まるで城壁みたいに凹凸がなかつた。もはや幻影に近い黃色の城壁の上をさんさんたる陽光にまみれながら駈け行く群像の影繪は、既に人間やけものの屬性を失つて、奇怪な惡夢のやうな人形芝居の一場面であつた。ある灼熱が身體から手脚の先に電流のやうに走つた。言ひやうもない深い烈しい悲哀の念が私の胸を荒々しくこすり上げて、私は充血した顏から頭から、汗とも涙とも知れぬ熱いものをいつぱい吹出しながら、はづみをつけて三五郎をはねとばすと、左掌をあげて轉つた三五郎の身

體の上に猛然と摑みかかつて行つた。

あとがき

私は今次戰爭の末期に召集され、下級兵士としての一年餘を海軍に過した。復員して海軍に取材した「櫻島」「崖」を書き、それぞれ季刊誌「素直」「近代文學」に發表した。二篇とも場所や風景はじつさいの体驗によつたが、作中の人物や事件はことごとく架空である。記錄的な効果を、私は始めから企圖しなかつた。軍隊といふ一つの舞台上に、人間のありかたを想定することにより、私はこれらの作品をなした。だから此の二篇は、實錄としての意味はもたぬ。私が追求しようと意圖したものは、おのづから別のものである。

「贋の季節」は昭和二十二年七月に書き、「日本小說」に發表した。ひとつの試みとして私はこれを書いた。試みとしては、ある部分成功し、ある部分は成功しなかつた。しかし此の小說は作品としての出來榮えの如何をとはず、私の系譜の中で或る一つの意味を持つてゐるだらう。

「微生」は昭和十六年の春に書き「炎」といふ小さな同人雜誌に載せた。

小說といふ形式への疑問が、近來起りつつあるものの如くだが、私はこれに組しない。私は單純に小說といふものを信じてゐる。人間が存在する限りは小說もほろびない。小說とは人間

を確認するものであり、だから小説とは人間と共にあるものだ。少くとも私と共に確実にあるといふ自覺が、私を常に支へて來た。私は現在まで、曲りなりにも一人で歩いて來た。他人の踏みあらした路を、私は絶對に歩かなかつた。今から先も一人であるき續ける他はない。そして私は自らの眼で見た人間を、私といふ一点でとらへ得ることに、未だ絶望を感じたことはないし、おそらく將來も感じることはないだらう。

この書が、このたび裝を改めて、月曜書房より出版されるにあたり、月曜書房關係者諸氏の盡力に厚く御禮申し上げる。

昭和二十四年三月

梅崎春生